
大天使に聖なる口づけを

シェリンカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大天使に聖なる口づけを

【Nコード】

N6085R

【作者名】

シェリンカ

【あらすじ】

八年前に失踪したエミリアの母が突然家に帰って来た！…と思ったら、その正体はなんと…天使！？

人間界に落ちたとかいう大天使ミカエルの後継者を捜すため、期限付きで帰って来た母は、ミカエルを見つけ出す事が出来なければまた天界に戻らなければならないらしい。

母と共に暮らす未来を手に入れるため、エミリアは幼馴染のアウレディオ（ディオ）とフィオナと共に、ミカエル捜しに奔走するのだ…

手がかりはエミリアの恋心！？ しかも確かめる方法は「聖なる乙女の接吻」！？って…私のファーストキスの危機じゃないのよ！！
異世界ラブコメファンタジー。

※ブログで連載していた「大天使に聖なる接吻を」の異世界バージョンです。

プロローグ

——その日がとてもいい天気だった事は、よく覚えている。

抜けるような青空の下、坂の上の我が家を目指して、エミリアは懸命に駆ける。

石畳の道沿いにずらっと並んだ家々の壁に、パタパタパタと軽やかな足音がこだました。

新しく買ってもらった皮製の靴は、実を言うとエミリアにはまだ大き過ぎた。

でもそんな事は気にもならない。背中に羽根が生えたかのように体が軽い。

飛ぶように駆ける小さな体を追いかけて、背中まである栗色の巻き毛も、ふわふわと風に靡く。

（お母さん、喜ぶかな？）

走りながら、右手に大切に持っていた紙の筒を、ぎゅっともう一度握り直した。

赤い切り妻屋根が坂の頂上に見えて来たなら、そこからさらに加速する。

白い木柵を飛び越え、緑の芝生を駆け抜け、石階段を上がって、金色の鐘が付いた大きな扉を勢いよく引き開けた。

「ただいまあー」

カランカランという鐘の音と共に、開いた扉の向こうはうす暗かった。

——今日はエミリアの七歳の誕生日。

へエミリアの好きな物、いーっぱい作って待ってるからね」

今朝方、満面の笑顔で学校へと送り出してくれた母は、まだ買い物から帰って来ていないのだろうか。

「お母さん？」

大きな声で呼んでみても、家の中で誰かが動き出すような気配もない。

「いないのー？」

居間、台所、寝室と順に中を覗き込んでみて、ようやく父の仕事部屋で、画布の前にうな垂れて座る大きな背中を見つけた。

「お父さん、ただいまー。ねえお母さんは？……いないの？」

弾かれたようにエミリアをふり返った父は、以前自分で描いた母の肖像画を手に使っていた。

——新鋭画家の父が、これまでで一番の傑作だと胸を張り、いつもは居間の暖炉の上に飾ってある母の絵。

「エミリア……」

父の穏やかな茶色の瞳には、みるみるうちに涙が浮かんだ。

「……どうしたの？」

嫌な予感をひしひしと全身で感じながら、エミリアは尋ねた。

父はまるで溜め息をつくかのように小さな声で、辛い言葉を吐き出した。

「……お母さんは故郷に帰ったんだよ……」

「……故郷？」

エミリアはぼんやりとくり返した。

父の仕事部屋は、保管してある絵が光で変色しないように、もともと窓を少なく造ってある。

うす暗がりの中、お互いがどこにいるかくらいなら分かるが、表情まではよく見えないので、思いがけない言葉を耳にすると、何の事を言われたのだからよく分からない。

「そう……遠い遠い国だよ。もうここには帰って来ない……」

「お母さんが？……もうこの家には帰って来ない……？」

ふいにエミリアの視界の中で、全ての光景がぐにやりと歪んだ。小さな胸がぎゅっと痛む。木の床をしっかりと踏みしめていたはずの足からは、どんどん力が抜けていく。

「……そうだよ」

静かな父の声は、まるで遠い世界から聞こえて来る声のように聞こえた。

あまりにも信じられない内容のせいで、とても現実のものとは思えない。

しかし、いつもならとつくに夕食の支度を始めている時間に、台所に母の姿が無い事。

朝、母が庭に干した洗濯物が、まだ取り込まれずに風にはためいている事。

それらは全て、父の言葉が確かに現実のものである事を物語っている。

なにより——ときに冗談を言う事はあっても根が真面目な父が、こんなに真剣な顔でエミリアに嘘などつくはずが無い。

「お父さん……！」

よろめきながら駆け寄って来た娘を、父は両手を広げてしっかりと抱き止めた。

栗色の頭を胸の中に強く抱き込んで、何度も何度も呟く。

「ごめん。ごめんよエミリア……でもどうする事も出来なかったんだ……！」

さっきまでエミリアが立ち尽くしていた場所には、小さなてのひらから零れ落ちた紙の筒だけが、ポツンと寂しく転がった。

それは、この秋入学したばかりの学校でエミリアが初めて描いた、大好きな母の似顔絵だった。

第一章 母の帰宅 1

——朝、いつもの時間に目が覚めたら、まずは自分の身支度を整え、隣の部屋で眠っている父を起こす。

それから朝食の準備をして、三つの弁当を作り、起きて来た父と朝食。

洗濯をして簡単な掃除を済ませたら、弁当のうちの一つを父のもとに置き、残りの二つを持って、勤務先である街の仕立て屋へと出勤する——

それが、月日と共に行き先が学校から仕立て屋に変わりはしても、規則正しくもう八年間も、エミリアが毎日ずっと繰り返してきた朝の日課だった。

画家としての才能には恵まれたが家事能力は全くない父と、もともと少し浮世離れた了々囲気の母を両親に持つエミリアは、小さな頃から近所でも評判のしつかりとした子供だった。

そして八年前の母の失踪が、それにさらに拍車をかけた。

明らかに気落ちして、仕事も手につかなくなった父を元氣付けるためにも、

「子供の事を考えたらやっぱりねえ……」

と、やたらとエミリアを引き取りたがった親戚達を突っぱねるためにも、

（私がしつかりしなくちゃ！）

とエミリアは、若干七歳にして自分に気合いを入れた。

家事の一切を引き受け、孤軍奮闘し、気が付いてみれば、

「お嫁にもらうんだったら、やっぱりドルトンさんちのエミリアちゃんよねえ！」

と近所のおばさん達からも太鼓判を押されるほどの、折り紙付きの「いい娘」に成長した。

（だって嫌だったんだもん。大好きなお父さんが、『奥さんに逃げられた可哀相な人』って言われるのも……お父さんと無理矢理引き離されるのも……！）

故郷に帰ったという母の事ならば、もうとっくに諦めている。

でも三人で過ごしたこの家を出て行きたくはなかった。

父を一人ぼっちになどしたくなかった。

（だって……お母さんが植えたお花だって庭の芝生だって、私がいなくなったら誰が世話をするの？お父さんに任せてたら、みんな枯れちゃう。この家だってすぐにボロボロになっちゃうわ。あつという間に取り壊しなんて……そんなの嫌よ……！）

もし万が一——百万が一、母が帰って来るような事があったとして、目印になるはずのこの家がなくては、ただでさえ方向音痴の母は、エミリア達のもとに辿り着く事さえ出来なくなってしまう。

（そんな事……きつとあるはずないんだろうけど……）

それでも心のどこかで期待する気持ちは捨てきれないまま、エミリアは頑張った。

庭の手入れも家の掃除も父の世話も、もちろん本業の勉強だって針仕事だって、誰にも負けないぐらいに頑張った。

『母親のいない可哀相な子』なんて、周りに感じさせる隙もないほどに頑張った。

それなのに――。

カリーン、カリーン、カリーン。

朝を告げる教会の鐘が、白み始めたリンデンの街に鳴り響く。
教会の前の広場で羽を休めていた鳩達が、いつせいに空へと飛び立った。

薄紫の空の下、鐘の音と共に人々は寢床から起き出し、新しい一日を開始する。

それは街の外れの住宅街にある家で、父と二人きりで暮らすエミリアにとっても同様だった。

空気を震わすようにして鳴り響いた鐘の音に、寝台の上で丸くなって眠っていたエミリアは、もっそりと体を起こした。

（うん……もう朝？）

両腕を伸ばして大きく伸びをする。

枕元近くの張り出し窓からは、早くも朝陽が差し込み始めていた。窓の向こうからはピイピイと姦しいほどの小鳥の声。

「いけない！」

慌てて寝台から滑り下りたエミリアは、まずは机の上に飾ってあった小さな絵に、いつものように朝の挨拶をした。

「おはよう。お父さん、お母さん」

しゃれた額に収まったその絵には、若い男女が描かれている。

父の師匠が描いてくれた物だというが、いったい何年ぐらい前に描かれたのだろうか。余所行きの上着を着て生真面目な顔をし、直立不動の体勢で立っている父は、エミリア

が毎日顔を会わせている父と比べると、まだずいぶんと若い。

しかし、父の前に置かれた肘掛け椅子にたおやかに腰かけている母は、エミリアの記憶に残る母の姿そのままだった。

流れるような金髪に、透き通った白い肌。宝石のような翠の瞳は零れ落ちるほどに大きく、薔薇色の小さな唇は、まるで微笑のお手本のように美しいカーブを描く。

（お母さん……）

子供の頃ならいざ知らず十五歳にもなった今では、エミリアにも少し、母が変わった人物であるという事が分かってきた。

（少なくともお父さんと会ったばかりの頃と、私が七歳の頃と、見た目が変わらなかったって事よね？）

何度考えても、首を捻らずにはいられない。

（それって、けっこう凄いよね……もし今もお母さんがこの家にいたら、どうだったんだろう？ ひょっとして、まだこの絵と同じ外見だったりして……）

想像してみた事は、ずい分と久しぶりだった。

エミリアは母と全く似ていない。髪は栗色の巻き毛。瞳は薄い茶色。健康的な肌の色も、痩せて背ばかりが高いひよろつとした体つきも、何もかもが父親似だ。絵に描いたような美少女然とした母とは、似ても似つかない。

それでも綺麗な母が自慢で、小さな頃は友達にも鼻高々に紹介したものだっただが、あまりに何度も、へへえ。あんまり似てないんだね……と気の毒そうに言われる事に、年を重ねるにつけ複雑な心境を覚えるようになった。

その思いは積もり積もって、今では少し憂鬱な思い出になっている。

ましてや今現在、母はこの家にいないのだから、迂闊に絵を見せて、へ本当のお母さんなの？ などと疑われても、証明する手段もない。

もちろん私の本当のお母さんよ！と力説する事もなんだかむなし

くて、最近では友達に、母の絵をわざわざ見せる事はしなくなった。だからエミリアの母がどんな人物だったのかを知っているのは、本当に小さな頃からの友人達だけである。

その「小さな頃からの友人達」の中でもとりわけ傍にいて、とりわけエミリアの家の事情に詳しい人物の顔が、ふと脳裏に浮かぶ。「そういえば昨日、明日は何かを食べたいって言ってなかったっけ……？」

柔らかな夜着を脱いで、壁に掛けてあった洗いざらしの普段着へと袖を通しながら、エミリアは首を捻った。

「何か言ってたわよね……お肉じゃなくって、茸でもなくって……うーん？」

思い出せそうで思い出せないというのは、もどかしいものである。それも朝の忙しい時間帯にその堂々巡りにはまってしまったのだから、少々腹が立って来るのも無理はない。

（……だいたいどうして……私がこんな事で悩まなくちゃいけないんだろう？）

服の上に着けたエプロンのリボンを、腰の辺りでぎゅっと引き結んでいると、そもその元凶に対してふつつつと怒りが沸いて来る。（今日のお弁当のおかず何にしようかなって、自分が食べる分ならまだいいわ……お父さんの分だってもちろん喜んで作る。だけど何が悲しくて、お隣さんってだけでついでに作ってあげてる分で、悩まないといけないの？）

しかも相手は、このリンデンに住む女の子ならば、知らない者はいないと言われるほどの、超人気者なのである。

——師匠に連れられて、最近では城にも出入りするようになった、庭師見習いのアウレディオ。

「俺って一人暮らしだから、お弁当を作ってくれる人もいないんだよな……」

などと少し憂いを帯びた顔で俯けば、きっと次の日には街の女の子達からも、王宮に勤める侍女達からも、もの凄いく数の弁当が集まるに違いない人物。

遠くからでも目を引くよく整った綺麗な顔。すらりとした肢体。

印象的な大きな瞳。どこか人を寄せ付けないような神秘的な雰囲気。

それなのに、その問題の人物――アウレディオは、
「あの……もしよかったら……私がお弁当作って来ましょうか？」と親切に申し出てくれる女の子達に対して、いつも無表情に、

「俺はエミリアの弁当しか食べない」と答えてしまうのだ。

そのあまりにつれない口調、さっさと去って行ってしまう冷たい背中に、少女達はみな一瞬呆然と立ち尽くす。そして決まって次の瞬間、行き場のない怒りの矛先をエミリアへと向ける。

アウレディオの余計な一言のせいで、エミリアはこれまでに少なくとも八人の友達を失くした。

顔も知らないような相手からの嫌がらせも、後を絶たない。

おかげで「しっかり者」という誉め言葉の上に「図太い」という表現まで付くようになってしまったのだが、エミリアが被っている最大の迷惑というのは、そんな生易しいものではなかった。

（何が悲しいって……ディオとは本当にただの幼馴染なのに、ほんどの人はそうは見てくれないのよ……！）

泣き伏したいくらいの悲嘆の思いを、エミリアはぎゅっと拳を握り締める事で我慢する。

その件については、本人に直接抗議した事もあるのだが、アウレディオは、〈別にどうだっていいだろ〉とまるで取り合ってもくれなかった。

へそりゃ、将来結婚する相手だって大勢の中から選り取りみどりのディオには、ぜんっぜんたいした事じゃないんでしょけど……私は困るの！誤解されたくない人がいるの！〉

叫ぶエミリアを全く無視して、あの時もアウレディオは、さっさと背を向けて歩き去って行った。

（本当に困るんだから……！）

悔しさに唇を噛み締めながら、エミリアは俯いた。

いつも遠くから見ていただけのある人物の姿を心に思い浮かべると、トクンと胸が鳴る。

緑を基調とした近衛騎士の制服が、精悍な横顔によく似合う。普段は温厚だが、いざと言う時には誰よりも剣の腕も立つのだと言う。真面目で有能で、国王陛下からの信頼も厚い、こげ茶色の髪の新衛騎士――ランドルフ。

考えるだけでドキドキと動悸が激しくなってくる。

エミリアは机の引出しの中から、小さな額をそと取り出した。

中に入っているのは、まだ途中までしか色が塗られていない描きかけの絵の一部分。

肩の位置で切り取られた両隣の騎士達には申し訳ないが、ランドルフだけは額の中央で、灰青色の瞳を理知的に煌かせ、きりりと勇ましく前方を見据えている。

「おはようございます、ランドルフ様……」

額絵を見つめるだけで声が震える自分を励まして、エミリアは今朝も、絵の中のランドルフに礼儀正しく頭を下げた。

「私とアウレディオはただの幼馴染なんです。本当に、なんの関係もないんですよ……！」

しっかりと付け加える事も忘れなかった。

近衛騎士に囲まれた国王陛下の肖像画を描く、という大仕事に父に舞い込み、半年をかけて取り組んでいた間は、身の回りの世話をするエミリアも、ずいぶんと気を遣ったものだった。

なにしろ国王陛下の肖像画である。

父も芸術家の端くれ。後世に残る物として最高の作品を仕上げなければと、いつになくピリピリしていた時期もあった。

出来上がった絵の評判は上々。そのおかげで、父にもようやく画家として暮らしていけるだけのお金と仕事が集まり始めた。

父の出世作——それは、失敗した下絵の中からランドルフの部分を切り取る事が出来たエミリアにとっても、実に実りのある仕事だった。

手に入れた絵に向かって、朝に夕に語りかける日々。

実際のランドルフとは会話した事などなく、彼はエミリアの存在すら知らないわけだが、エミリアはいたって真剣だった。

例えば相手が絵であっても、根も葉もない幼馴染との噂は、しっかりと訂正しておかなければならない。

「本当に本当に、無関係なんです！」

そこだけは、声を大にして何度も叫んでおく。

エミリアのこんな姿を、当のアウレディオが見たとしたら、へ……くだらない」と冷たく言い放たれる事は間違いなかった。

第一章 母の帰宅 2

毎朝の日課どおり。

自分の身支度が終わるとすぐに隣室の父を起こしに向かったエミリアは、扉を軽く叩いてみても中からなんの返答も無い事に、首を捻った。

わりと寝起きが良い父は、いつもだったらすぐに、へやあ、おはようエミリア。今、目が覚めたよと返事をくれるはずなのだが、今日は少し待ってみても返事が返ってこない。

おかしいなと思いつながら、もう一度叩いてみる。

トントントン。

やはり応答なし。

ひょっとしたら具合でも悪くしているのではないかと、焦ったエミリアは慌てて扉を引き開けた。

しかし、いつも通りきちんと整頓された寝室のどこにも、父の姿はなかった。

「……お父さん？」

急いで部屋から飛び出し、その時になって初めて、エミリアは階下から話し声がする事に気が付いた。

（なんだ。お父さん先に起きてたんだ……）

ホッとしたけれども、何かが心に引っかかる。

父は確かに寝起きは良いが、それは誰かに起こしてもらった場合の話。

一人で起きるとそうはいかない。

だからこそ、結婚してからはずっと母に起こしてもらっていたのだし、母がいなくなっただけからは、その役をエミリアが引き継いでいた。

(……そのお父さんが一人で起きてる?)

有り得ない状況に首を捻りながら、エミリアは階段に向かった。木の手摺りを掴みながら一段一段下りて行くと、途中でふいに、プーンと好い香りがして来る。

(うーん、いい匂い……あれ?これなんだろう……?)

クンクンと鼻を動かしながら、匂いを胸いっぱい吸い込んでみる。

その途端、昨日の夕刻のアウレディオの顔が、パツと脳裏に閃いた。

〈明日はオムレツが食べたい〉

言い方はいつも通り無愛想この上なかったが、普段は何を作っていても黙って空の弁当箱を返すだけのアウレディオが、珍しく料理の希望をくれた事が嬉しくて、

(よしっ、明日はオムレツを作ってあげよう!)

などと、エミリアはまるで母親のような事を思ったのだった。

「そうっ!オムレツよ。オムレツ!」

さっきからなかなか思い出せなくて、もやもやしていた事の答えが偶然にも見つかって、エミリアはすっかり嬉しくなった。

しかしすぐさま、もっと大きな謎に首を傾げた。

(待って……? オムレツ……誰が作ってるの?)

もちろん父のはずはない。

父が卵ひとつ上手に割れない人だったからこそ、エミリアが若干七歳にして料理の担当となり、朝夕の食事はもちろん、隣のアウレディオの分まで三つも、毎日弁当を作る係りになっているのだ。

(……じゃあ、いったい誰が?)

大急ぎで階段を下りて、台所に駆け込んだ瞬間に、その答えはあまりにも簡単に見つかった。

その人はまるで昨日までもこの家にいたかのように、ニッコリと

優雅にエミリアに向かって笑いかけた。

「あらっおはよう、エミリア」

朝陽を背に受けて黄金色に輝く長い髪。小さな白い顔。まるで女神のような神々しいほどの微笑み。

(……そ、そんな……まさか……?)

幻を見たのかと、エミリアは何度もごしごしと目を擦ってみたが、目の前の人物はどうてい消えそうにはない。

しかも、とつくに食卓についていた父のとろけそうに幸せな顔を見る限り、どうやら本物に違いないらしい。

「おおお母さんっ?」

驚きと衝撃と疑惑の思いがごちゃ混ぜになったエミリアの大声にも、母の極上の微笑みが崩れる事はなかった。

「うん、そうよ。エミリア……た・だ・い・ま」

あまりにも緊張感の無い、明るい無邪気な声。

八年間必死に張り続けて来た気力が一気に萎えてしまつて、エミリアは台所の入り口に、ヘナヘナと座り込んだのだった。

カリーン、カリーン、カリーン。

夕刻を告げる鐘の音が、夕焼けに染まり始めたリンデンの空に響く。

鐘楼があるのは街の中央に位置する大聖堂。

そのすぐ裏手の大通りに、エミリアが勤める仕立て屋——アマンダの店はあった。

「おや、もうこんな時間かい? こうしちゃいられない。腹をすか

せた旦那が帰って来ちまうよ……マチルダ、エミリア、フィオナ、ミゼット。あんた達も切りのいいところでやめて、今日はもうお帰り」

恰幅のいい店主——アマンダは、見た目以上に太っ腹な気前のいい女性だ。

城の衛兵として働く主人をしつかりと支えながら、この小さな仕立て屋を切り盛りしている。

色とりどりの服地と最新型のドレスを着せたトルソーが並ぶ店舗。その奥に四人の少女達が仕事に励む作業部屋はあった。

椅子に座り黙々と針を動かしていたエミリアは、アマンダの呼びかけに、すぐに今やっている仕事を仕上げにかかった。

「ふーっ、今日も肩が凝ったあ」

大きく伸びをしながら、真っ先に椅子から立ち上がるのは、いつも決まって一番年長のマチルダ。

パツと目を引く赤茶色の髪に華やかな目鼻立ちのマチルダは、手際よくこなす仕事ぶり同様、性格の方もきっぱりはつきりしている。「ミゼット、まだ？ 早くしないと私だけ先に帰っちゃうわよ？」

布地の上に覆い被さるようにして襷飾りをこしらえていた、ぽっちゃりとした色白のミゼットは、慌てて顔を跳ね上げた。

「やだ……もうちょっとだから、待ってよ……」

同じ方角に家がある二人は、いつも連れ立って店から帰って行く。エミリアも、自分と一緒に帰る予定のフィオナにひと声かけた。

「ごめんねフィオナ。私ももうちょっとかかりそう……」

ちょうど真向かいの椅子で、背もたれにももたれずピンと背筋を伸ばしたまま、神業のような速さで裾かがりをしていたフィオナは、大きな黒い瞳でついとエミリアを見つめた。

「ええ、構わないわよ」

綺麗に整った顔を崩す事もなく、エミリアを見つめ続ける暫くの

間も、フィオナの手の方は片時も止まらない。

(凄い……凄いよフィオナ！)

裁縫は得意だと自負するエミリアでも、もし同じ仕事をやったとして、とてもフィオナほどは数をこなせないだろう。しかし――、「ちょうどあと三着で明日までの割り当て分が終わるわ。今日中に仕上げたなら、明日はずっと寝ていられるから……」

フィオナは、もっと頑張ろうとかもっと上を目指そうとかいう向上心とは、およそ無縁なのである。

アウレディオ同様、エミリアにとっては学校に入る前からの幼馴染なのだが、彼女が積極的になにかをやっている姿というのを、エミリアはこれまで見た事がない。

「だって、余計な仕事が増えるのは嫌なもの」

淡々と答えるフィオナに、エミリアはいつも首を傾げたものだった。

「そう？ もったいないな……フィオナはいろんな事が上手なのに……もし私がフィオナだったら、もっともっとってどんどん頑張っちゃうなあ……」

その度にフィオナは、およそエミリア以外には見せる事のない優しい眼差しで、小さく笑ってみせた。

「エミリアはそれでいいのよ……それがあなたのいいところ。でも私は、やらなくていい仕事が増えるのは、真っ平ごめん」

アマンダがおおらかであり口うるさくないという理由だけで、フィオナはこの店で働く事を決めた。

針仕事が好きエミリアも、勤め先を選ぶ時、リンデンに何件もある仕立て屋の中で敢えてこの店を選んだのは、フィオナと一緒にだからという理由も大きい。

取っ付きにくく、近寄りがたいと言われるフィオナだが、昔からエミリアに対してだけは優しかった。

「なに？ どうかしたエミリア？ オーラの色が変よ？」

ぼうつとフィオナの手元を見たまま考え事をしていたエミリアは、

弾かれたようにハッと再び手を動かし始めた。

「ううん、なんでも……ちよつといろんな事を思い出してただけ……」

「そう？」

手は作業を続行しつつ、いまだにエミリアの顔を凝視し続けるフィオナには、隠し事は出来ない。

なぜなら彼女には不思議な特技があるのだ。

さつき本人が口にした通り、人間の肉体の周りに放出される霊気の塊——オーラから、相手の人柄や行動、今の精神状態まで分析してしまう。

気味が悪いと敬遠する者も多いが、フィオナはそんな非難の言葉には全く動じない。

「へ構わないわ。あんな色のオーラの人と、友達でいたいわけでもない」

あっさりと切って捨てる潔さは、エミリアにとって羨ましくもあり、残念でもあった。

（フィオナは本当に魅力的なんだから、自分から遠ざけたりしなければきつともっとたくさん友達だって出来てるはずなのに……）

エミリアが今心の中で考えている事も、きっとフィオナには全とお見通しだろう。

その証拠に、黒い瞳を瞬かせて、へ別にいいの。あなたがいるからと、小さな頃から何度も聞かされた言葉を口にする時のような、優しい顔をしている。

嬉しいような、気が咎めるような気持ちで、エミリアも曖昧な微

笑みを顔に浮かべた時、窓の向こうの大聖堂の方から、きやあつという歓声が聞こえて来た。

「どうやらお出ましのようよ」

フィオナの淡々とした声と同時に、ぽっちゃり体型のミゼットが椅子を蹴倒すような勢いで立ち上がる。

「どうしよう……私まだ全然準備出来てない……!」

「いいから!早くっ!」

ミゼットのふくよかな腕を掴んで、マチルダは髪を振り乱して扉へと向かった。

その背中に視線は向けないながらも、声だけでフィオナが言い放つ。

「その必要はないわ。もうすぐここまでやって来る」

「ええええっ!」

目を剥いてふり返ったマチルダ達ばかりではなく、エミリアも驚愕して思わず椅子から立ち上がった。

「そんなはずないわ。だっていつもは大聖堂の前で……!」

焦るエミリアについて目を向けると、フィオナはエミリアにだけ分かるような、どこか面白がっている風の表情になる。

「そうね。でも今日はここまでやって来る。ほら……」

言葉の途中で窓の外に目を向けたフィオナにつられて、店の前の大通りに視線を巡らしたエミリアは、確かにそこを走り抜けて行く淡い金髪を見た。

地面を揺るがすように足音を轟かせて、その後を追いかけて行く華やかな女の子達の一群も。

「そんな!……だって……待って……!」

「もう遅い」

うろたえるエミリアに向かって、フィオナが無情な一言を投げかける。

その瞬間、マチルダとミゼットが開こうとしていた作業部屋の扉が、勢いよく反対側から開かれた。

「エミリア！」

凜としたよく通る声と共に、部屋に駆け込んで来た人物を見て、
「きゃあああああっ！」

黄色い歓声をあげて手と手を取り合ったマチルダとミゼットにも負けないほどに、エミリアは驚いた。

「ど、どうしたの……ディオ……」

そこにはリンデンの街の貴公子とも称されるアウレディオが、肩で大きく息をしながら立っていた。

第一章 母の帰宅 3

家が隣同士なのだから帰ってから渡せばいいのに、アウレディオは毎日、空になった弁当箱をわざわざエミリアの仕事場近くの大聖堂の前まで持って来る。

いつも決まった時間にアウレディオが佇むその場所は、今では夕方方のリンデンの街の、ちょっとした名所になりつつあった。

大聖堂の石段の前で、何をするでもなく広場や街の様子を眺めているアウレディオは、確かにエミリアの目から見ても絵になる。

スラリと長い手足。自ら光を放っているような淡い金色の髪。晴れた日の空のような蒼い瞳。エミリアの幼馴染でお隣さんの少年は、全てを精密に計算され尽くしたかのように、完璧に整った容姿をしていた。

心持ち壁にもたれかかるようにして立つアウレディオの姿を、夕焼けの中で一目見た女の子は、決まってもう一度見たいと願い、足しげく毎日その時間、その場所に足を運ぶ。

噂が噂を呼んで、夕方の大聖堂前に集まる女の子達の数は、いまや日曜日の礼拝にも負けない数に膨らみつつあった。

そんなアウレディオの待ち合わせ相手として、エミリアはいつも、突き刺さるような非難の視線を一身に浴びていた。

しかし、他の人に対するのと同じように、エミリアに対してもアウレディオの態度はあまりにも素っ気ない。

その上、思い余ってエミリアに危害を加えようとした女の子を、アウレディオは情け容赦なく、すぐさま街の役人に突き出してしまった。

冷淡な対応に恐れをなしたのか、今では誰もアウレディオの前で、エミリアに文句は言わない。

しかしそれほど事をしても、〈今日のアウレディオ様〉を一目見たい女の子の数が、いっこうに減らないばかりか増える一方なのが、エミリアにとっては信じられない現実である。

そのアウレディオが、いつになくエミリアの仕事場にまでやって来た。

それ自体でもかなり驚きだったが、エミリアにもっと大きな衝撃を与えたのは、いつもとはあまりにも違いすぎる、アウレディオの様子だった。

きつく真一文字に結ばれている事の多い唇が、わずかにだが口角を上げて、微笑みのようなものを形作っている。

庭いじりを仕事としているため、ほとんど一日中外にいるわりには色白の頬は、走って来たからなのかほんのりと赤く染まって、あまりにも艶っぽい。

淡い金髪の前髪の下で、見え隠れしている大きな蒼い瞳は、隠しきれない喜びにキラキラと輝いていた。

〈どんな時でも眉ひとつ動かさない〉と形容される事の多いアウレディオのあまりの変貌ぶりに、エミリアは思わずドキリとした。

聖堂の前からアウレディオを追いかけて来た女の子の一群も、思いがけず一番間近で対峙する事になったマチルダとミゼットも、つられて思わず部屋にやって来たアマンダ婦人も、みんな固唾を飲んでアウレディオの次の行動を見守っている。

窓の近くにエミリアの姿をみとめたアウレディオは、真っ直ぐに歩み寄って来た。

妙な迫力と気迫のこもった力強い歩みに、エミリアは思わず逃げ腰になる。

気持ちは懸命に逃げようとしているのだが、アウレディオの深く

澄んだ蒼い瞳に魂を絡めとられてしまったかのように、体の方はまるで言う事をきかない。

「な……何？……どうしたの？」

やっこの思いで絞り出した声を無視して、アウレディオはエミリアにグググッと顔を近付けた。

「きゃああああ！」

案の定、背後で沸き起こる悲鳴の山などには、まるでお構いなし。「……リリーナが帰って来たんだろう？」

何年ぶりかで間近に見たアウレディオの端正な顔に目を奪われていて、エミリアははじめ、何の事を言われたのかよく分からなかった。

しかし暫くして言葉の意味を理解してくると、ついさっきまでドキドキと脈打っていた心臓が、あっという間に静まっていく。

「よく……わかったね……」

エミリアの声が微妙に低くなった事には、気が付いているのかいないのか。

アウレディオは少し目を細めて、はにかむような表情を見せる。

「当たり前だ。エミリアのオムレツと、リリーナのオムレツじゃ、全然違う」

（ふーん、そうですか……）

高揚するアウレディオとは裏腹に、どんどん萎えていくエミリアの気持ち。

「きゃああああ！」

垣間見せた思いがけない表情のせいで、背後ではまたも悲鳴の嵐が沸き起こった。

（リリーナって……幼馴染の母親を名前で呼ぶ？そりゃあ確かに、うちのお母さんは「おばさん」なんて言葉まるで似合わないけど……でも「全然違う」はさすがに失礼よね。仮にも今までずっとお弁当作ってくれた人に対して……そりゃあお母さんのオムレツはふわふわで、私じゃとてもああは作れないけど……それでもお父さん

は、おいしいよって言うてくれてるんだから……!」

考えるうちにだんだんと、何に對してだかはつきりとは分からな
い怒りが込み上げて来る。

そんなエミリアに向かってアウレディオは、よりいっそう瞳を輝
かせながら、思いがけない一言を投げかけた。

「今日是一緒に帰ろう。そのままお前の家に行ってもいいか？」

「ぎゃああああ！」

背後で三度沸き起こる悲鳴。しかも今までので最大。

突き刺さるような視線に命の危険を感じながら、エミリアはこっ
くりと頷いた。

「い……いいんじゃない……」

心の中ではなぜだか、本日二回目の脱力感を感じずにはいられな
かった。

第一章 母の帰宅 4

フィオナと三人、家までの道を歩いているうちは、アウレディオは少し前を歩きながらむっつりと黙り込んでいるばかりだった。

しかし長い坂道にさしかかってフィオナと道が分かされると、ポツリポツリとエミリアに質問を始めた。

エミリアもごく簡単に、自分に分かるだけの事を答える。

今朝起きたら、母が家に帰って来ていた事。

昨日までそんな話は無かったのに、父は全く驚いていなかった事。仕事に行く時間になってしまって、結局詳しい事は何もわからないまま出かけてきた事。

「だから、家に帰ったらお母さんを質問攻めにするんだから……！」
「……そうか」

エミリアの決意は耳に入っているのかいないのか。少し前に行くアウレディオの背中では、今にも踊り出してしまいそうに軽い。

（そうだね。ディオにとっては、小さな頃からの憧れの人だもんね……）

赤ん坊の頃に両親を亡くし、エミリアの家の隣に建つ大きな石造りの家に祖父と二人で暮らしていたアウレディオは、五つの時にその祖父も亡くした。

エミリアの持つ最も古い記憶とは、そのアウレディオの祖父の葬儀の光景である。

日頃は人の出入りも少ない隣の邸に、その日は朝から大勢の人が集まっていて、それがなぜなのかも分からないエミリアは、大喜びではしゃぎ回っていた。

しかしいつもは一緒になって走り回るアウレディオが、黒い服を着た大人達に囲まれて、じっと佇んでいる様子を見て、（どうしたのかな？）と疑問に思う。

「一緒に遊ぼう。ディオ」

どんなに誘ってみても、アウレディオはぎゅっと唇を引き結んだまま、静かに首を横に振るだけだった。

あの日以来、アウレディオはお日様のように輝いていた笑顔を封印してしまった。何があっても表情を変えず、感情を表に出すような事も滅多に無い。

そんな彼が時折子供らしい表情を見せ、本当の母親のように慕っていた人物が、エミリアの母だった。

母もまた、ひとりぼっちになってしまった隣家の小さな男の子を、実の子供であるエミリアと同じように可愛がった。

最初にアウレディオに弁当を作り始めたのは、エミリアの母。

それを引き継いだのがエミリア。

だからアウレディオが久し振りの母の味に感動したのも、母が帰って来た事をこんなに喜んでいるのも、エミリアには良く分かる。

（分かっている……分かってはいるんだけど……）

釈然としない思いを抱えながらぼんやりと歩いていたので、エミリアは急に立ち止まったアウレディオの背中に、思わずぶつかりそうになっていた。

「どうしたの？」

自分より頭一つ分も背が高いアウレディオの肩越し、その視線の先を辿ってみると、そこには他ならぬエミリアの母――その人が立っていた。

腰まである長い金髪。真っ白でふわふわなドレスが良く似合う華奢で小柄な体。とても十五歳の娘がいるとは思えない、その若さと美貌。

すれ違う人はみな、振り返って母を見て行ったが、その中の誰にも負けないくらい紅潮した顔で、アウレディオも一心に母を見つめていた。

（そうだよね。やっぱり嬉しいよね……）

なぜだか溜め息混じりにエミリアが心の中で呟いた時、二人の横を走り抜けて行った小さな男の子が、ちょうど母の目の前まで行った所で、何かにつまづいて転んでしまった。

大切に握り締めていた大きな鳥の羽根が、建物の間を吹き抜ける風に煽られて、見る見るうちに夕焼けの空へと舞い上がって行く。ひらひらと上空に上り、通り沿いに並んだ高い木のとっぺん辺りに、ふわりと引っかかってしまった。

泣き出した男の子を、母が慌てて助け起こしている。

服についたほこりを払い、怪我をしていないかを確認し、おそろくは優しい言葉をかけてあげている。

けれど、男の子が必死に指差している羽根だけは、さすがに母にもどうする事も出来ない。

母は困ったように何度も辺りを見回していた。

しかし男の子の連れの人も、手助けしてくれそうな通行人も、誰も通りかからない。

（お母さん、困ってる……）

急いで駆け寄ろうとしたエミリアだったが、なぜかもの凄い力でアウレディオに建物の陰に引っ張り込まれた。

「えっ？なに？どうしたの？」

理由を尋ねようとした口も、華奢なわりには大きな手で、あつと言う間に塞がれてしまう。

アウレディオは声には出さないで視線だけで、母の方を見てみるとエミリアに促した。それに従ってゆるゆると視線を向けた先に見たものを、エミリアはこれから先、きっと一生忘れないだろう。

はじめは夢かと思った。

自分の目がおかしくなったのかとも思った。

アウレディオが何か悪戯を仕掛けたのだろうか。それとも悪い冗談か。

さまざまな可能性が浮かんでは消えていき、もう何がなんだか分からなくなった時、エミリアはアウレディオの手を振り解いて建物の陰から飛び出していった。

「お母さん！」

母は空を飛んでいた。それも背中に生えた真っ白な羽をはばたかせて。

そうする事でようやく手が届いた大きな羽根を、「はいどうぞ」と男の子の手に戻してあげ、駆け寄って来たエミリアには、まるで悪戯を見つけた子供のように、にっこりと無邪気に微笑む。

「あん、エミリアに見られちゃったわ」

そのあまりに緊張感のない声に勢いをそがれたエミリアは、自分に続いて建物の陰から飛び出して来たアウレディオを、必死の思いでふり返った。

「ねえどういう事なの？ 訳が分からない！ ……これは現実？ それとも私が夢を見てるの？ ……よりによって私のお母さんが… いったいどうして？」

にこにこ笑ってばかりの母に代わって、いつも冷静なアウレディオだったら、何か答えをくれるかもと一縷の望みをかけたのだったが、その思いは届かなかった。

当のアウレディオは、エミリアの事などまるで視界にも入らない様子で、真っ直ぐに母だけを見つめて微笑んだ。

「おかえり、リリーナ」

母もまた、体はまだ少し宙に浮いたままの状態だというのに、小首を傾げて金色の髪をふわりと揺らし、見惚れそうなほどの笑顔で笑う。

「ただいま、アウレディオ。ふふっ、ディオにも見られちゃった……」

その微笑みは、背中の羽と、母の背後に今まさに沈みゆかんとしている夕陽の輝きと相まって、天使そのものにしか見えなかった。あまりにも美しすぎて、母が確かに人ならざる者であるのだという事を、エミリアに思い知らせる。

今にも母の姿がこの場からかき消えてしまいそうな、不安を胸に呼び起こす。

しかしその実、心に積み重なった、

（なんなの？背中に羽？……どうして私のお母さんが？いったいどういう事？）

という疑問の山を誰にも聞いてもらえないエミリアこそが、今この場所で一番孤独な存在だった。

第一章 母の帰宅 5

暖かな光が窓から差し込むうらかな午後。

居間に置かれた布張りの椅子に深々と腰かけて、エミリアは湯気を立てる紅茶の芳しい香りを、胸いっぱい吸い込む。

紅茶はもちろん大好きなミルクティー。

横には母の手作りのお菓子も添えられており、かく言う母ももちろん、向かいの席に座って、にこにこ微笑んでいる。

その日の午後のひとは、エミリアがこの八年間、密かに心の中で思い描いてきた理想のティータイム――まさにそのものだった。

しかし残念な事に、その時のエミリアは、とても落ち着いて今の状況を楽しんでいられるような精神状態ではなかった。

母の思いがけない姿を目撃し、その場はともかく何も言わず、黙って家まで帰って来たエミリアだったが、その道中、アウレディオと母との間で交わされたのは、

「元氣だった？」

とか、

「俺、今庭師の仕事をしてるんだ」

とか、あまりにも普通の会話。

「お母さん！ 家に帰ったら、絶対にきちんと説明してもらいます！」

とはじめは息巻いていたエミリア自身も、目にした光景のあまりの荒唐無稽さに、いったい何から聞いているのかが分からなくなってしまう。

花柄のカップを膝に抱えたまま、少し困ったように上目遣いでエ

ミリアの顔を見つめている母は、どうやら自分から話を切り出すつもりは無いようだ。

（このままじゃ埒があかないよね……）

紅茶をいっきに飲み干して自分に発破をかけ、エミリアはついに口を開いた。

「お母さん！……さっきの事なんだけどね！」

パツと花咲くように笑った母は、エミリアに向かって心持ち体を乗り出し、その先をどうぞと言わんばかりにこくこくと頷く。

「あの、あのう……そのね……」

しかしその先何と言っているのかが、エミリアにも分からない。

（まさか自分を生んでくれた母親に向かって、「お母さんって、天使なの？」は無いでしょう……）

だからと言って、他に何と聞いたらいいのだろう。

（こういう時こそ、ディオが何か助け舟を出してくれるといいんだけど……）

隣に座るアウレディオに視線を向けてみても、さっきからずっと知らん顔して紅茶を飲んでいるだけ。

（もうっ！）

当てにならない幼馴染にはさっさと見切りを付けて、エミリアはなんとか自分で、当り障りのない言葉を探し出した。

「さっきの羽……本物なの？」

母は宝石のように綺麗な翠色の瞳を真っ直ぐにエミリアに向けたまま、こっくりと頷いた。

「お母さんの背中から生えてるの？」

またもこっくり。

「それって……お母さんは人間じゃないって事？」

母はもう一度しっかりと頷き返してくれたが、その笑顔はどこことなく寂しそうにも見えた。

「お父さんはこの事知ってるの？」

母の笑顔はもっと寂しそうになる。けれどエミリアのその質問に

も、確かに肯定の意味で頷き返してくれた。

「そうか……」

ただただエミリアを見つめ続ける母の表情は少女のように儚げで、まるでこれ以上何かを言ったら、泣き出してしまいそうだった。

同じ事をアウレディオも思ったらしく、紅茶を飲む格好はそのま
まに、エミリアに視線だけで、（もう止める）と命令を送って来る。
（ディオに言われなくなつて分かつて……だって私はお母さんの
娘なんだから……）

同じく視線だけで言い返すと、エミリアは精一杯声の調子を明る
くして、母に向き直った。

「じゃあ、もういいや。お母さんが私のお母さんである事には変わ
りはないんだし。うん、もういいよ」

見る見るうちに母の大きな瞳から涙が零れ落ちた。

感極まつて椅子を立ち上がり、エミリアに駆け寄って来る。

首に縋り付くように両腕を回して、栗色の頭を抱き締めた。

「ごめんね、エミリア……黙っててごめんね。寂しい思いさせてご
めんね……」

母の華奢な腕にぎゅっと抱かれながら、エミリアはぼんやりと、
この八年間の事を思い出していた。

八年前のあの日、まさに忽然と姿を消してしまった母を、エミリ
アは恨んだり、嫌いになったりはしなかった。

それは、いつになっても相変わらず母の事が大好きな父と暮らし
ていたからだだし、アウレディオやフィオナのような小さな頃か
らの友達が、母との思い出をエミリアと一緒に、宝物のように大事
にしてくれたからだだった。

母を思い出す時は、悲しいよりも寂しいよりも先に、温かく優し
い気持ちになる。

それはきつと、今でもずっと変わらず、エミリアだって母を大好きだからだ。

（ああ、お母さんが帰って来たんだなあ……）

細い腕に抱かれていると、その事を改めて実感する。不思議と涙が溢れて来た。今は、子供のように泣いてしまっても優しく頭を撫でてくれる人がすぐ傍にいる――その事がとてもなく嬉しかった。しばらくの間、エミリアと母は抱きあったまま静かに涙を流し続けた。

アウレディオは何も言わず、そんな二人からは視線を逸らして、ただ紅茶を飲んでいたが、その表情はいつになく満ち足りて穏やかなものだった。

母が煎れ直してくれた温かい紅茶のカップを手には、エミリアは落ち着いてもう一度、椅子に腰を下ろす。

向かい合って改めて眺めてみると、確かに母は天使以外の何者でもなかった。

よく絵の中の天使が着ている白いズルズルとした服を着せてみたなら、そのまま教会に飾られている宗教画にだってなれそうだ。

「お母さん、本当に天使なんだね……」

しみじみと呟くエミリアに、母はどこか誇らしそうに微笑む。

「そうよ。天界っていう所から来たの。神様がいらっしゃる所ね」
さも当たり前のように言っているかのような口調に、エミリアもアウレディオも思わず目を見開いた。

「神様って……本当にいるの？」

「もちろんよー。お母さん、これでもじかにお会いできるぐらいの処でお勤めしてたんだからー」

嬉しそうに胸を張られても、いったいどんな反応を返せばいいのかよく分からない。

「へ、へええ」

エミリアの返事は少し乾いたものになってしまった。

その様子に、隣でアウレディオがふうつと溜め息をつく。

いかにも、（なんだよその返事……）と言いたげな態度に、エミリアは少しムツとした。

（だって……他になんて言ったらいいのよ……？）

ところが母は、そんな二人の剣呑な雰囲気になど気付いていないらしく、とても有り得ないような話を、さも当たり前のように意気揚々と続ける。

「お母さんねー、本当は十五年前に大事なお仕事があって、人間界に來たんだったの」

（に、人間界……？）

エミリアは再び疑問の呟きを漏らそうとしたが、隣に座ったアウレディオに軽く足を蹴られた。

ムツと目を向けると、大きな蒼い瞳が、（いいから黙ってろ。話が進まないだろ）と語っている。

その迫力に気圧されて、（はい……）エミリアはすごすご言葉を呑み込んだ。

「でも失敗しちゃって、というかお父さんと出会ってしまっ……」
両頬に手を当てて、陶器のような白い肌をほんのりとうす桃色に染める母は、エミリアの目から見ても少女のように愛らしい。

しかし恥らいながらも嬉しそうに、父との出会いから思いが通じ合うまでの恋物語を延々と聞かされていると、エミリアとアウレディオの方が、母よりもよほど赤面してしまう。

「お父さんと恋をして、エミリアも生まれて、人間界でこのまま暮らしたいなーなんて思ってたんだけど……それはやっぱり簡単には出来ない事だったの……」

薔薇色のロマンスからいっきに八年前のあの日へと、エミリアは意識を引き戻された。

――エミリアの七歳の誕生日。

前日までへプレゼントは何にしよう？とかへ料理は何がいいかしら？と本人以上にとっても楽しみにしていた母は、当日エミリアが学校から帰った時には、忽然と姿を消してしまっていた。

「それで……私の七歳の誕生日に、突然いなくなっちゃったんだね……」

今度ばかりはアウレディオも、エミリアが母の話に口を挟むのを邪魔はしなかった。

「ごめんね、びっくりしたでしょう……？ お父さんとは、いつかそんな日が来るかもしれないねって話してたんだけど、エミリアはなんにも知らなかったんだもんね……」

あの日の悲しい気持ちがありありと胸に甦ってきて、思わずまた泣き出してしまいそうになるのを、エミリアは必死に我慢した。

「エミリア、頑張ったね……遠くからだけど、お母さんずーっと見てた。エミリアの事だったら、なんだって知ってる。でもね、お母さんも頑張ったの。なんとか人間界に帰れるように必死にお願いしたの。八年もかかったけど……」

「それで？お母さん、今度こそここで一緒に暮らせるの？もうずっとここに居られるの？」

飛び付くようなエミリアの問いかけに、母の翠の瞳が一瞬揺らいだ。苦しそうに眉根を寄せ、静かに首を横に振る。

「ううん。私が今回人間界に来たのは十五年前のお仕事の続きなの。今度こそは絶対に成功させないといけない……その結果次第では、ひよっとするとずっとここにいられるかもしれないけど……でもそしたら……」

母の話はまだ続いているようだったが、エミリアの耳にはすでに聞こえていなかった。

（仕事が上手くいったら、お母さんとずっと一緒に居られるかもしれない！）

その事実だけが、すっかり心を支配してしまっていた。だから母の話の続きも待たず、勢い込んで申し出る。

「お母さん、私手伝うよ。お母さんのその仕事ってやつ、私も手伝う！」

母は少しホッとしたように、けれどもなぜだか少し辛そうに、エミリアの顔を見つめた。

「ありがとう……本当はこの仕事、エミリアの協力がないと出来ない事なの……」

「え？……私？……だったら私にお母さんが天使だってばれなかったら……いったいどうするつもりだったの……？」

「ふふっ、それもそうね……」

「何ー？変なの。本当に大丈夫なの？」

笑いながら首を傾げるエミリアに合わせて、母も笑った。

しかしその時の母の実際の胸中は、とても笑えるようなものではなかった。

（エミリア、ごめんなさい……）

この先とんでもない使命を負わせる事になる娘への、懺悔の思いでいっぱいだったのだった。

第二章 秘密の任務 1

「エミリア。昨日、何か良い事でもあった？」

翌日、アマンダの店に着くとすぐに、エミリアはフィオナに尋ねられた。

全てを見通しているかのような大きな黒い瞳が、店舗に入ってきたエミリアを、奥の作業部屋から真っ直ぐに見つめて来る。

「オーラがすごく良い色してるわ」

フィオナ特有の表現に、隣に座って作業をしていたマチルダは、ふうつと息をついた。

「また始まった……」

言い方はあまり友好的ではないが、マチルダはフィオナを快く思っていないわけではない。

その証拠に、フィオナへと若干体を向けながら、

「それで？ どこがどんなふうの良いのよ？」

これからドレスになるはずの服地に待ち針を打ちつつ、問いかける。それは、今まで多くの人間が「気味が悪い」とフィオナを敬遠する様子をずっと目の当たりにしてきたエミリアから見れば、かなり仲のいい関係と言っても良かった。

フィオナも、マチルダに少しは心を許しているらしく、

「そうね……いつもの白い光に黄色が混じって……」

などと具体的な解説を始める。

「ふーん」

ちゃんと聞いているのかいないのか。

膝の上では着々と仕事を進めるマチルダに遅れをとらないようにと、エミリアも慌てて自分の椅子に座った。

昨日やりかけの仕事を、ミゼットに取ってもらっていると、

「でも、嬉しいばかりじゃなさそう。困ってる感じもあるのかしら？」

フィオナがいきなり話の矛先を、エミリア本人に向けて来る。

昨日から密かに抱えていた複雑な心境を見事に言い当てられて、エミリアは思わず大声で叫んだ。

「そう！　そうよ！　そうなのよ！」

藁にもすがりたい心境だったエミリアは、昨日母に教えてもらい、これから自分が手伝わなければならない「母の仕事」の内容を、差し障りがない程度に仕事仲間達に語り始めた。

もちろん、エミリアの母が実は天使だったなんて、とんでもない事実は秘密で――。

昨日あれから、楽しい午後のティータイムに母がしてくれた話は、思わずエミリアが悲鳴をあげずにいられないような内容だった。

「一口に天使と言っても、その数は人間ほども多くて、いろんな階級に分かれているの。」

特に能力に優れていて、神様の近くに仕える事を許されているのが大天使。天使を束ねる立場の人達ね。主な大天使は七人いるけれども、中でも有力なのが四方を受け持つ四大天使――ミカエル、ガブリエル、ラファエル、ウリエル。この四人は遥かな昔から、地位と役割をその名と共に、子から孫へと受け継いで来た。でもその中の一人――ミカエルの後継者が十五年前に行方不明になってしまったの。どうやら人間界に落ちてしまったという所まではわかっているんだけど、どこにいいのか、今どんな姿になっているのかも全然わからない……」

母の話を、まるでお伽噺でも聞くように何気なく聞き流していたエミリアは、「十五年前」という言葉に、半分閉じかけていた目をパチッと見開いた。

「お母さん！　もしかして十五年前に、その『ミカエルの後継者』

とやらを捜しに、人間界に来たんだっただけ？」

いかにも興味なさげな娘の態度を、内心心配に思っていたらしい母は、エミリアからの質問に、心底ホッとしたように微笑んだ。

「そう！ そうなの！ それがお母さんの仕事だったの！」

「だけど失敗したって事は、その時は見つからなかったって事だね？」

それまで黙って話を聞いているだけだったアウレディオが口を開いた事も、よほど嬉しかったらしい。

母はブンブンと音が鳴るほどに激しく首を縦に振りながら、ご機嫌で答える。

「そう！ それで今回また捜す事になったんです」

語尾を伸ばすほどに上機嫌なのは良かったが、エミリアにはどうしても腑に落ちない事があった。

「でも、どうしてそこに私の助けが必要なの？」

その質問はどうやら、母にとってはかなり痛い所を突くものだったらしい。

急に挙動不審にそわそわし始め、綺麗な翠色の瞳を宙に泳がせて、言い淀む。

「それは……エミリアが私の娘だから……」

「……………？ さっぱりわからないよ？」

首を捻るエミリアに、どう説明したものかと困る母に、アウレディオが助け舟を出した。

「天使は大勢いるんだろ？　なのにどうしてリリーナは一人でミカエルを捜してるんだ？　ひよっとして他にも、人間に紛れてミカエルを探してる天使がいるのか？」

もしそうだとしたら、隣にいる人を見る目も変わってしまいそうな問いかけに、母はきっぱりと首を横に振る。

「いいえ。ミカエルを捜してるのは私一人よ。大勢で来たってミカエルは見つからないもの。私じゃないとわからないの……私は神に選ばれた『聖なる乙女』だったから、必ずミカエルに惹かれて恋を

するはずだったの……」

思わずエミリアとアウレディオは顔を見合わせた。

言った母の方は、赤くなった頬を両手で押さえて恥らうように俯く。

「本当に私の初恋はミカエルだったの。行方不明になってるミカエルのお父様のミカエルね。だから私ならきつと見つけられるだろうって、神様もお思いになったんでしょけど……私はもっと大切な人を見つけてしまった。そして、ミカエルを連れ戻す術もなくしてしまった。だけど、私の娘のエミリアなら……」

「ど、どうしてそこで、私の名前が出て来るの……？」

嫌な予感に、エミリアは体中から変な汗が噴き出して来そうな感覚を感じていた。ドクンドクンと鳴り始めた心臓を必死に落ち着かせながら、じっと母を見つめる。

母も思い詰めたように、翠色の大きな瞳に涙をいっぱい溜めながら、エミリアの顔をじっと見つめていた。

「『血筋』よ……我が家の血筋は、必ずミカエルの血筋に惹かれる……それはもう、何十代も前の先祖の時からずっとそうなの……だから……」

「私ならミカエルに恋するかもしれないってわけ？」

思わず突き放すような言い方になってしまったと、エミリアが後悔した時にはもう遅かった。母の大きな瞳から真珠のような涙が零れ落ちる。

「だってそれは絶対にそうなの……」

しまったと思いながら、椅子から腰を浮かすエミリアに、隣に座るアウレディオが射るような視線を投げかけて来る。

（わかってるわよ……私だって泣かすつもりなんてなかったんだから……）

「お母さん……」

何と言って慰めたらいいのだろう。

困りきっているエミリアに、母は思わず誰でも抱き締めてしまい

たくなるような、儚げな泣き顔を向ける。

「ごめんね、エミリア……でも他に方法がなくって……」

「う……うん……」

天使の泣き顔と、アウレディオの非難の視線に挟まれ、エミリアは窮地に立たされていた。

必ずしも本意ではない言葉が、思わず口をついて出て来る。

「分かった……私、協力するから……」

先に手伝うと宣言してしまった手前、どうせ今さら断る事も出来ない。

それは、一度約束した事は守り通すというエミリアの信条に反する。

（結局、やるしかないんだから！）

半ば諦め気味に目を閉じたエミリアに、

「エミリア！」

案の定、母が泣きながら駆け寄って来た。

（時々、どっちが母親でどっちが娘だか分からなくなるよね……）

小柄な母と抱き合いながらそんな事を思っていた時には、エミリ

アは実はまだ、事態の

深刻さの半分も知らされてはいなかった。

残る重大な半分は、アウレディオが何気なく漏らした次の一言で明らかになる。

「ところで、仮にそれらしき人物を見つける事が出来たとして……その先はどうするんだ？天使かどうか確かめる方法なんて、何かあるの？」

ハッとしたように、母はそれまで縋り付いていたエミリアの顔を振り仰いだ。

何かを懇願するような憂いを帯びた瞳の煌きに、エミリアは嫌な予感を感じた。

「ええ、あるわ。人間界で天使は姿を変えているけれど、それを元に戻してしまう方法が一つだけあるの……」

「……………」

なぜ母はこんなにも自分の顔を見つめるのだろうか？

エミリアが訝しく首を傾げた瞬間、母は意を決したかのように、その方法というのを口にした。

「『聖なる乙女』がキスしたら、天使は元の姿に戻るの。私はもう結婚してしまつて『聖なる乙女』じゃなくなつたけど、天使の地位と役割は親から子へと受け継がれていくものだから……だから……」
もの言いたげな視線はそのまま、エミリアへと注がれ続けている。
「なるほどな」

溜め息をつきながら呟いたアウレディオを、エミリアは振り返つた。

「え？何？ディオ分かったの？」

アウレディオは、呆れたような、それでいて哀れむような視線をエミリアに向けた。

「……エミリア。お前が『聖なる乙女』として、そのミカエルとかいう奴にキスするんだよ」

「は？」

あまりの内容に、エミリアの頭が言葉を理解する事を拒絶する。

「な、な、なんですってええ！」

たっぷり三秒間はそのまま固まった後、大声で叫んで後ろに飛び退ろうとしたエミリアの体を、小柄な体には似合わないほどの力で、母が抱きすくめた。

「ごめんね……ごめんなさいねエミリア……」

ハラハラと涙を零しながら何度も謝られたら、嫌だと暴れる事も、逃げ出す事も、エミリアはどんどん出来なくなっていく。

「う……うん。お母さん」

アウレディオが人の悪い笑みを漏らす気配を、隣にひしひしと感じながら、母の華奢な背中を宥めるようにさすり、引きつった笑顔でそう答えるのが、エミリアの精一杯だった。

第二章 秘密の任務 2

「つまりエミリアが好きな人とキスしたらいいの？」

天使がどうこうという部分を省き、単なる人捜しとして母の仕事を説明した割には、フィオナは実には的確に、エミリアの悩みの種を把握してくれた。

それどころか、エミリアが一晩中、悩みに悩んだ事柄まで、あっさりと言葉にしてくれる。

「なら簡単じゃない。お城に行けばいいのよ」

一瞬シーンと静まり返った後、アマンダの店の作業部屋は、三人の少女達の悲鳴で埋め尽くされた。

「えっ？お城ってなんで？エミリアの好きな人ってお城に関係ある人なの？」

「きゃあ、誰？私達も知ってる人？」

「な、なんて事言うのよ！フィオナ！」

興味津々で迫って来るマチルダとミゼットの間をかき分けて、エミリアは泰然と仕事を続けているフィオナに飛び付いた。

「あら違った？私bateつきりエミリアが好きなのは近衛騎士のラン……」

「きゃああああ」

自分の悲鳴でフィオナの声をかき消しながら、エミリアは必死に両手でフィオナの口を塞ぐ。

耳に口を寄せ、なるべく小声で囁いた。

「それは違うの。違わないんだけど……違うのよお！」

エミリアの必死の形相は、フィオナの目にはさほど重要な事には映らないらしい。

あくまでも視線は、周囲に巡らしながら、

「どうしたの、エミリア？ オーラの色がぐちゃぐちゃだわ……」
いつもと変わらない冷静な声で、真顔のまま語ってくれる。

「それは……そうでしょうねえ……」

二日連続で、朝からとてつもなく疲れてしまったエミリアだった。

実はフィオナに言われたのと同じような事を、エミリアは昨日の時点ですでに、アウレディオからも言われていた。

母の仕事のとんでもない内容を知り、内心はかなりの葛藤を感じたエミリアだったが、自分から手伝うと言った手前、結局後には引けず、母の言うところの「聖なる乙女」をやるしかなくなってしまう。

（でもこれが成功したら、お母さんとこれからもずっと一緒に暮らせるんだから……！）

物事なるべく良いように解釈しようとするのは、エミリアの良い所である。

「俺も手伝う」と手を上げて、母にとびきりの笑顔を貰ったアウレディオと一緒に、翌日から早速ミカエルを捜す事になった。

結論が出て、今日のところはひとまず家に帰るとなった時、アウレディオはなぜかエミリアの部屋に立ち寄り、後ろ手に扉を閉めると同時に、さっと片手を差し出した。

「出して」

「……………え？」

呆氣にとられるエミリアに向かって、アウレディオはビシッと机の引出しを指差す。

「あそこにしまっている物だよ。手紙……いやひょっとしたら……似顔絵かな？」

「えええええっ？」

（ど、どうしてディオがそんな事知ってるの！）

声にならない叫びにパクパクと口を動かすばかりのエミリアに、アウレディオは珍しく笑顔を向ける。

大きな蒼い瞳に悪戯っぽい色を浮かべた、小悪魔のように魅惑的な微笑。

「エミリアのやりそうな事なんて、だいたい想像がつく。明日はまずそいつに会いに行くからな、心の準備しとけよ」

返事をする暇も与えず、固まってしまったエミリアにさっさと背中を向けて、アウレディオは部屋から出て行った。

階段をトントントンと軽快に下りて行く足音を聞きながら、エミリアは、（これってディオにはめられたんだわ！）と頭を抱えて座り込んだ。

「そんな物ないわよ、って言い返せば、それでよかったのに……！」
咄嗟の時に、いい反応が返せない自分が、自分でも嫌になる。
しかしいくら悔しがってももう遅い。

明日には、これまで遠くから見ているだけだった憧れのランドルフに、自分から会いに行かなければならないのだ。

——何と話しかけたらいいのかも分からないまま。

「どうしよう！ どうしたらいいのよ？」

エミリアはヘナヘナと、自分の部屋の床に突っ伏した。

「じゃあ結局、お城には行くのね？」

説明を聞きながらも黙々と手を動かしていたフィオナは、エミリアの最後の長い嘆きが終わると同時に、冷静にそう尋ねた。

エミリアは力なく頷く。

「うん。夕方ディオが来たら、一緒に行く予定になってる……」

「アウレディオね……」

フィオナは長い睫毛を伏せて、一瞬手を止め、何かを考え込むような素振りを見せた。

対峙する相手の事を、性格から考えている事まで、ほとんどオーラの色で判別出来るフ

イオナだったが、彼女にも苦手とする相手はいる。

——それは、『オーラが見えない人間』。

実はアウレディオは、そんな数少ない人物の中の一人だった。

「昔から何を考えているのかさっぱり分からないのよね……」

心持ち困ったような表情のフィオナに、エミリアは恐る恐る尋ねる。

「出来ればフィオナにもついて来て欲しかったんだけど……やっぱリディオと一緒に嫌？」

小さな頃からアウレディオに対してだけは、フィオナははっきりしない微妙な評価を与えている。

心配げに見つめるエミリアに向かって、フィオナの黒目がちの大きな瞳が妖しく輝いた。

「いいえ。興味深くご一緒させてもらおうわ」

意味深な微笑みに多少の不安を感じなくもないエミリアだったが、初めてランドルフに会いに行くのに、アウレディオと二人でというなんとも気まずい状況だけは、これで回避出来る事になった。

しかし問題は、何の接点もない近衛騎士のランドルフと、一介の町娘に過ぎないエミリアが、いったいどうやって面会するのかという事である。

第二章 秘密の任務 3

夕刻。

夕暮れを告げる大聖堂の鐘がリンデンの空に響き渡った後も、エミリアはアマンダの店の作業部屋に、フィオナと二人で残り続けた。

「じゃっ！ また明日！」

「またねー」

〈今日のアウレディオ様〉を見るために、早めに店を後にしたマチルダとミゼットには後ろめたかったが、

「だったら二人も、一緒にお城に連れて行く？」

とフィオナに尋ねられれば、エミリアには首をぶんぶん横に振るしかない。

（ごめんなさい、マチルダ、ミゼット……本当にごめん！）

心の中で手を合わせている間にも、後ろめたさの原因となっている人物は、この場所にやって来るはずだった。

一点を見つめ、何事かを考えているふうだったフィオナが、エミリアの耳にはまだ何の物音も聞こえない時期に、瞳をキラリと輝かせて断言する。

「どうやら来たみたいよ」

「そ、そう？」

窓に駆け寄りガラスに頬をくっ付けて、懸命に耳をすましていると、たくさんの足音と奇声が遠くから近付いて来る音が、ようやく窓の外、エミリアにも聞こえ始めた。

「本当だ……」

エミリアが呟くのと同じくらいの速さで、騒音は窓の向こうの大通りを通過し、店舗の入り口付近まで近付いて、ピタリと止まる。

「きゃあああ」

「アウレディオさまあ！」

店舗の正面扉を開けて、アマンダの店に入って来たアウレディオは、背後で響く黄色い声には振り返りもせず、後ろ手にガシャンと扉を閉めた。

「相変わらず、大騒ぎなこと」

挑発的な視線を投げかけたフィオナに一瞥もくれず、真っ直ぐにエミリアに向かって歩み寄る。

「ちょっと……」

失礼千番な態度に眉を寄せたのはエミリアばかりで、フィオナはそんな事には全く頓着しなかった。

ただただ無表情にアウレディオを見ている。

アウレディオは二人の目の前に、すっと一枚の紙切れを差し出した。

「これに申し込んだからな」

街で時折配布される、木版刷りの印刷物だった。

——エテルバーク王国の王都、このリンデンで、まもなく年に一度の感謝祭が催される。それに伴い城を警護する衛兵を増員する。腕に覚えのある者はこぞって応募されたし。管轄は近衛騎士団。担当は近衛騎士ランドルフ・ウェラード——

「これって……！」

蒼白な顔をしてわなわなとわら半紙を握り締めるエミリアに、アウレディオは顔色一つ変えずに言い放った。

「エミリアはエミリオ。フィオナはフィリス。明日から俺と三人揃って、お城の見習い衛兵だ。いいか、少なくとも目的を果たすまでは、女だなんてばれないでくれよ」

「どどどどうしてえ？」

心臓が口から飛び出しそうな思いで、エミリアは叫んだ。

（フィオナに手伝ってもらうだなんて、私ディオに言っていない！なのはどうして？それも近衛騎士団直轄？しかも担当ランドルフ様？

……まさか……まさか！）

口もきけずに震えるばかりのエミリアに背を向けて、アウレディオは、もうさっさと部屋から出て行こうとしている。

「ずいぶん手回しがいいのね」

フィオナの呟きには、今度はサッと片手を上げる動作だけで返事した。

扉を開く直前に立ち止まり、もう一度だけ最後にエミリアを振り返る。

「ランドルフ様は時間に厳しい方なんだそうだ。少しでも心証を良くしたいんだったら、くれぐれも集合時間にだけは遅れないでくれよ」

何かを含んだような表情で言いたい事だけ言うと、そのままエミリアの返事も待たずに行ってしまった。

「私……私……ランドルフ様の話なんて、一言もしてないのに！」

エミリアの叫びに感慨深く頷きながら、フィオナは艶やかな黒髪をサラッと一房、耳に掛けた。

「やっぱり……さすがオーラの見えない男。侮れないわ……」

エミリアは泣きたいような気持ちで、フィオナに縋り付いた。

第二章 秘密の任務 4

エミリアとフィオナが急な用事でしばらく店を休むという申し出にも、アマンダ婦人は眉を寄せはしなかった。

「ああ、いいよ。その代わり、その後たっぷり働いてもらうからね」

商人魂を感じさせる不敵な笑顔に、今後の不安を感じずにはいられなかったが、太っ腹な心意気には深く感謝する。

期待と不安に胸を高鳴らせながら、エミリアは翌日さっそく、フィオナと共に城へと向かった。

アウレディオに指示された通り、男物の衣服に身を包み、腰には露天で買った木製の剣までぶら下げていると、少年に見えると言えなくもない。

しかしこれから憧れの人に会うというのに、着飾るところか男装のエミリアは、そんな自分を嘆かずにはいられなかった。

「いくらなんでも、私達だってもう十五歳なんだし……すぐにばれると思うんだけど……」

溜め息をつきつつ何度も繰り返すエミリアに、

「そう？ でも意外と似合ってるわよ？」

フィオナはあまり歓迎したくはない誉め言葉を返してくれる。

「そうかな……無理があると思うけどな……」

「私はね。でもエミリアは大丈夫」

「そ、それってどういう意味？」

城へと続く跳ね橋の前に集まった様々な年齢の男達が、叫んだエミリアに一斉に注目したところで、横から伸びて来た大きな手が口を塞いだ。

「ばれたくないと思ってるんだったら、せめて小声で話すか、女っぽい口調にならないように気をつけるかぐらいはしてくれ」

呆れ気味に耳元近くで囁かれた声に、エミリアの心臓はドキリと跳ねた。

しかしその後続く、甘い雰囲気とは程遠い内容の言葉が、いつきにエミリアをいつもの正気に戻す。

「黙っていればなんの心配もいらない。お前は立派な男だ、エミリオ」

「……………」

目を剥くエミリアの顔を覗き込んで、アウレディオは一瞬、まるで子供の頃のような屈託ない笑顔を、良く整った顔に浮かべた。

「ディオ！ あなたね……」

その笑顔にもだまされる事なく、抗議の叫びを上げようとしたエミリアだったが、ふいに背後から響いた声に、言葉はおろか体までもが凍りついた。

「急な呼びかけだったのに、こんなに多くの人が応じてくれたのか……有難い事だ……！」

頭上から降って来る落ち着いた穏やかな声。

エミリアはドキンドキンと高鳴る胸を抑えながら、ゆっくりと背後に立つ声の主を振り返った。

そこに立っていたのは、深緑色の制服に身を包んだ、涼しげな目の近衛騎士——エミリアの憧れのランドルフ——その人だった。

短めに刈り込まれたこげ茶色の髪に、灰青色の理知的な瞳。広い肩幅も、がっしりとした体型も、年齢はそう変わらないと言うのに、アウレディオよりもはるかに大人っぽく男らしい。

（ああ……ランドルフ様って、間近で見るとこんなに背が高かったんだ……）

日頃小さな額絵にそうしていたように、まじまじと彼の姿を見てもうエミリアを、フィオナが肘で突付いた。

（はっ！ 私ったら、いくらなんでもこんなにじろじろ見るなんて

……！)

自分の無意識の行動を恥じ入って、エミリアは首筋まで真っ赤になった。

穴があった入りたいとはまさにこんな気分である。一気に脈拍が急上昇する。

「諸君、ご協力に感謝する。簡単な手続きが済んだら、警備を担当してもらう地域に案内するので、係りの者の後について行ってくれ」
ランドルフの言葉に従って、三人の近衛騎士が前に進み出た。

(なあんだ、全員がランドルフ様の担当ってわけじゃないのね……)
がっくりと拍子抜けしたエミリアだったが、それよりも先に心配しなければならぬ事に、はたと思い当たった。

(手続きって事は……やっぱり身元調査や身体検査みたいな事があるんじゃないの？どうするのよ！)

ところが同じように困る立場のはずのフィオナは、いつもどおり実に落ち着いた態度で平然としている。

「何の問題もない。全然大丈夫だ」

再び隣で囁かれたアウレディオの声に、エミリアは拳を握り締めた。

(大丈夫なわけないでしょう！……ディオったら絶対に面白がってる！)

しかし実際にアウレディオの言った通り、何の問題も起こらなかった。

口頭で簡単な身元調査をおこなった役人は、エミリアが女ではないかと疑うような事は全くなく、むしろチラチラとアウレディオばかりを気にしていた。

(そうですか。ディオの方が目麗しくて、私よりもよっぽど気になるってわけね……！)

分かりきっているはずの事を改めて再確認させられて、エミリア

は落ち込みを通り越して開き直った。

しかし何の問題もなかったエミリアとは違い、フィオナはというと、その華奢さと透き通るような肌の白さで、不審というより心配と言う意味で役人に見咎められた。

「それほど大変な仕事じゃないが……でも、坊や大丈夫か？」

「大丈夫です」

無表情に即答するフィオナの白い顔は、確かにエミリアの目から見ても、肉体労働に向いているようには見えない。

助勢に向かおうか、と考えるエミリアの視界の隅を、深緑の制服が通り過ぎた。

「感謝祭のためにと、せっかく来てくれたんだ。体力に不安があるようだったら、私の担当下に置いて気をつけるようにするから、合格にしてやってくれ」

ランドルフだった。

息を呑むエミリアの目の前で、フィオナの顔を覗き込み、

「衛兵の仕事がやってみたくて来てくれたのだからな。ありがとう」
穏やかな笑顔で語りかける。

エミリアはぎゅうっと心臓を鷲づかみにされたような気がした。
（なんてお優しいの！ やっぱランドルフ様は騎士の中の騎士だわ！）

悦に入るエミリアに、フィオナがすっと指を向ける。

「お兄ちゃんと一緒に来たんだ。担当も一緒がいい」

ランドルフの灰青色の瞳が、フィオナの声に従って、エミリアへと向けられた。

永遠とも思える一瞬——エミリアの中では時間が止まる。

（ランドルフ様が私を見てる！）

紅潮していく頬を気にするまでもなく、その幸せな瞬間はすぐに終わりを告げた。

しかしエミリアにとっては、その後しばらく動けなくなるくらいの至福のひと時だった。

「そうか。では二人は私の担当に入ってもらおう。後について来てくれ」

夢見心地のエミリアをハッと現実に戻らせたのもまた、ランドルフの落ち着いた声だった。

（わ、私の担当……ランドルフ様になっちゃった！）

機転を利かしたのか、それとも初めから計画していた事だったのか、アウレディオと密かに頷きあっているフィオナのお陰で、エミリアは憧れの人について一歩近付いた。

第二章 秘密の任務 5

臨時衛兵の仕事と言うのは、そんなに大変なものではなかった。祭りの時限りの増員なのだから、当然と言えば当然である。

主な仕事は城の周囲の見回りと、通用口の警備。エミリア達に割り振られたのは、城壁の西側の通用口だった。

祭り当日の人出を考慮して、少しゆっくりとした歩調で城の周りを見回る。

それでも元いた場所に帰ってくるまでに、それほど長い時間はかからなかった。

残りの時間は近くににいる者達と談笑して、通用口の周りで形ばかりの警備の時間を過ごす。

指導者であるランドルフは、城の周辺に怪しい物がないかを確認しながら、緊張気味の臨時衛兵達といっしょに、何周も何周も城の周りを巡っていた。

単調な仕事を厭わない様子にも、みんなの気持ちをほぐそうとしきり声をかけてあげている様子にも、エミリアはただただ感動するばかりだった。

（ランドルフ様って本当に素敵な方だな……）

しかし、そう思えば思うほど変に意識してしまい、自然に話す事は難しくなっていく。

フィオナが事ある毎に、

「どう？ もうキス出来る？」

「まだやらないの？」

と繰り返したが、そんな事、出来るはずもなかった。

「今日会ったばかりの相手といきなりキスなんて出来るはずないじゃない！……しかも私は今、男の子なんだよ。それでなくたって緊張するばかりで、話だって全然まともに出来ないのに……！」

全隊共通の休憩時間になり、久しぶりに一緒になったアウレディオの顔を見て、ついにエミリアの怒りが爆発した。

半ば八つ当たり気味の言葉が、次々と口から飛び出す。

膝を抱えて座り込んでしまったエミリアを、黙ったまましばらく見下ろしていたアウレディオは、そのままふいとどこかにいなくなってしまった。

「そう……そうよね……」

隣に屈み込んだフィオナは自分の言動を反省し、エミリアを労わってくれているようだった。

後ろで一つに束ねた栗色の髪を、優しくすいてくれる指が気持ちいい。

「ちよつとこの計画には無理があるわよね……」

「そうよ！」

膝に突っ伏していた顔を跳ね上げたエミリアは、いつの間にか自分達の目の前に人が立っていた事に気がついた。

足から体、体から顔へと視線を上げ、その人物が誰なのかを確認して、小さく悲鳴を上げる。

「どうした？ 気分でも悪くなったのか？」

心配げに眉を曇らせてエミリアを見下ろしていたのは、ランドルフだった。

背後にはアウレディオの姿も見える。

まさかランドルフを呼びに行っていたのだろうか。

「あ、あの……」

真っ赤になって言い淀むエミリアの言葉を遮って、アウレディオが口を挟む。

「大丈夫です。お腹がすいてるだけです」

「な、なんっ……！」

あまりの言い草に、抗議の声を上げようとしたエミリアだったが、「ランドルフ様も我々と一緒に休憩されませんか？」

「ああ、そうだな。それじゃ……少し休憩する事にしよう」

アウレディオの提案に従って、あっさりとランドルフがその場に腰を下ろしてしまったので、もう何も言えなくなった。

エミリア達が座る周りには、小花をつけた雑草があちらこちらに生えている。

ぽつぽつと咲く花を揺らして、爽やかな風が吹き抜けていく中、見上げれば空は青空。感謝祭が近付いた初秋のリンデンは、目に映る風景も肌で感じる空気も、実に清々しかった。

その清々しさに負けなくらいに爽やかな騎士が、エミリアのすぐ近くに座る。

小さな額に収まる絵の中ではなく、実際に隣にいる。

（本当に信じられない！）

ドキドキと高鳴る胸が苦しくて、息を吸うのさえまならない。言葉など出てくるはずもなく押し黙るばかりのエミリアを、アウレディオがふいに振り返った。

「エミリオ。はらぺこじゃこの後仕事にならないぞ……どうせ何か持ってるんだろ？ 今朝いい匂いがしてた……」

「あっ！」

エミリアは慌てて、腰に下げていた荷物袋に手を伸ばした。

「すっかり忘れてた！」

中から取り出したのは小さな包みだった。

両手に載せると、隣に来たフィオナが心得たかのようにそっと開いていく。

「今日は香草入りのクッキー？ ふーんいい香り……」

お菓子作りはエミリアの趣味であると同時に、使命であると言ってもよかった。

辿り着きたい味があって、忙しい家事と仕事の合間を縫っては、ああでもないこうでもないで試行錯誤を繰り返している。

目指していたのは、小さな頃によく作ってもらった母の味だった。

母が突然いなくなり、大好きだったお菓子も食べられなくなってから、エミリアは母の味を再現する事に碎身した。

このまま忘れてしまいたくなかった。

へもってこんな味だったよね……？ 固さはどうだった？

アウレディオと二人で、かなり研究を重ねた。

学校を卒業した辺りから、アウレディオが手伝う事は滅多になくなったが、エミリアは一人でも時間を見つけては作り続けた。

その甲斐あってか、今ではかなり母の味にも近付けたと自負している。

「ランドルフ様もどうですか？ 甘いもの嫌いですか？」

自分も一枚つまみながら、促したアウレディオの声に従って、

「いや、そんな事はないんだが、食べる機会はそんなにないな」

ランドルフがエミリアのクッキーを一枚取り上げる。

一挙手一投足も見逃すまいと見つめ続けるエミリアの目の前で、

一口、また一口と口に入れ、見る見るその表情が変わった。

「おいしい……！」

「でしょう？」

まるで自分の事のように誇らしそうに胸を張るアウレディオが、

エミリアはなんだか可笑的い。

しかしそれにも増して、驚いた顔で手にしたクッキーをまじまじと見つめているランドルフの様子が嬉しかった。

誰よりもたくさんのクッキーを、黙々と小さな口に詰め込み続けたファイオナは、ランドルフをチラリと横目に見て、

「うん。エミリアのお菓子を初めて食べた人の、いつも通りの反応だわ」

と評価した。

「エミリオよ。エ・ミ・リ・オ！」

慌てて小声で訂正するエミリアに、ランドルフが灰青色の瞳を輝かせながら問いかける。

「もう一つもらえるかな？」

「ど、どうぞ……」

エミリアは震える手で、クッキーの包みを差し出した。

ようやく初めての会話が交わせた事に、泣きたいくらいに感動していた。

つい昨日まで絵を眺めるばかりだった憧れの人が、今、エミリアの作ったお菓子を食べてくれている。

しかも肩が触れそうなくらいにすぐ近くに座って、穏やかな笑顔を向けてくれる。

信じられない状況に緊張するばかりだったエミリアの心が、ようやく今の状態を、現実の事として受け止められるようになってきた。

（本当……なんだよね……）

素直に嬉しいという感情がこみ上げて来て、強張っていた頬が綻ぶ。

今ならもっと、自分からランドルフに話しかける事も出来そうな気がした。

「明日はランドルフ様の好きな物作ってきます。何がいいですか？」
声が裏返らないようにと気をつけながら、精一杯の勇気を振り絞っての言葉だった。

しかしふとエミリアに目を向けたランドルフは、なぜか次の瞬間、首まで真っ赤になってふいと視線を逸らす。

（え？何？私になにか変な事言った……？）

訳も分からずうろたえるエミリアから身を引くように、ランドルフはその場に立ち上がった。

「そ、そろそろ時間だな。私はこれで失礼する」

慌てたように城の方へと去って行く背中へは、ついにそれきり、一度も振り返らなかった。

「どうしたんだろう？……ねえ、私にかした？」

困惑するエミリアに、アウレディオは何も答えてくれない。

ただ何かを考え込むかのように、エミリアのクッキーと小さくなって行くランドルフの背中を交互に見つめている。

フィオナはというと、エミリアの周囲に視線を巡らせながら、さも納得したかのように、

「ああ」と頷くばかりだった。

「何か知ってるんなら、私にも分かるように説明してよ！」

焦るエミリアに、アウレディオは感情の読み取れない冷たい顔を向け、「別になんでもないだろ」とランドルフの後を追って、去って行ってしまった。

その背中が全く見えなくなってから、フィオナは呆然と座り込むエミリアに、逆に問いかけてきた。

「ねえエミリア……今日は自分からお菓子を作ろうって思ったの？」

唐突な質問にエミリアは首を傾げた。ぶるぶると首を横に振りながら、聞かれた事に対して否定の意思を示す。

「ううん。お母さんが、作って行ったら、って言うから作ったんだけど……」

「えっ？……アウレディオじゃないの？」

「どうしてディオ？」

「いいえ、そうじゃないならいいの……私も、ひょっとして思っただけだから……」

いつもは齒に衣着せぬフィオナの言葉が、なんとも齒切れが悪い。

アウレディオもフィオナも、何かを知っている風なのにエミリアには教えてくれない。それらの事に、エミリアは小さな苛立ちと疎外感を感じた。

「ねえ、私にも分かるように説明してよ」

強めの口調で懇願したエミリアに、フィオナは、

「あくまでもこれは私の考えよ……」

と前置きして、ようやく説明を始めてくれた。

しかしそれは、あまりにも信じられないような内容だった。

第二章 秘密の任務 6

「別に確信があるわけじゃないのよ。でも私、小さな頃から思ってたの……ひょっとしたら、エミリアが作るお菓子には、人を魅了する力があるんじゃないかって……」

「は？」

澄んだ空にピピピと小鳥の音が響く。

そちらの方がありありと耳に届くほど、フィオナの発した言葉は、エミリアには理解不能なものだった。

「だから、エミリアのお菓子を食べた者は、エミリアに恋するんじゃないかって言ってるの」

二人の間をさあっと一陣の風が吹き抜けていった。

風に乱れた髪を、軽くてのひらで撫で付けながら、エミリアは困りきった笑顔を浮かべた。

「まさかあ」

全く信じていないどころか、フィオナが自分をからかっているぐらいにしか思っていないエミリアの隣に、フィオナはずいっと膝を進めてくる。

額がくっ付かんばかりに顔を近付けて、黒目がちな大きな瞳で、エミリアを真っ直ぐに見つめた。

「信じてないのね……でも私は昔からそうなの。エミリアのお菓子の虜で、食べた後には、いつも大好きなあなたの事がもっと大切になるの……」

東洋人形のように美しくて神秘的なフィオナの顔が、エミリアのすぐ近くに迫る。

紅を引いたように赤い小さな唇が、なんとも魅惑的で怪しい言葉

を紡ぎ出す。

「ねえ、本当に、他の人からもそんな風に言われた事はない？」

甘い匂いのするフィオナの吐息に、思わず瞳を閉じてしまいそうになる自分を必死に拒みながら、エミリアは首をぶんぶんと横に振った。

「ないない！全然ないです！」

「あらそう」

拍子抜けするくらいにあっさりと、フィオナはエミリアの目の前から顔を引いた。

「でもさっきのランドルフもそうだったけど、エミリアのお菓子を食べた人は、みんなとっても幸せそうなオーラに包まれるのよ。あの色、女の子はともかく、男だったら恋愛感情に発展するんじゃないかって踏んだんだけど……本当に今までそんな事なかった？」

「だって、それならフィオナだって知ってるはずじゃない。学校の頃からいつも、私がお菓子を作った時には、絶対に一番に食べてたんだから」

「そうだけど……いつも女の子と食べてばかりで、私、エミリアが男の子にお菓子をあげている所は、見た事ないもの」

「だってそれは……」

何気なく言いかけて、エミリアは口を噤んだ。

（ディオが男の子には食べさせるなって言ったから……）

心の中だけで続きを呟き、その奇妙さにふと不安を感じる。

（なんでダメだって言われたんだっけ？）

その時の状況も、アウレディオがどんな口調だったのかも、思い出そうとしても全然思えない。

突然言葉を切ったエミリアを訝しんで、「どうしたの？」とフィオナがまた顔を近付けて来た。

エミリアはなぜだか事実を誤魔化すように、慌てて言葉を継いだ。「男の子はあんまり甘い物好きじゃないかなって、思ってたから…」

…」

フィオナは納得したのかしなかったのか、空を仰いで呟いた。

「それはそうね」

二人の間に、なんとも気まずい空気が流れていく。

少し変わり者ではあるが、小さな頃からいつも傍にいてくれ、今回のように困った事態にも何も言わず付き合ってくれるフィオナは、エミリアにとってかけがえのない親友だ。そんな彼女に咄嗟に嘘をついてしまった自分が、エミリアはどうしようもなく嫌になる。

「フィオナ」

「何？」

呼びかけると、いつものように簡単な返事がすぐに返って来た。

その事に深く感謝しながらも、それでもエミリアは、本当の理由を口にする気にはなれなかった。

（ディオはどうしてあんな事を言ったんだろう？）

アウレディオの真意が分からない事が、こんなにもエミリアを不安にさせる。

自分にとって絶対に変わらない、どんなものにも揺るがないと信じていた何かが、足元から崩れていくようで、頭が真っ白になり、何も考える事が出来なかった。

どこことなく憂鬱な思いで家に帰ったエミリアを、玄関で両手を広げて出迎えてくれたのは母だった。

「お帰りー。衛兵のお仕事、ご苦労さま。今日はエミリアの好きな物たくさん作ったから、いっぱい食べて、良く眠ってねー」

すこぶるご機嫌な母に手を引かれて、踏み込んだ食堂のテーブルの上には、本当に食べきれないぐらいのご馳走が並んでいた。

「ありがとうお母さん……」

たいした働きをしなかったとは言え、慣れない立ち仕事で体も、

そしてそれ以上に心も、エミリアは疲れきっていた。深く母に感謝する。

しかし感謝の意を込めて笑ってみた方がいいが、正直、上手く笑顔が作れているのかどうかは、自分でも自信が無い。

「こんなにたくさん、お父さんと三人でも食べきれるか分からないわね。うーん……折角だからアウレディオも呼びましょうか？」

きっと初めからそのつもりだったのだろうに、たった今思いついたばかりに手を叩き、母はエミリアを玄関に向かって押し返す。

「エミリア、呼んで来てあげてね」

一瞬、アウレディオと今、顔を合わせる事に躊躇いを感じたエミリアだったが、母に心配をかけたくない一心で頷いた。

「うん」

こわばらずにいられない顔を母に見られないように、エミリアはそのまま家を出ようとした。

しかし玄関の扉を開きかけたところで、穏やかな声が背中にかかる。

「エミリア……アウレディオと何かあった？」

一見おっとりしているようなのに、母はなかなか鋭い。それは天使だからなのか。

それともエミリアの母親だからなのか。エミリアにはよく分からない。けれど――、

「どうして？ なんにもないよ……ディオを呼んで来るね」

背中のまま答えて、エミリアは玄関の扉を開けた。

振り返って見てみなくても、母が今、困った顔をしているだろうぐらいは、エミリアにだって想像がついた。

第二章 秘密の任務 7

カランカラン。

鐘の音と共に、大きなお屋敷の古い扉が開く。

隙間からこちらを覗く大きな蒼い瞳に、エミリアの心臓がトクンと跳ねた。

「何？」

ぶっきらぼうな言い方はいつも通り。

その事になぜか今だけはホツとする。

「お母さんが、夕食たくさん作ったから、一緒に食べようだって」「そう」

精一杯の努力で普段通りを装っているエミリアを観察するかのように、アウレディオは一言言ったまま、微動だにしない。

黙ったまま見つめられているあまりの居心地の悪さに、エミリアはたまらず問いかけた。

「何？」

瞬間、アウレディオの蒼い瞳が、柔らかな前髪の向こうで輝きを増す。

「お前が俺に聞きたい事があるんだろ……何？」

思いがけない言葉にドキリと飛び上がりながらも、動揺している自分を知られたくなくて、エミリアは必死に頑張った。

「そう思うって事は、心に何かやましい事があるんでしょ？……それって何？」

アウレディオが細めの眉を片方上げて心持ちエミリアを見下ろし、不敵な表情をする。

「俺にはなんにもないよ。それよりお前だろ？……何？」

アウレディオが、すでにこの「何」の応酬を面白がっている事は、

エミリアにもよく分かっていた。

エミリア自身も、さっきまでの憂鬱が嘘のように心が軽い。

思わず笑いが込み上げて来そうなのだが、だからと言ってここで負けるつもりはさらさらない。

「……ディオが言ってるよ。何？」

「い・や・だ。お前が言え。何？」

我慢出来ずにエミリアはどうとう吹き出した。

「やだもう、切りがない……！」

「ハハハッ、本当に！」

アウレディオもまた、エミリアにつられたかのように声を上げて笑った。

（二人でこんなふうに笑ったのなんて、何年ぶりだろう）

どんな時も表情を変えないと言われるアウレディオの笑顔は、小さな頃と同じお日様のようなキラキラの笑顔だった。

（こんな顔をみんなに見せたら、今以上に大騒ぎになっちゃうよね……）

笑いながらそんな事を思って、すっかりエミリアの心は晴れた。

うじうじといつまでも一人で悩んでいるのは性に合わないので、ここは思い切って本人に尋ねてみる事にする。

「ねえディオ。前に、私が作るお菓子、男の子にはあげるなって言っただでしょ。あれってなんで？」

それはどうやらアウレディオが予想していた質問とは、全く違っていたらしい。

「それがいったいなんの関係が……？」

呆れたように呟く。

昼間からずっと悩んでいた自分を真っ向から否定されたような気がして、自然とエミリアの口調は強くなった。

「いいから！　ねえどうして？」

強気で詰め寄られて、アウレディオは眉間に皺を寄せ、首を捻り始めた。

「うーん」

(悩んでいる顔も良いわーって、マチルダ達だったらきっと喜ぶんだろうな……)

心の中で同僚達に詫びるエミリアに向かい、アウレディオはようやく口を開いた。

「たぶん……」

「たぶん……何？」

待ち切れずに聞き返したエミリアに、アウレディオが返した答えは――。

「男に食べさせたら、俺の食べる分が減るから……かな？」

「なんなのそれ！」

あまりの事に、エミリアは頭を抱えた。

肩の力が抜け、反動でドツと疲れた気がする。

(フィオナが余計な事言うから、変な心配しちゃったじゃない！)

内心怒りを覚えながら、ふと首を捻った。

(心配……？私、いったい何を心配してたの？ディオがフィオナと同じように私のお菓子の事を考えてたとしたら、そしたら……？)

そして一つの結論に辿り着いた。

(ランドルフ様にわざとお菓子を勧めたんじゃないかって思ったのよ！)

自分の導き出した答えに、自分自身で拍手しながら、この際、その点もハッキリさせておく事にした。

「じゃあどうして今日、ランドルフ様に、私のお菓子を勧めたの？」

アウレディオは、休憩時間にわざわざランドルフを自分達の所へ呼んで来たようだった。

それがもしエミリアのお菓子を食べさせるためだったとしたら、どうしてだろう。

どうやら今度の質問は、アウレディオの予想の範疇内だったらしい。

すでに用意してあった答えを、瞳を煌かせながら意気揚々と即答

する。

「お前の良い所と言ったら料理の腕しかないじゃないか。そこをランドルフ様に見せなくて、どうするんだ？他にどうしようもないだろう？」

「よけいなお世話よ！」

あまりの言い草に目を剥いたエミリアを、アウレディオは嬉しそうに笑っている。

エミリアをからかって喜ぶ昔からの癖は、どうやら根本のところでは変わっていないらしい。

（結局は考え過ぎじゃない……それと言うのもフィオナが変な事を言い出すからよ。明日、ちゃんと訂正しなくちゃ！）

心の中で決意を固めるエミリアを、

「お前が知りたかった事って、そんな事？……あんなに青い顔してたくせに？」

アウレディオがすっかり笑顔が消えてしまったいつも通りの無表情で、不審げに見下ろす。

エミリアはきょとんと瞬いた。

「そうけど？」

途端にハアアアッと大きな溜め息をつかれた。

見下すような視線を向けられて、エミリアは心なしムツとする。

（なによ……私の様子がおかしいって気付いてたんだったら、帰る途中ででも声かけてくれればよかったじゃない……！）

八つ当たり気味の自分勝手な考えだが、そんな事を思っているエミリアの心の奥は、さっきまでとは打って変わって、すっかり晴れていた。

〈俺の食べる分が減るから〉

〈お前の取り柄は料理しかないから〉

思い返してみればアウレディオの言葉にはずい分失礼な内容が含まれているのに、エミリアにとって重要だったのは、どうやらそんな事ではなかったらしい。

「お母さんが待ってるから、早く行くよ」

先に立って家までの道を歩きながら、エミリアは時々振り返って、後ろの無愛想な幼馴染の姿を、何度も何度も確認した。

長い手足を持て余すように、素直に自分の後ろをついて来るアウレディオが、自分の良く知っているアウレディオのままなのが、エミリアは嬉しかった。

何よりも嬉しかった。

第二章 秘密の任務 8

さっきと同じように玄関で出迎えてくれた母は、エミリアの顔を一目見るなり、

「うん。どうやら仲直り出来たみたいね」

とにっこり微笑んだ。

（子供みたいって思う時もあるけど、やっぱりお母さんにはかなわないわ……）

エミリアは今度こそ心からの笑顔を母に向け、夕食のテーブルに着いた。

ピンと張られた赤白の格子縞のテーブルクロスの上には 母が腕によりをかけた、飛び切りのご馳走が並んでいる。

肉や芋や玉葱のパイ。種入りのケーキ。ソースのかかった燻製肉。鶏のシチュー。チーズ。

さっそく目の前にある焼きたてのパンに手を伸ばしたエミリアは、「それで……ミカエル捜しの方はどう？ 何か進展はあった？」

という母の言葉に、うきうきとしていた気分も食欲もいつきに失せ、何と答えていいのか分からずに俯いた。

「エミリアの好きな相手とだったら、とりあえず接点を作った」

シチューを口に運びながら事も無げに答えるアウレディオに、母は瞳を輝かせる。

「さっすがアウレディオ！ 仕事がはやーい！」

エミリアはパンが喉に詰まってしまいそうなくらいに咳き込んだ。「な、何言ってるのよディオ！」

しかし母は、そんな娘の様子にはお構いなしだ。

「それでどんな人なの？格好いい？背は高い？」

まるで友達と好きな人を言い合っている時のように、もの凄い勢いで母に迫られて、エミリアは逃げ腰になる。

「ど、どんな人って……別に……」

「お城の近衛騎士。真面目で、責任感の強い人。すごく有能で国王陛下からの信頼も厚いらしいよ。見た目もまあ、かっこいいかな……」

勝手に割って入った上に、淡々とランドルフについての私見を述べるクラウディオに我慢ならず、エミリアはテーブルをバンツと叩いて立ち上がった。

「まあ……じゃなくって、とってもかっこいいです！」

断言された言葉に、母は夢見るようにふわっと笑う。

「エミリア……恋してるのね……！」

（恋！）

大きな声で主張した事が急に恥ずかしくなって、エミリアはぎくしゃくと椅子に座り直した。

「まあ、エミリアにしては良い男を見つけたと思うよ」

アウレディオが食事を続けながら、実に生意気な事を言っている。

「そうね。エミリアは私と違ってとっても移り気だから、本当は心配だったのよ」

母もまた、好き勝手な事を言っている。

（もう勝手にして！）

涙ぐみながら料理に手を伸ばすエミリアに、母は燻製肉を切り分けながら尋ねた。

「それで、その人にちゃんとエミリアのお菓子は食べてもらった？」

一瞬、エミリアの動きが止まる。

「食べてもらったけど……どうして？」

ふとさっきまでの嫌な気持ちを思い出して、不安になった。

「えっ？エミリアったら、今まで何も知らないで『あれ』を作ったの？」

目を丸くして問いかける母に、エミリアは眉を寄せずにはいられない。

「何の事？」

「エミリアの作るお菓子って、小さい頃に私が作ってあげてたのを再現してるんでしょう？」

天使そのものの微笑みに、エミリアはこっくりと頷いた。

「うんそうだよ。ディオにも手伝ってもらって、何年もかかってあでもないこうでもないって工夫したから、結構お母さんの味に近くなってると思うんだけど……」

母は満足そうにエミリアとアウレディオの顔を見比べた。

そして悪戯っぽく片目を瞑る。

「そうね。とってもよく出来てると思うわ。効き目はお母さんのより強そう……」

「効き目？」

黙々と食事を続けていたアウレディオが、いつの間に平らげたのか、空になったお皿を自分の前に山のように積み重ねながら、母に向かって視線を上げた。

「そう、私が小さなあなた達に作ってあげてたのは、『天使のお菓子』。人の心を幸せにする食べ物よ。でも効き過ぎると魔女の惚れ薬より強力だったりして……ふふふっ」

ガターン。

エミリアが悲鳴をあげるより先に、アウレディオが椅子を蹴り倒して立ち上がった。

エミリアも母も、一瞬驚いてそんなアウレディオに視線を集める。顔を真っ赤にしたアウレディオは、

「お、俺ちよつと……」

といっぴになく大慌てで食堂を出て行った。

その様子にはエミリアは改めて、

（本当にディオは、お菓子の事、なんにも疑ってなかったんだ……）と安心した。しかし――。

（やっぱりフィオナが言った通り、お菓子のせいでランドルフ様の態度がおかしかったんじゃない！明日からどんな顔で会ったらいいの？これじゃあわざと一服盛ったようなものよ……）

頭を抱えてテーブルに突っ伏したエミリアに、母はそっと耳打ちする。

「それでエミリアの好きな人の反応は？エミリアの事好きになっちゃったみたい？」

明らかに面白がってるふうの口調に、さすがにエミリアも声を荒げた。

「お母さん！」

母は慌てて乗り出していた体を引っ込める。

瞳に薄っすらと涙まで浮かべて、実にしおらしい顔になった。

その顔を見ていると気が咎めて、それ以上は強い事が言えない。

（美人って得ね……）

改めてエミリアが大きいため息をついたところに、庭にある井戸の水で乱暴に顔を洗ったらしいアウレディオが、ちょうど食堂に帰って来た。

「とにかく……済んでしまった事は仕方ない。明日はもっと事態が好転しているかもしれないわけだから……」

真っ赤な顔をしてしどろもどろにそんな事を言われても、エミリアの心はちっとも浮上しない。

それどころかどんどん落ち込んでいくばかりだった。

（そんな変な力で、ランドルフ様の心を動かしたくなんてなかった。ちゃんと私の事を見てもらって、私の事を知ってもらって……それで好きになってもらえるなんて、確かに思わないけど……だからってこんな方法は嫌だよ……）

エミリアが心の中で思った事が分かったのだろうか。

母はうな垂れる娘の横に座り、そっと頭を抱き寄せた。

「ゴメンね、エミリア……」

ふわっと良い香りがして、エミリアはどこか違う場所にいるかの

ような錯覚を覚えた。目を閉じて体中で感じるぬくもりは、エミリアが記憶している一番古い思い出よりも、さらにずっと昔の思い出。

この世に生を受ける遥か昔から、エミリアを優しく包み込んでくれていた温かなぬくもりだった。

（そうだった……この優しい腕をもう二度と無くしたくなくって、私は自分から手伝うって言ったんだ……）

浮かんで来そうになった涙を、必死で押しとどめる。

（今さら投げ出すわけにはいかないもの。仕事だって休んでるんだから、時間の余裕だってない。……だからランドルフ様にお菓子を食べてもらったのも、これはこれで良かったのかもしれない……）

どんな状況でも、物事を前向きに考えようと努力出来るのは、エミリアの良い所である。

しかし――。

「もういいよ……お菓子ぐらいでランドルフ様が私を好きになるかもなんて……そんな事まだ分からないし……」

強がり半分本気半分。それでもなんとか、自分を奮い立たせようとしたのに、

「いや……あの態度は確かに変だった……」

どうしてアウレディオは蒸し返すような事を言うのだろう。

「えっ、やっぱり？」

どうして母はそんなに嬉しそうな声で答えるのだろう。

周りの対応は、あまりにもエミリアの心の機微に無頓着だった。

第三章 憧れの騎士 1

明くる朝、城の前で会ったフィオナにエミリアは、「お菓子の話は、フィオナの言う通りだった」と報告した。

『食べた者が作った者に好意を抱くお菓子』——あまりにも胡散臭い話なのに、フィオナは驚きもせず、「そう。やっぱり……」と頷く。

彼女が人並み外れて淡泊な事に、そして日頃から『オーラ』で相手を判断しているからなのか、常識から逸脱した部分がある事に、エミリアはこんなに感謝を感じた事は今までなかった。

しかし——。

「それじゃ後は、例の近衛騎士とエミリアがキスしたら全て終りね」などと、そこまであっさりと言い切られる事を望んでいるわけではない。

「そ、そんな簡単にキスなんか出来るわけないでしょう！」

焦るエミリアの背後に目を向け、フィオナがポツリと呟いた。

「あ。噂をすれば、そのランドルフ・ウェラードが来たわ」

反射的にエミリアは、フィオナの陰に逃げ込んだ。

もちろん華奢なフィオナの背後にエミリアがすっかり隠れるはずもなく、ほとんど丸見えなのだが、エミリアには自分がどうしてそんな事をしてしまったのか、その理由さえ分からない。

気が付いた時にはもう体が勝手に動いていた。

「あ。こっち見た」

フィオナの声に、今度は体が飛び上がる。

「何してるの？」

淡々と尋ねられても、何と言っているのか分からない。

ただ今は、ランドルフの顔をまともに見れそうにはない。

「あっちは変に思うわよ？」

フィオナの言う事は、いちいちもつともだった。

「だって……なんだか顔を会わせづらい……」

情けなく弱音を吐くエミリアの耳に、フィオナの驚くべき呟きが届く。

「あら、あっちも意識しすぎ……耳まで真っ赤……」

「えっ？」

エミリアは反射的にフィオナの陰から顔を出した。

しかし、さっきまでランドルフらしき人物が佇んでいた城壁の辺りには、もうすでに人影はない。

「……フィオナ？」

嫌疑の目を向けたエミリアに、フィオナが静かな眼差しを注いだ。いつものように神秘的な、口以上にものを言う大きな黒い瞳。

「そんなに気になるんだったら、余計な事は気にしない方がいいわ。エミリア。昨日の方がずっといいオーラの色だった。憧れの人とせつかく知り合いになれたんだから、お母さんの仕事は後回しにしても、まずは良い思い出を作ったほうがいい。……ちがう？」

命令口調の言葉とは裏腹に、フィオナの表情はとても穏やかだった。

本当にエミリアを気遣う気持ちに溢れていた。

「フィオナ！フィオナはやっぱり私の親友よ！」

エミリアは自分より華奢なフィオナの体に思いきり飛びついた。

柔らかな風が、青空の下で綻ぶ二人の頬を、優しく撫でて行った。

エミリアがその日の午前の三度の見回りを滞りなく済ませた頃、リンデンの街にお昼を告げる鐘が鳴り響いた。

景色の良い所で弁当を食べようと、フィオナとアウレディオと共に、お城の周りを歩き回っていたエミリアは、大きな木の木陰に、

深緑の制服を着たこげ茶色の髪の人物を見つけた。

ドキリと鳴った胸を抑えて、息を整え、決心を固める。

「ランドルフ様！」

努めて明るく呼びかけた声に、ランドルフは座ったままこちらを振り返った。

「ああ。エミリオ。フィリス。アウレディオ。君たちか……」

逆光になった太陽が眩しかったらしく、目を細めて笑った表情が普通通りで、エミリアはホッとひと安心する。

（ちよつと偽名だけど、ランドルフ様が私の名前を呼んでくれる！それってかなり凄い事だよね！）

持ち前の前向きさも、どうやら取り戻せて来たらしい。

「ここでお昼ですか？」

手元を覗き込みながら尋ねてみたが、ランドルフの前には何もなかった。

「いや。今日は昼食がないんだ」

「えええっ？」

事も無げに言っただけのけるランドルフに、驚きの声を上げたのはアウレディオだった。

「信じられない……昼抜きなんて、夕方にはもう俺、動けない……！」

アウレディオが細身の割には凄い食欲の持ち主である事をよく知るエミリアは、クスリと漏れかけた笑いを、なんとかかみ殺した。

「王族の方々が日に二度の食事だから、それに合わせてらっしゃるんですか？」

フィオナの鋭い読みに、エミリアは

（ああそうか！）

と内心頷いたのだったが、ランドルフは静かに首を横に振った。

「いや……恥ずかしい話、私の失敗なんだ。食事係の者はきちんと用意してくれたのに、私が忘れてきてしまった。申し訳ない事だが、朝、騎士団の宿舎を出る時には、まだはつきりと目が覚めていない

事が多くて……実は私は、騎士団一、忘れ物が多いんだ」

（ランドルフ様が？ 失敗？ 忘れ物？）

ぱちくりと目を瞬かせるエミリアに、ランドルフが照れたような笑顔を向けた。

普段の精悍できりつとした横顔とはまた違った、柔らかで魅力的な笑顔。

エミリアは息が止まってしまいそうだった。

第三章 憧れの騎士 2

遠慮するランドルフを無理矢理に引き込んで、お昼の弁当を広げたエミリア達は、そのまま休憩の時間をランドルフと共に過ごした。城の話や、王族方の警護の話。騎士団の話に話題が及んで、ランドルフの横顔には、かすかに憂いの色が加わった。

ウェラード家は、リンデンの街では知らない者はない、高名な騎士の家系。

ランドルフの父も、祖父も、まだ現役の騎士としてこの城と王家に仕えている。

「じゃあランドルフ様は、騎士になられてもう五年になるんですね」「十四歳で叙任されたわけだから、そうなるかな?」

「十四歳。俺達より年下か……凄いな」

高い空を見上げて呟いたアウレディオに、ランドルフは灰青色の瞳を向けた。

「凄くなどないさ、私など。ただ順当に、決められた人生を歩んでいるだけだ」

どこか投げやりな雰囲気を感じさせる言い方に、エミリアは、（なんだかランドルフ様らしくない……）

と感じた。咄嗟に問いかける。

「ランドルフ様……ひょっとして騎士になりたくなかったんですか?」

「いや。まさか……」

即答するランドルフは、すかさず首を横に振り、顔にはかすかに笑みさえ浮かべている。

だが、その表情はどことなく寂しげだった。

「好きか嫌いかではなく、向いているか向いていないかという話だ

よ。いつも気を張っていないければ、いつどこで失敗をするかも分からないうっかり者が、陛下のお傍に仕える騎士だなんて……」

「でもランドルフ様は！」

エミリアは抗議の声を上げずにはいられなかった。

いつも遠くから見ていた。誰よりも騎士らしい所作の近衛騎士。彼は見た目が素晴らしいだけでなく、人のために骨身を惜しまず働ける人物であるという事を、この二日間で知った。

全ての増員兵と共に、何度も何度も城の周りを見回っていた事。みなが休んでいる時も、ともすれば他の仕事に動いていた事。面と向かうと意識し過ぎてしまうが、ついつい目では追わずにいられなかったエミリアだからこそ、誰よりもよく知っている。

「だけど自分は……ランドルフ様は騎士に向いていると思います。これ以上ないくらい騎士らしい騎士だと思います」

自分でもびっくりするぐらい強い口調になってしまって、エミリアは内心焦った。

でも言わなければならない。少し自信を無くして、自分を卑下してしまっているランドルフにちゃんと分かってもらうためには、ここで引くわけにはいかない。

エミリアは一呼吸置いて、一言一言言葉を区切ってゆっくりと語りかけた。

「増員の警備兵に志願した人達、みんなとっても嬉しそうです。ランドルフ様が親身になって、一つ一つ丁寧に仕事を教えて下さるから、たかが増員なんて思わずに、みんな懸命に働くんです。気付いてますか？」

そう言えば、ずっと以前に誰かに、へ相手にしっかりと気持ちを伝える時には、目を見て、自信を持って一言一言ゆっくりと話すのよ」と教えられた事がある。

大事な場面ではエミリアはいつも、その言いつけをちゃんと守って来た。

——あれは、そう、きつと母だったのかもしれない。

「ランドルフ様は、自分が先頭に立って働いています。誰が見ていなくてもその態度はずっと変わらないです。そんな人の後だからみんなついて行きたいって思うんです。多くの兵に慕われるランドルフ様が騎士らしくないなんて、そんなはずないでしょう？」

ランドルフの灰青色の瞳が、日の光を反射した時のようにキラリと輝いた。

エミリアはその光に、自分の中の信念が彼に受け入れられつつある事を感じた。

「失敗とか忘れ物の話も、逆に親近感を覚えました。人間味があるって言うのかな……失敗をした事がある人間だからこそ、相手の失敗を許せる。そうは思いませんか？」

知らず知らずの間に満面の笑顔になっていたエミリアに、ランドルフも負けないくらいの笑顔を向けた。

「確かに。騎士として相応しくありたいと自分が努力しているから、本当は断らなければならぬ衛兵志願者も、ついつい受け入れてしまった……」

「ランドルフ様？」

「すまない。本当は最初から気が付いていた。君達は女の子だろう？ それでも城を守りたいと志願してくれた気持ちが嬉しかった。今さら断るつもりはない。他の者にも言わない。だから……もし良ければ本当の名前を教えてくださいだるうか？」

「……………！」

両手で口を覆ってエミリアは絶句した。

まさか気付かれているとは思わなかった。まして分かっている、敢えて黙っていてくれたなんて。

「勇敢なお嬢さん。どうぞお名前を」

ランドルフはまるでお姫様にするかのように、エミリアに向かって恭しく頭を下げた。その優雅な姿をぼうつと見つめるばかりのエミリアは、アウレディオに肘でつつかれて、慌てて我に返った。

「エミリアです……」

夢見心地のまま呟いた途端、ランドルフに片手を取られ、その甲に挨拶の口づけを落とされる。

見惚れるほどに優美な仕草に、

「誰がどう見たって、立派な騎士だろう……」

「そうよね」

珍しく同意するフィオナとアウレディオの声も、エミリアの耳には入って来なかった。ただ自分の目の前で微笑むランドルフの事しか、目に入らなかった。

第三章 憧れの騎士 3

「それじゃあ今日は、もうかなり親密になったのね？」

その日の夕食の席も、父と母と共に、まるで当たり前のようにアウレディオが同席していた。

昨日とはまた違うパイを切り分けながら、母は嬉しそうにニコニコ笑う。

「だったら後は、彼がミカエルかどうかを確かめて、エミリアがキスするだけね」

鈴を転がすような声に、エミリアとアウレディオの手が、同時にぴたりと止まった。

「「確かめる方法があるの？」」

問い質す声まで重なってしまう。

母はきょとんと、いかにも不思議そうに翠の瞳を瞬いた。

「もちろんあるわよ。なあに……？ ひょっとして私ったら言っけなかった？」

「言ってないわよ！」

今にも掴みかからんばかりの勢いのエミリアを、アウレディオが手で制した。

「何？ その方法って……」

母はちよっとホツとしたように、エミリアからアウレディオへと視線を移す。

「うん。ミカエルは背中の羽と羽の間、つまり肩甲骨の間ぐらいに赤い痣があるの。星の形に似た珍しい痣だから、きつとすぐに分かると思う……」

頭を抱えたまま微動だにしないエミリアと、ふうっと大きな溜め息をついたアウレディオに向かって、母は最上級の笑顔を向けた。

「目印が無かったら困るでしょう？この人かって思う人に、エミリアが次々とキスしなくちゃいけないものね……どう？これで明日にはどうにかなりそう？」

がばつと顔を上げたエミリアは、声を上げる前にアウレディオの大きな手で口を塞がれてしまった。

お陰で母に強い非難の言葉をぶつける事が出来ない。

その代わり、誰にも聞こえる事はない心の中だけで、思いっきり叫ぶ。

（お母さんって本当は、天使の顔をした悪魔なんじゃないの！）

絶対に声に出したつもりはなかったのに、怒りに震えるエミリアの肩を、宥めるようにアウレディオが叩いてくれた。

「どう？心の準備は出来た？」

翌日、城に着いた早々、エミリアは今度はフィオナに問いかけられた。

腕組みしながらアウレディオと何事かを相談した末に、フィオナは、

「もしも人違いだった時のために、時間は残しておいた方がいいと思う。いい思い出、もう出来たでしょ？もういいよね？」

念を押すかのようにエミリアに向かって繰り返し返す。

「……フィオナ？」

（確か昨日は、私の心を労わるような発言をしてくれたような……？それでやっぱり友達って良いものだど、感動を覚えたような……？）

エミリアが首を捻る間にも、フィオナはアウレディオと二言、三言交わし、頷きあった。

「目印があるなんて良かったじゃない。じゃあ今日中にアウレディオが確認するから、本人だったらさっさとキスしてね、エミリア」

あまりの言い草に、エミリアはぽかんとしてしまふ。

フィオナにいったいどんな心境の変化が訪れたのだろう。

しかしその疑問は、エミリアに背を向けながら呟いたフィオナの独り言で、すぐに解決した。

「今日でこの仕事終わりにしないと、明日はもう感謝祭。実際に多くの人出の中で城の警備をするなんて……絶対に嫌」

がっくりとエミリアは脱力した。

「エミリア、どうしたの？オーラの色が濁ってるわよ？」

俯くエミリアの周囲を見回しながら、フィオナはいつものように解説してくれたが、エミリアには反論する気力さえなかった。

（渦ぐらい巻くわよ……私の昨日の感動を返して。フィオナはやっぱり、フィオナだ……）

昔から変わらない親友の姿を、悲哀を込めてしみじみと再確認しているだけなのに、

「エミリア？まさか背中 of 痣を確認する役も、自分でやりたかったの？」

フィオナは少し眉を寄せながら、思いもかけない事を言い出す。

「そんなわけ無いでしょう！」

エミリアの叫びを、アウレディオが肩を震わせて聞いているのがまた、どうにも腹立たしかった。

リンデンの街が夕焼けに染まる頃。

鐘の音に合わせて次々と家路につき始めた臨時衛兵達の波に逆らって、アウレディオはランドルフへと歩み寄った。

「ランドルフ様、俺、お願いがあるんですけど……」

エミリアは最高潮に達した緊張で眩暈を感じそうなおもいだったが、アウレディオが次に発した言葉は、予想外のものだった。

「俺、騎士に憧れてるんです。出来るなら少しだけ、騎士団の様子

や宿舎なんか見せてもらう事は出来ないでしょうか？」

ランドルフは悩む事もなく、すぐに頷いた。

「ああ。明日の感謝祭では街の人も城の中庭までは入る事が出来るし、騎士団の宿舎も歓談室ぐらいいは開放されている。君だったら……大丈夫だ。今から少し行くかい？」

「はい！」

元氣よく返事したアウレディオの顔は、背を向けていたためエミリアには見えなかった。

けれど、ランドルフが捜し人かどうかを確認するためだけとは思えない、本物の喜びが混じった声のようにも聞こえた。

（ディオ？）

まさか本当に騎士に憧れていたのだろうか。

エミリアが首を傾げた瞬間にアウレディオが振り向く。

夕焼けに染まる淡い金色の髪。その間から見え隠れする自信を湛えた蒼い瞳。

（後は俺にまかせろ）

声にならない言葉が聞こえたような気がして、様々に思い悩む心は全て、エミリアの中から消し飛んでしまった。

（ディオ……）

力強く頷いてエミリアに背を向け、ランドルフと共に去って行くアウレディオの背中。いつの間にか頼もしさを感じさせるほどになったんだなど、母親のような感慨に浸って

見送り、エミリアはフィオナと共に家路についた。

今日はエミリアの家に泊まる事にしたフィオナと、ただ静かにアウレディオの帰りを待つ事にした。

家の玄関で、八年ぶりにエミリアの母と対面したフィオナは、開口一番、

「おばさま、全然お変わりないですね」と呟いた。

妖しく瞬く黒目がちの大きな瞳を、母の周囲に巡らしているフィオナの様子を見て、

（さすがに、まずかったかな？）

エミリアは内心冷や汗ものだった。

それなのに、その後に続いたフィオナの言葉というのは――。

「どんな肌のお手入れをされてるんですか？これは絶対に教えてもらわなくちゃ」

鋭いのだからずれているのだか、独特の観点すぎてエミリアにも正直よくわからない。

しかし、

「あらこれ美味しい。これも。おばさまって本当にお料理お上手ですね」

次々と料理を口に運ぶフィオナが、いつもより饒舌な事には気が付いていた。

「ほら。ぼうっとしてたらせっかくのご馳走が冷めてしまうわ。エミリア」

食事の喉を通らない心境のエミリアを、それとなく気遣って家までついて来てくれたのだという事も――。

実際、フィオナと一緒にいてくれなければ、アウレディオの帰りを待つ間、エミリアはどんなに気持ちが塞いでいただろう。

傍にいてくれるだけでありがたかった。

食事が終わって二階のエミリアの部屋に上がったフィオナは、

「それにしても遅いわね……ひょっとして、もう自分の家に帰って寝てるんじゃないの？」

表向きはアウレディオに悪態を付きながらも、心の中ではエミリアと同じように、（きつと今日中に連絡をくれる）と信じているようだ。

そんな心境が、ありありと伝わってくる事が、エミリアには心強

か
っ
た。
。

第三章 憧れの騎士 4

しんと静かな夜の静寂を破るように、カランカランと玄関扉に付いた鐘が鳴る。

先を争うように階段を駆け下りたエミリアとフィオナは、玄関で母がアウレディオを出迎えている光景を目にした。

薄暗いランプの明かりの下。

心持ち目を伏せたアウレディオの表情からは、結果がどうだったのかはうかがい知れない。

柔らかな髪を揺らして、アウレディオはエミリアへと視線を向けた。

「ちょっと外まで出れるか？」

いつもどおりの口調。

エミリアは胸をぎゅっと締め付けられるような思いがした。

三人は押し黙ったまま肩を並べて歩き、エミリアの家の隣の、アウレディオの邸の庭園へと足を踏み入れた。

一人で住むには広すぎる邸も、この庭も、一人きりになってもアウレディオは決して手放そうとはしない。

手入れをするには時間も手間もかかる薔薇園も、祖父が大事にしていたそのままにしている。

（仕事だって庭造りを選んだのに、休みの日もずっとここにいるんだよね。本当に花や木が大好きなんだから……）

温かな気持ちでそんな事を考えながら歩いていたエミリアは、大きな木の枝に吊るされた、白い二人乗りのブランコに目を止めた。

小さな噴水の前に広がる芝生の上で、風に揺られてキイキイと音を立てている。

「このブランコ、まだあったんだ」

エミリアの呟きに、

「ああ」

アウレディオが頷いた。

「懐かしいわね」

フィオナの囁きに、小さな子供の頃の思い出が甦る。

まだ三人が学校に通い始めたばかりの頃、このブランコにエミリアとフィオナの二人が座って、アウレディオに後ろから押してもらった事があった。

しばらく押してもらったら代わるという約束だったが、

「エミリアまだ？フィオナまだ？」

アウレディオの問いかけに、二人はいつまでたっても、

「もういいよ」

とは言ってあげなかった。

小さくて素直なアウレディオが、必死な顔をして押してくれるのが可愛くて嬉しくて、二人は顔を見合わせてころころと笑いながら、何度も何度も、「まだダメよ」と言い続けた。

それは今では懐かしい色になった、優しくて温かい大切な思い出。ふと目が合ったフィオナも、なんだか同じ事を思い出しているような気がして、エミリアは笑い含みに問いかけた。

「ねえディオ。あのブランコに乗ってもいい？」

アウレディオはきっぱりと首を横に振った。

「お前達はいつまでも俺に押させるから嫌だ」

エミリアは思わず吹き出した。

わざとそう答えたはずのアウレディオも、黙って二人のやり取りを聞いていたフィオナまでも、いつになく大きな声で笑っている。

（同じ思い出を共有している幼馴染がいてくれるって、本当に嬉しい事だな……）

二人の顔を見比べながらそんな思いを噛み締めていたエミリアの胸に、ふいに目の前に立ち塞がったアウレディオの表情を見て、ドキリと緊張感が甦った。

たった今まで頬を綻ばせていたはずのアウレディオは、これ以上ないくらい真剣な顔で、月光を背に、静かにエミリアを見下ろしていた。

蒼い瞳が星の光にも似た煌きを放つ。

「エミリア。ランドルフ様の背中に、痣はなかったよ」

今まで聴いた事も無いほど優しい穏やかな声に、声の主がアウレディオだとエミリアが認識するまで、長い時間がかかった。

そしてその言葉の意味を理解するまでも――。

何か言おうと口を開きかける前に、フィオナがそっと近くに来て、エミリアの手を握る。

緊張のあまり冷たくなっていた自分の手と同じくらい冷えた指先を感じて、エミリアはふっと肩から力が抜けた。

「そっか……」

アウレディオに負けないくらい穏やかな声が出て、エミリアは自分でも驚いた。

あんなに、ヘランドルフ様とキスなんて出来るわけない！どうしたらいいのよ！と悩んでいた自分は、ふいにどこか遠くに行ってしまった。

無茶な計画をこれ以上実行しなくても良くなって、ホッとしたはずなのに、この気持ちはなんだろう。

胸にぽっかりと穴があいてしまっている。

（まさか私ったら……ランドルフ様とキスしたかったの？）

自分自身に問いかけてみて、エミリアは苦笑いする。

（これから先、時間をかけてって言うのならともかく……今すぐそれは、やっぱりないな）

だとしたら何なのだろう。

ひょっとしたらエミリアは、気が付いてしまったのかもしれない。今この瞬間、今までのようにランドルフに近づいていく口実を、エミリアは失ってしまったのだ。

（明日からはまた前のように、遠くから見ているだけ……しかもお母さんの仕事を手伝うためには、すぐにまた次の候補者捜しに動き出さなきゃならない。その中では、他の誰かを追いかけている私の姿を、ランドルフ様に見せる事もあるかもしれない……私という存在を知ってもらって、昨日より今日、今日より明日ってランドルフ様と親しくなって、私の恋は本当にこれからだったのに……）

そつと唇を噛んだエミリアを氣遣うように、フィオナの手に力が入った。

そしてこれまでの人生で一度も頭を下げた事がない相手に、フィオナは静かに頭を下げた。

「アウレディオ……やっぱり私達をブランコに乗せてもらえないかしら？」

アウレディオは反駁する事もなく、ただ静かに頷いた。

日の光にも劣らないほどの月光の下。

エミリアとフィオナは古い小さなブランコに並んで座って、アウレディオに背中を押してもらった。

アウレディオの祖父の薔薇が、ちょうど初秋の満開を迎えて、庭園はむせ返るほどのいい匂いに包まれていた。

その匂いと共に、エミリアはフィオナとアウレディオの優しさを

そつと胸に刻み込んだ。

キーキーと軋んだ音を上げるブランコの心地よい浮遊感と共に、
いつまでもいつまでも忘れないように――。

第四章 もうひとつの恋心 1

「これからいったいどうしたらいいのかしら？」

エミリアの部屋の寝台に腰掛けたフィオナは、ほうっと大きな溜め息をついた。

「エミリアには悪いけど、時間も無い事だし、すぐに動き始めた方がいいと思うのよ」

隣に座るエミリアに言い含めるかのように、一言一言呟く。

その見解には全く同意だったので、エミリアも黙ったまま頷いた。「でも正直お手上げね。私の知る限りエミリアにあの近衛騎士以外に好きな人はいないわ。そうでしょ？」

単刀直入な言い草にエミリアは頬を染めながらも、またもコックリと頷いた。

母に頼まれた「ミカエル捜し」も、もう五日目。

いよいよこれからか、というところで、たった一人の候補者だったランドルフが違うと分かり、捜索は今、完全に暗礁に乗り上げた状態だった。

窓際に置かれた椅子に腰かけていたアウレディオが、エミリアに胡乱な視線を向ける。

「なあ……その人物をお前が好きになるっていうのは、本当に信憑性がある話なのか？」

その事に関しては実際エミリア自身もおおいに疑問を持ち、何度も母に確認した事柄だったので、溜め息混じりに大きく頷いた。

「お母さん曰く、『ぜったいに、エミリアが好きになる人!』な

んだって……」

「それじゃ、全く手がかりなしじゃない」

つんと顔を逸らしたフィオナに続いて、何気なくエミリアの机に目を向けたアウレディオは、ふと首を傾げた。

「なあ、まさか、あの方じゃないよな……？」

「あの方って？」

アウレディオの視線の先を辿ってみると、机の上にいくつか飾られた額絵に辿り付く。父と母の肖像画。家族の絵。エミリアが描かれた物。友達の中で笑うエミリア。

その中に混じって一つ、明らかに額の格も違う立派な絵があった。国王お抱えの絵師となった父が、たびたび描かせていただいている王室の肖像画。

あまり良い出来ではなく、献上し損ねた物の中の一つを、エミリアは父から貰ってそこに飾っていた。

エテルバーク王家には、国王と王妃、三人の姫と一人の王子がいる。

荘厳な玉座に座した国王陛下の隣。大きな存在感を示しながら佇む王子――フェルナンド。

太陽の光を集めたかのような黄金色の髪に、深い湖のような碧の瞳。どこにいてもパツと目を引くその容姿から、華やかな事が大好きで明るく友好的な性格まで、国民の敬愛の情を集めて止まないこの国の王子。

「そう言えば……王子は素敵だ素敵だ、ってエミリアったら昔から騒いでたわね……」

真剣に考え込み始めたフィオナに、エミリアは目を剥いた。

「だってそれは！この国の女の子だったらみんなそう思うような事でしょう！」

「その割には、かなり小さな頃から結構しつこく言ってる」

割って入ったアウレディオの言葉に激しく焦りながらも、エミリアは必死に訴えた。

「それはそうでしょう！あんなに素敵なんだもの！誰だって憧れるわ」

「そう？私は全然。やっぱり好みはあるし」

「だ、そうだ。残念だったな。お前は明らかに王子に好意を寄せてるって事で……次はその線で行くとするか」

「そうね。他に手がかりもないし、そうしましょ」

いつの間にか、アウレディオとフィオナの間だけで、話がまとまっ
ってしまっている。

「ちょ。ちょっと待ってよ！フェルナンド殿下だなんて、そんな私……私……」

「大丈夫だよ。なにも今すぐキスしろって言ってるわけじゃないんだから」

「当たり前よ！」

エミリアはだんだん、抵抗するだけ無駄だという事を察してきた。普段はあまり仲が良さそうには思えないのに、こういう時になると、アウレディオとフィオナはもう周りそっちのけで、二人で相談を始めてしまっている。

当事者のはずなのに、どこか疎外感を感じずにいられないエミリアは、

（いいよ、もう……どうせ王子様となんて、接点だって作れるはずがないんだから……）

ふてくされて寝台に横になり、掛け布を頭から引き被った。

しかしエミリアは忘れていた。

彼女達三人は今まだ、城の臨時衛兵の任についているのである。

第四章 もうひとつの恋心 2

折りしもその日は、国を挙げての感謝祭の初日だった。

国王家族には、城の中庭に張り出した露台に出て、集まった国民の代表者達に挨拶をするという儀式が予定されている。

主に城の周りの警備に殉じていたエミリア達も、この時ばかりは少しでも多くの人出が欲しいと言う事で、城壁の内側の警備を任された。

「じゃ。もし人波に押しつぶされそうになったら、遠慮なく逃げていいから。くれぐれも怪我をしないように」

爽やかに去って行ったランドルフの背中を見送って、エミリアは改めて中庭に集まった人人人の山を見渡した。

「うわー……これじゃディオがどこにいるのかも分からない……」

フィオナは、あまりにも危険と言う事で予めこの任務からは外されていた。

ランドルフはエミリアも、と言ってくれたが、

「へいえ。こいつは大丈夫です」

とアウレディオが譲らなかった。

そのアウレディオとも持ち場は別になり、あまりにも人が多すぎて、どこににいるのだから探す事も出来ない。

「別に近くにいないくちやいけないって訳でもないんだけど……」

誰に向かってか言い訳しながら、エミリアは豪華絢爛な宮殿を振り仰いだ。

白亜の宮殿と称される真っ白な建物は、日の光を浴びていつにもまして輝いている。

三階部分から大きく中庭に向かって突き出した露台。

真紅の絨毯が引かれ、色取り取りの花に飾られたその場所に、ま

もなく王室の方々が姿を現すはずだった。

見上げる首は痛い、目を凝らせばそこにいる人の表情も見えない事はない。

思いがけずいい場所に配置されたエミリアは、アウレディオとフィオナから、

へどこにかして、王子に存在を気付いてもらう事！
というかなり無茶な注文を出されていた。

（この大人数の中、しかもこの大歓声の中、あまり目立ちそうにもない一衛兵に、殿下が気が付くわけないでしょう！）

二人に返した怒りの言葉を、胸の中でもう一度繰り返すエミリアの目に、露台の上で忙しく立ち回り始めた侍女達の姿が映る。

（いよいよだわ）

エミリアの胸がドキンと跳ねたところで、貴人の登場を告げるファンファレーが鳴り響き、空に向かって空砲が打ち出された。

花かごを持った少女達が、露台の下に集まった人々の上に、花びらの雨を降らせ始める。

舞い散る花びらの下、優雅な動作で王家の方々が、露台へと歩み出て来た。

黒い式典服を身に纏ったフェルナンド王子が、最後に姿を現した瞬間、聴衆の興奮も最高潮に達したように、エミリアは感じた。

（ああ、なんて素敵なんだろ……！）

母の仕事の事も、アウレディオとフィオナの注文もすっかり忘れて、ただただ見惚れずにはいられない。

歩いた後に金の光が残るかのように、輝きを放つ美しい髪。その煌きに負けないくらいのでやかな笑顔。

大きく口を開けて白い歯を覗かせて、屈託なく笑う王子は、口うるさい年長者達に言わせると、〈王族らしくない〉のかも知れないが、親しみやすいという事で、若い者の間では絶大な人気だった。

（ああ、本当にフェルナンド王子って素敵だなー）

何気なく出てしまった本音に、エミリアは自分で赤面する。

（なにこれ……これじゃ本当に、ディオやフィオナが言うように、私が王子に恋してるみたいじゃない……！）

ぶんぶんと首を横に振りながら、邪念を払って警備に専念しようとしても、視線の方は勝手にゆるゆると王子の華麗な姿に引き寄せられていく。

あまりにもじっと見つめていたからだろうか、エミリアがその異変に気が付いたのは、王子の傍近くに控えていた騎士達よりも、王子自身よりも早かった。

（……あれは何？）

露台の後方に位置する高い塔の窓から、何かを構えている人影が見える。

その人物が手にした弓のような物が、大きくたわみ、王子の背中に狙いを付けていると感じた瞬間、エミリアは人ごみをかき分けて走り出していた。

「王子！王子っ！」

叫ぶ間にも弓は大きくしなり、今にも王子の背に向かって、矢が放たれようとしている。

「いやあああっ！フェルナンド王子っ！」

エミリアが大きく息を吸い込んで、お腹の底から声を出した途端、自分でもびっくりするぐらい大きな声が出た。

しかしエミリアが本当に驚いたのは、そんな事にはなかった。あんなに賑やかにさんざめいていた中庭の群集が、全員ピタリと動きを止めている。

仰ぎ見た塔の上では、今まさに弓を離れようとしていた矢も、不自然な状態のまま空中に留まっている。

「な……なに……？」

息を呑んでエミリアが見渡した周囲は、全ての人が、物が、時が止まったかのように静止していた。

動いているのはエミリアと、

「なんだ？ いったい何が起きた？」

驚いたように露台から中庭を見下ろしているフェルナンド王子だけ。

信じられない状況に激しくうろたえながらも、エミリアは幸いな事に、王子に伝えなければならない一番大事な事を、忘れてはいなかった。

「王子っ！ 後ろ！ 後ろから弓矢で狙われていますっ！」

声を大にして叫んだエミリアの指示に従って、フェルナンド王子は背後を振り返った。

「本当だ……」

茫然自失といった状況にもかかわらず、王子は即座に腰に佩いた剣を抜き、

「忠告、ありがとう」

矢が飛んで来ようとしている方向に向かって剣を構える。

「ところでこの状況はいったい？」

後ろ姿のまま、王子が大声でエミリアに問いかけ、エミリアもまた大きな声で返事を返そうとした時、ドッと沸き返るような様々な音と共に、人々に動きが戻った。

不自然な体勢で固まっていた人々がいつせいに呪縛から解き放たれ、てんでに動き始める。

押されて大きく体勢を崩したエミリアだったが、露台の上で王子が飛んで来た矢を剣でしっかりと打ち落とす姿だけは確認出来た。

「きゃああああ！」

異変に気が付いた露台の上の人々は、貴人を守るため動き出し、中庭の群集も自分勝手に逃げ出し始める。

地面に膝をつく格好になっていたエミリアは、王子の無事にホッと胸を撫で下ろしながらも、自分自身の身の危険を感じた。

(ち、ちよつとまずいな……)

逃げる人々に蹴り倒され、このまま踏まれたらどうなるだろう、などと考えながら、頭を抱えうずくまるエミリアを、誰かが抱き上げた。

「馬鹿じゃないのか、お前！死にたいのか！」

投げつけられた言葉は激しく、睨み据えられた蒼い瞳には本当に怒りの炎が燃えていた。

しかしエミリアを抱え上げた腕の力は強く、人込みをかき分けて進む意志の強さは確固たるものだった。

「ディオ……」

線が細いとばかり思っていたが、いつの間にか自分より遥かに遅しくなっていたアウレディオの首に縋り付いて、エミリアは安堵のあまり涙が零れた。

第四章 もうひとつの恋心 3

「王子にお前の存在を気付いて貰えとは言ったがな……なにもあんな危険な状況になった時に、人込みかき分けて前に出ろとは言っていないんだよ！」

烈火の如く怒り狂うというわけではないが、静かな怒りの炎を燃やして、アウレディオはいつまでもエミリアに対して怒っていた。

「ごめんなさい……」

ここはひたすらに謝るしかないと踏んだエミリアは、素直に頭を下げ続けた。

城の外周。

いつもの休憩の木陰に座って、広げられた弁当を摘まんでいるのは、今のところフィオナだけだ。

「でもいつの間にあんな所に移動してたの？全然気がつかなかったわ」

フィオナの指摘に、エミリアはぎくつと首が縮み上がるような気がした。

「そ、それは……気が付いたらあそこに居たって言うか……なんて言うか……」

しどろもどろに弁解してみても、エミリアの周りの空間をじっと見つめているフィオナにも、心の奥底まで見通してしまうような真っ直ぐな視線を向けて来るアウレディオにも、到底通じる気はしなかった。

「なんだか……時間が止まったみたいになっちゃって……他の人はみんな動かなくなって……それでなぜか王子と私だけ動けたんだけど……」

だからと言って真実を告げても、とても聞き入れてもらえるよう

な内容でもない。

「は？」

「何ですって？」

揃って冷たい対応を返されて、エミリアはそれ以上言い募る氣力を無くした。

「ごめん。なんでもない……」

うな垂れたエミリアの耳に、遠くから呼びかける声が聞こえる。

「おーい。おーい」

訝しげに辺りを見回してみると、城壁から続く細い道を走って、こちらに向かって来る人影が二つ見えた。

背が高くてがっしりした体つきの一人は、おそらくランドルフ。

そしてもう一人は――日の光にも負けないぐらいに輝くあの黄金色の髪の毛の人物は――。

「まさか……！」

息を呑むエミリアにつられて、アウレディオとフィオナも小道の方を振り返った。

「ねえ、あれってもしかして……？」

「ああ、そうだな」

めいめいにくつろいで座っていたアウレディオとフィオナが、さっと居住まいを正す。慌ててエミリアがそれに倣う間にも、二人の青年は、三人のもとへと辿り着いた。

「やあ、勇敢なお嬢さん。さっきはどうもありがとう」

恭しげに上半身を折り曲げてお辞儀し、優雅な動作で手に取ったエミリアの手の甲に挨拶の口づけを落としたのは、やはりこの国の王子――フェルナンド・ディ・エテルバーグ――その人だった。

「さっきのお礼とちよつとしたお願いをしたくて、君を捜してた。ランドルフがひよつとしたら知ってるかもて言うんで、ここに連れ

て来てもらったんだ。もう一度会えて、本当に良かった」

例えさっきまでは王子に対して恋心がなかったとしても、輝くような笑顔を向けられて、両手を握られながらそんな事を言われると、今この瞬間に恋に落ちてしまいたいそうだ。

——エミリアはぼんやりとそんな事を考えていた。

少し離れたところでみんなを見守っているランドルフの存在も、（それみたことか）と言わんばかりのフィオナとアウレディオの視線も、気にならないわけではなかったが、エミリアはそれ以上に目の前の本物の王子様に、魂を吸い取られていた。

「エミリアっていうんだね……」

フェルナンド王子には、エミリアがの男装なんてまるで意味がないようだった。

「私はレディを男と間違うような野暮はしないよ」

碧色の瞳をパチリと片方瞑りながら、悪戯っぽく笑う表情も実に魅力的だ。

（もういいや……ランドルフ様の事も好きだけど、王子にも憧れる恋多き女でいいです。私……）

誰にともなく降参の白旗を上げたエミリアは、

「君に折り入って話があるんだけど」

より一層近付いた王子の顔に、ドキドキとさらに胸を高鳴らせた。

「これから祭りの間、私の傍にいてくれないだろうか？」

王子の言葉も、ただただ耳に心地よく、薔薇色の頭の中を素通りして行く。

しかし——。

「はい？」

最後の理性までは、エミリアは失っていなかった。

なんだか今、とんでもない事を聞いた気がする。

果然と王子の顔を見つめるエミリアに、王子は大きく破顔した。

「はははっ！ 君って本当に見えていて飽きないなあ。今まで近くにいなかったタイプだ。うん、やっぱり気に入った。私の傍にいてくれ

るね？」

ザッと、なぜかアウレディオが立ち上がった。

冴え渡るような蒼い瞳で、真っ直ぐにフェルナンド王子を見据える。

「そいつに何かやらせたい事があるんですか？」

不遜とも取れる言い方に、王子は腹を立てたりはしなかった。

その代わり、ずっと真面目な表情になって、ずっと握ったままだったエミリアの手をようやく開放する。

「ああ。……どうやら彼女には、察しのいい騎士が付いているようだね。良かったら君も一緒に来てくれるかい？」

「僭越ながら、謹んでお断りさせていただきます。俺はともかく、そいつを危ない目にあわせる訳にはいきません」

身も蓋もない返答に、王子は小さく肩を竦めた。

不敬罪として、この場で捕らえられても文句は言えないようなアウレディオの態度だった。

いつもなら、十分に常識を踏まえているはずのアウレディオの思いがけない行動に、エミリアは不安になった。

「どうしちゃったのよ、ディオ？」

アウレディオの上着の裾を小さく引くエミリアの様子に、フェルナンド王子はすっと目を細めた。

「残念だが、彼女がいなければ意味がないんだ。もちろん君のその判断力と、中庭の群衆の中であつという間に彼女を攫った行動力も惜しいけどね……」

そうしてもう一度エミリアの手首を掴んだ。

まるでそれに対抗するかのように、庇うようにエミリアの肩に手を掛けたアウレディオ。

このままでは険悪になってしまいそうな雰囲気を感じ、エミリアはたまらず、

「分かりました！ はい！ 私やります！」
と声高らかに宣言した。

「エミリア」

咎めるように珍しく名前を呼んだアウレディオの声にドキリとしながらも、

（だってこのままじゃ……ディオが王子の意に反した犯罪者扱いになっちゃう……それに今の所、ミカエルを捜す手掛かりは他にはないんでしょ？）

エミリアは、視線にぐっと力を込めて、いつもアウレディオがそうしているように、目だけで語りかける。

アウレディオはふうっと大きな溜め息をついた。

そんな様子を横目に見ながら、

「はい。それなら私も手伝うわ」

フィオナもさっと手を上げる。

「はつきり言って王子のオーラは見えないし、どうやら王子の周りにいる人達もあまり良い色の人はいないみたいだけど、だからこそそんな所にエミリアを一人で行かせるわけにはいかないもの」

横目でちらりと見たところからすると、最後の方はどうやらアウレディオに対するあてつけのようだった。

フェルナンド王子は、花が綻ぶかのように優雅に微笑んで、アウレディオに向き直った。

「お姫様方はこう仰っているけど……騎士君はどうする？」

アウレディオは悔しそうに唇を引き結びながらも、

「わかりました。俺もやらせていただきます」

と答えた。

しかしその蒼い瞳には、獲物を見つけた獣のようにギラギラとした激しい光が宿っていた。

「その代わりお願いがあります。任務が終わったらその最後に、俺達の願いを一つ聞いて下さい」

（それってもしかして……）

息を呑むエミリアに、アウレディオが頷き返す。

「無茶な事ではないです。心配は要りませんし、すぐに終わります」

真摯な瞳をしばらく見つめた末に、フェルナンド王子はゆつくりと頷いた。

「いいだろう。褒美の金でも役職でも、好きに願うといいよ……」
こうしてエミリア達三人は、臨時の衛兵から王子付きの侍女と騎士見習いへと、格上げになった。

第四章 もうひとつの恋心 4

王宮の中で働くというのがどういう事なのか、エミリアはこれまで考えてみた事もなかった。

揃いのお仕着せを着て王子の身の回りの世話をする侍女達は、実は良家の子女ばかりらしい。

突然入って来た新入り達に、殆どの者はいい顔をしなかったが、中には親切な者もいた。

「私たちみたいな下っ端は、王子の物に直接手を触れる事も出来ないから、高貴な身分の方に間に入ってもらうんですよ」

アニータと名乗ったエミリアと同じくらいの年齢の侍女は、てきぱきと動き回りながら、エミリア達が失敗をして叱られたりしないようにと、よく気をつけてくれた。

「この部屋にある物には手を触れないようにして、掃除もするんです」

「ふーん」

面倒な世界なのだと、エミリアは感心するばかりだった。

棒の先に布を付けた道具で調度品の埃を払っていると、部屋の前の廊下の方が騒がしくなる。

慌てて掃除道具を隅に隠し、扉の両脇にズラリと二列に並んだアニータ達に倣って、エミリアとフィオナも、部屋の主を迎え入れる体勢を取り、頭を下げた。

音もなく滑り開いた両手開きの立派な扉を抜けて、フェルナンド王子が部屋に入ってきた。

後ろにはランドルフとアウレディオも従っていたが、頭を下げたままのエミリアとフィオナにはもちろん見えるはずもない。

「ここの掃除はもういいから、少しの間人払いをしておいてくれな

いか？ ああ、エミリアとフィオナだけは残って」

侍女達の胸中に目には見えない戦慄が走った気配を感じたが、あまりに恐ろしすぎて、エミリアはそっちを見る勇氣はなかった。

静々と出て行く侍女達がみんないなくなってから、エミリアはふうつと本当に大きな大きな溜め息をついた。

「はははっ！ ずい分気を遣っていたようだね」

エミリアの極度の緊張も明るく笑い飛ばしてしまう王子は、心の中では様々な事を画策しているようでもあるが、どこか憎めない。

どうぞと勧められるままに、さっきまでは手を触れる事さえ出来なかった革張りの大きな椅子に腰かけ、エミリアはホッと一息ついた。

「すまない。いろいろと手続きに手間取ってしまったが、ようやく君達を式典に同行させる許可が下りた」

「そうですか」

王子が語っているのは、感謝祭の初日で思わぬアクシデントのために延期になっていた、王室の方々の露台での挨拶の事だった。

結局感謝祭の最終日に行われる事になり、その場にエミリア達を同行させようとして、フェルナンド王子はあれこれと策を講じた。

嘆願書の中には国王陛下のお気に入り画家であるエミリアの父の名も、由緒正しき名家の出身だったアウレディオの祖父の名も、騎士の家系として名高いランドルフの家も、引っ張り出せるだけのものを引っ張り出した。

ただ一人、フィオナだけは何の肩書きも持たなかったのだが、王宮に来て早々に見かけたある大臣の体調不良の原因を、オーラの色で言い当ててしまったために、『高名な占い師』という誰にも負けない箔がついた。

自分自身の能力で道を切り開いた姿を、ランドルフが思わず、「羨ましい」と呟いてしまうほどの運の良さである。

「それで……明日の式典でエミリアにさせたいって仕事というのは、いったい何なんですか？」

王宮の中で働かせてもらうようになってからもう二日。

はぐらかされてばかりで一向に教えて貰えなかった事の答えを、満を持してアウレディオは求めた。

精神力の強さを感じさせる真っ直ぐな瞳には、これ以上誤魔化されはしないという意志が込められていた。

フェルナンド王子は、お付きのランドルフとフィオナとクラウディオの顔を順に見渡し、ついにエミリアに視線を向けた。

「君に時間を止めてもらいたいと思って」

いつもどこかに笑みを含んでいる風だったフェルナンドの、あまりにも真剣な顔に、エミリアは言われた内容があまりにも有り得ない事であったにもかかわらず、とっさに何の反応も返す事が出来なかった。

「お願いだ。私のために時間を止めてくれ」

真顔で繰り返し返すフェルナンドは、いつもの華やかさとはまた違った、陰のある美しい顔をしていた。

「本気で言ってるの？」

ポツリと呟いたフィオナにしっかりと頷く。

「もちろん本気だ」

「エミリアにそんな事が出来るとでも？」

「ああ。私はそう信じている」

静かな声に込められた確かな信頼に、エミリアは身震いするようないだった。

（確かに……確かに感謝祭の初日、私が叫んだ瞬間、時間が止まったような気がした。私と王子以外の人達はみんな動きを止めたと思った。だけど……）

緊張で汗ばむてのひらをぎゅっと握り締める。

（それって本当に私がやった事だったのかな……？もう一度やるって言ったって……いったいどうやったらいいの？そんな事も分からない）

寄せられる信頼の眼差しは嬉しくても、それに応えられる自分な

のかどうか不安になる。不安で不安で俯く事しか出来ない。

「エミリア」

ふいに名前を呼ばれた。

振り返ると真っ直ぐにアウレディオがエミリアを見つめていた。

「大丈夫だ。大丈夫だから、お前のやりたいようにしろ」

「ディオ……」

何が大丈夫なのよ、無責任な事言わないで！いつものように声を大にして怒りたかったが、声が出なかった。

自分を見つめる蒼い瞳のあまりの優しさに、喉が詰まって上手くしゃべれない。

「ディオ……」

情けなく名前を呼ぶしか出来ないエミリアに、アウレディオが少し眉を下げて小さく笑いかける。

（まったく困った奴だな）とでも言いたげなその表情に、不思議とエミリアの心が温まった。

最初から無理だと諦めずに、精一杯努力してみようと思えるだけの勇気が湧いた。

「私……やってみます。出来るかどうか分からないけど、精一杯やってみます」

拳をぎゅっと握り直して、エミリアは宣言した。

息を詰めるようにしてエミリアの返事を待っていたフェルナンド王子の顔も、ようやく綻ぶ。

「ありがとう。本当にありがとう」

両手を大きく広げてその中にすっぽりと抱きしめられた事で、エミリアはこれまでようやく保っていた意識を泣く泣く手放した。

（せっかくフェルナンド様が抱き締めて下さったのに！）

そんな事を悔しく思う間もなかった。

第四章 もうひとつの恋心 5

夕刻、エミリアがようやく目を覚ました頃には、辺りにはもう夜の気配が忍び寄りつつあった。

これまでは毎日、家と城とを往復していたのだったが、今日ばかりは城に泊まると家に伝言を頼み、寝なれない柔らかな寝台の上で寝返りを打つ。

侍女が寝起きする大部屋ではなく、特別に城の一隅に部屋を与えられたエミリアは、一人きりで遅めの夕食を取った後も、なかなか寝付けないでいた。

（フィオナ起きてないかな？）

隣の部屋は、燭台の明かりももう消されているようだったので、訪ねていく事はしなかった。

（少し夜風にでも当たってこようかな）

大きな窓の向こうのバルコニーは、王族用の露台と同じく、中庭に面していた。

宮殿の中でも最上階に位置するこの部屋からならば、リンデンの街の全景まで見渡す事が出来るかもしれない。

横並びの部屋とは共用になっている長いバルコニーには、既に先客がいた。

こちらには背中を向けて街の様子を眺めているその見慣れた人陰に、エミリアは黙ったまま近付いて行って、隣に並んだ。

「もう目が覚めたのか」

隣に来たのが誰なのかを確認もせずにアウレディオは囁く。

その事を本当はほんの少しだけ嬉しく思いながら、エミリアは、

「おかげさまで」

と勿体ぶった返事を返した。

眼下に広がる街は闇に包まれていた。

その所々に蠟燭やランプの明かりに照らされた小さな窓が浮かび上がる。

ポツリポツリとした光が散らばる街は、まるで夜空のようで、

「綺麗だね」

と呟いて隣を見たエミリアは、そのままアウレディオの横顔から目が離せなくなった。

（どうしてこんなに、どこにいても何をしてても絵になるんだろう……）

うす明かりの中、アウレディオは、怪しいくらいに綺麗だった。

淡い色の髪は、日光を浴びている時よりこうして月の光の中の方が、より一層不思議な色に輝く。

蒼い瞳も、夜の色が重ねられて、空に輝く星よりも神秘的に瞬く。

（もしもディオが女の子だったなら、隣に並ぶのはかなり辛かったと思うんだよね……）

しみじみと頷くエミリアに向かって、アウレディオはふいに語りかけた。

「本当はこの間、リリーナに聞いたんだ。さっき王子が言った時間を止めるとかって話。あれって『天使の時間泥棒』って言うんだってさ」

「は？お母さん？『天使の時間泥棒』？？」

あまりの驚きに、エミリアは開いた口が塞がらなかった。

そんな表情を見てアウレディオは、瞳を細めて薄く笑う。

「そう。特別に気持ちを込めて大声を出す事で、しばらくの間、時間を止めれるんだそうさ。自分と誰かのために……ある程度の天使だったら誰でも出来る事だって……」

「ちょ、ちょっと待って。でも私、天使じゃなくて人間だよ……？」
エミリアの驚きは止まらない。

「リリーナが天使だったら、お前だって半分天使だろ？」

アウレディオに指摘されて、エミリアは初めてその事実が気が付

いた。

「そっか。そうなるのか……！」

なんとも現実感が無い。

急にそんな事を言われても、外見がああな母はともかく、自分の事としては考えられなかった。

しかし先日 of 式典での出来事も、エミリアが天使の力を使ったのだとするならば、全て説明がつくのだ。

これまで「こうだ」と思っていた自分という人間が、根本から覆されていくような気がして、エミリアは眩暈を感じた。

「大丈夫か？」

心配げにアウレディオが尋ねるので、この際、近くに一つだけあった椅子に、優先的に座らせてもらおう。

「大丈夫……だと思っうわ……」

微妙な返事にアウレディオが笑った。

「なんだよそれ？」

そのいつもと変わらない声に、大きく動揺していたはずの気持ちになぜだか落ち着いていくから不思議だ。

エミリアはさっきから考えていた事を、ふと口にしてみた。

「ディオは知ってたんでしょ？ 私の変な能力の事……」

「何？ 『天使の時間泥棒』ってやつ？」

わざと茶化した言い方をするアウレディオは、子供の頃のような無邪気な顔をしている。

つられたようにエミリアの表情も緩んだ。

笑顔のアウレディオに向かって、にっこりと頷く。

その途端、アウレディオはなぜか少し不機嫌になった。

「やっぱり……お前、覚えてないのか？」

「何を？」

そのあまりに急激な表情の変化に、エミリアは全く心当たりが無かった。

鸚鵡返しに聞き返してきたエミリアに小さくため息をつくとき、ア

ウレディオはくると背中を向けた。

そして後ろ姿のまま、ひとり言のように呟く。

「俺もお前に作ってもらった事があるんだよ。俺だけのための時間……」

「へ？」

返された返答があまりにも意外すぎて、エミリアは自分でもかなり間拔けな声が出たと思った。

アウレディオはもう一度ため息をつく、かなり投げやりに言い放った。

「学校を卒業する時の、騎士団の特別講習。騎士見習いを選別するための模擬試合」

エミリアは今も脳裏にくっきりと焼きついているその場面を思い出して、

「ああああっ！」

と大声で叫んだ。

街に暮らす子供達は十二歳で学校を卒業する時、それぞれ将来の職業を決定する。

それに合わせてそこからは別々の道を歩むのだ。

裁縫が好きだったエミリアはお針子になる道を選んで、アマンダの店で働き始めた。

庭仕事が好きだったアウレディオは、腕の良い庭師に弟子入りした。

その他にも家業を継いだ者、もっと勉強したいと上の学校に進学した者など、進む道は人それぞれ。

数ある職業の中でも、女の子に人気の職業は、お城で働く女官だった。

同じように男の子は騎士に憧れた。特に家柄だけではなく、庶民

の出であっても武勲によって騎士に取り上げられる事が多くなった最近では、その傾向は顕著だった。

騎士見習い志願としてあまりに多くの男の子達が集まるのを防ぐため、学校では卒業間近に、騎士団の特別講習が行われる。

騎士が行う模擬試合に似せたその講習は、勝ち抜いた者が騎士見習いになれるという、かなり高倍率の人気授業だ。

将来は庭師になると早くから宣言していたアウレディオも、目立ちすぎる風貌のために、何故かその試合に引っ張り出される事になった。

嫌々ながらの参加とは言え、根が負けず嫌いのアウレディオは、生来の運動能力の高さが災いして、あれよあれよという間に、決勝まで勝ち残ってしまった。

喜んだのは、膨大な数のアウレディオを好きな女の子達。

悔しがったのは、そんなアウレディオを、日頃から快く思っていなかった男の子達。

決勝戦はさながら、男対女の因縁の対決のようだった。

特別にアウレディオの応援をしていた訳ではないエミリアも、最後の試合にだけは熱が入った。

何と言っても、男の子が一丸となって、アウレディオと戦っている相手の男の子を援護するのである。

審判の目を盗んで物を投げるのはもちろん、アウレディオの物を破壊したり、わざとアウレディオに見える位置で、彼が大切に育てた花を折ったり。

目に余る行為にもアウレディオは良く耐えて、目の前の試合に集中しようとしていたが、見ているエミリアの方が、先に限界に達した。

「ちょっと、いいかげんにしなさいよ。ディオ！ 何とか言ったらどうなの、ディオ！」

エミリアが大きく息を吸い込み、お腹に力を入れてアウレディオの名前を呼んだ途端、

ピタリと全ての人物の動きが止まった。

驚いてしばらくはキョロキョロとしていたアウレディオだったが、自分以外の誰も動かない事を見て取ると、試合の邪魔になりそうな物を全て、さっさとその場から撤去した。

「あまりにも信じられない出来事だったんで、すっかり記憶の中で消去しちゃってた！」

エミリアの叫びに、アウレディオはふうつとため息をついた。

その対応にエミリアは少なからずムツとする。

「だってディオったら、あの後何も言わなかったじゃない……私はてつきり夢でも見たんだと思って……ディオの勝利だって、てつきり実力だって……」

「もちろん実力だよ。本来あるはずの無い妨害を排除しただけなんだから、お前の『天使の時間泥棒』の恩恵なんて微々たるものだろう？」

「なんですって！　だったらどうして騎士見習いにならなかったのよ。お誘いだってあちこちの街から来てたのに！　変なの！」

「変なのって、お前……俺は庭師になりたいって昔から言ってたただろ？　お前だってよく知ってるくせに……」

「だって！」

売り言葉に買い言葉で止まらなくなってしまった。

エミリアはこれまで口にした事のなかった本音を、つついアウレディオにぶつけてしまう。

「ディオの代わりに騎士見習いになった子達が、偉そうに言うんだもん。ディオは腰抜けだから逃げたんだって……私追いかけて行って文句言ってやりたかった……そう出来なかったのが今でも悔しくて悔しくて……！」

感情が高ぶるあまり、涙が溢れて来た。

そんなエミリアの頭を、アウレディオが宥めるように撫でる。
上目遣いにその顔を見て、エミリアは泣き笑いの顔になった。

「ごめん……もう三年も前の話だ……」

「本当に……」

クスクスと笑うアウレディオの顔を見ると、エミリアの心は
晴れてくる。

怒りもためらいも、さっき一瞬感じた、

(私って人間じゃないの……?)

なんて不安も、どこかに消し飛んでいく。

アウレディオが笑うと思わずエミリアも笑顔になる。

「……何だよ？」

なんて言いながら、本当は優しい眼差しを注いでくれる相手。
いつも安心出来る、どんな時でも温かい気持ちになれる存在。

アウレディオとのやり取りは、きっとエミリアにとっては必要不
可欠だ。

(だからディオ……これからも、大人になってからもずっと……い
つまでも私の大切な幼馴染でいてね……)

照れ臭くて絶対に面と向かっては言えない言葉を、エミリアは心
の中だけで呟いた。

夜空に瞬く星にも負けないアウレディオの蒼い瞳の煌きを横目に
見ながら、いつまでも、いつまでもこの関係が続く事を願った。

第四章 もうひとつの恋心 6

感謝祭最終日は、目に痛いほどの晴天に恵まれた。

初日にも負けないくらい多くの人々が城の中庭に押しかけ、今度はそれを上から見下ろす立場になったエミリアは、朝から感嘆のため息が止まらなかった。

中庭を埋め尽くし、城壁の外まで広がり、町の中央広場まで続く人人人。

これらの人々を自分の大声一つで止めなければならぬのかと思うと、その発想の異常さ以上に、自分達がやろうとしている事はあまりにも無茶に思えてくる。

実際、フェルナンド王子から計画を打ち明けられたランドルフは、「はい。そうですか……」

と承りながらも、どこか納得出来ないふうだった。

「本当に大丈夫かな……？」

呟くエミリアは王子に肩を叩かれ、

「大丈夫だよ」

軽く目配せされた。

露台へと続く真紅の絨毯の上に立つ王子は、黒い礼服に身を包み、既に準備を終えている。

周りにはいつものように近衛騎士達が付き従っていたが、その中にランドルフの姿は無かった。

指示された位置で待っているはずのランドルフとアウレディオに思いを馳せ、エミリアは隣に立つフィオナと手を繋ぎあう。

「大丈夫よ」

自分と同じくらい冷たくなったフィオナの指をそっと離して、エミリアも所定の位置についた。

高らかに吹き鳴らされるファンファールと共に、フェルナンドはマントを翻し、歩き始める。

その左前方になるように気をつけながら、エミリアも広い露台に向かつて、長いドレスの裾を踏みつけてしまわないように歩き出した。

ワーツという大歓声が、建物の中にいた時よりも間近に響き、王子を始め王族方の身を守る術が、一つ少なくなった事をエミリアは強く意識する。

先日の経験から言うと、向こうが狙ってくる可能性が高いのは、今この時だった。

（いくわ！）

覚悟を決めてエミリアは息を大きく吸い込んだ。

お腹に力を入れて、体の奥底から声を振り絞る。

「フェルナンド様！ランドルフ様！ディオ！」

大声を出すのにも限界があるため、へぜひ自分の名前も呼んで！
／というフィオナの訴えは敢えて無視しての人選だった。

渦のようだった人々のざわめきが、不自然極まりなくピタリと止まる。

次の瞬間、広い城の中庭で動き出す事が出来たのは、エミリアと彼女が名前を呼んだ三人だけだった。

フェルナンドを狙っていた弓使いは、尖塔の中ほどの階段でランドルフによって取り押さえられた。

弓をつがえようとした次の瞬間、時が止まり、気がついた時には目の前に近衛騎士が立っていたその人物は、すっかり取り乱し、いまだに訳の分からない事を口走っているのだと言う。

「しばらくの間金縛りにあっていたなんて……そんな事あるわけないのねえ？」

長椅子に腰かけ優雅に足を組むフェルナンド王子は、案外人が悪い。

そう評価しながらも、優美な姿には、やはりため息をつかずにはおられないエミリアだった。

「じゃあそろそろ、今度は俺達の願いを聞いてもらいます」

部屋の隅で突然口を開いたアウレディオに、エミリアの心臓がドキリと跳ねる。

「ああ。約束だからね」

王子に歩み寄ったアウレディオは、耳元に口を寄せ、何事かを囁いた。

王子は軽く頷くが早いか、

「なんだ。そんな事ぐらいお安い御用だよ」と上着の釦を外し始めた。

「ち、ちよつと待って下さいっ！」

悲鳴を上げて部屋から出て行こうとするエミリアに、わざと悪戯っぽく笑いかける。

「別にここにいっても構わないよ？」

「そ、そういうわけにはいきかないです！」

フィオナの手を引いて急いで退室しようとしたエミリアだったが、そのフィオナは足に根が生えたかのように動いてくれなかった。

「私も、別にここにいっても構わないんだけど？」

いかにも動く事が面倒そうに、気だるげに首を傾げるので、エミリアは力の限りに、彼女の華奢な腕を引っ張った。

「だめよ！ 絶対にだめなの！」

引き摺るようにしてフィオナを引っ張り出し、ようやく閉めた扉の向こうからは、我慢できなくなったと見えて、アウレディオの大爆笑が聞こえて来る。

エミリアはムツとしながら叫んだ。

「ディオ！ 後は頼んだからね！」

第四章 もうひとつの恋心 7

すぐに部屋から出てきたアウレディオに、どうだったのかを尋ねなくても、答えは予め分かっていたような気がした。

アウレディオもランドルフの時とは違って、実にあっさりと、「フェルナンド様は違った」と教えてくれる。

（やっぱりね）とホツとする気持ちと、（ああ……これでもうフェルナンド王子とランドルフとの接点もなくなったのか……）と寂しく思う気持ち半分で、エミリアは少し切なくなる。

すっかり暗くなった家までの帰り道を、久しぶりにアウレディオと二人で歩きながら、エミリアはこれまでの怒涛のような数日間を思い出していた。

「もうお城に行く事もないんだよねえ……」

話したい事は山ほどあるのに、アウレディオが「ああ」とか、「そうだな」とか生返事しか返さないのでつまらなくなり、途中で口を噤む。

（明日仕事場に行ってから、フィオナと話そう。フィオナだって自分の観点からしか話をしてくれないけど、きっとディオよりはましだわ……）

こっそり心の中だけで誓ったつもりだったのに、不意にアウレディオが立ち止まり、エミリアは慌てた。

「え、何？私、何も言っていないよ？」

坂の途中で置いてきぼりにした形になってしまったアウレディオを、エミリアは急いで振り返った。

アウレディオは黙ったまま、左手に見えて来た自分の邸の庭園をじっと見つめている。

月明かりの中、咲き誇る薔薇に囲まれて、そこに佇んでいたのは

エミリアの母だった。

「お母さん！」

呼びかけると手を振って答えてくれるから、エミリアはすぐに走り出す。

けれどもさっきから立ち止まったままのアウレディオは、まるで根が生えてしまったかのようにその場所から動かなかった。

（ディオ……）

微動だにしないアウレディオのどこか悲しげな様子に、エミリアは意図的に意識の外に追いやっていた大切な事を思い出した。

（そうだった……上手くミカエルを捜し出さないと、このままお母さんと一緒には暮らせないだった……）

小首を傾げて嬉しそうに二人を待っている母。少女のような優しいあの人を失いたくなくて、アウレディオもエミリアを手伝ってくれていたのに――。

「ディオ……ごめん」

そっと呟いた。

アウレディオは小さく首を振って、エミリアの顔を真っ直ぐに見つめる。

そんな彼にそれ以上何と声をかけていいのかわからなかった。

（お城に行けた事ですっかり舞い上がって、自分のやらなきゃいけない事をあんまり意識してなかった。こんなんじやお母さんの娘失格だね……それに引き換えディオは、いつだってお母さんの為に動いてたんだもの……）

考えれば考えるほど、自分はなんと自分勝手な人間なのだろうと思ってしまう。

（ゴメンね。お母さん。ゴメンね）

心の中で繰り返すエミリアに母は天使の笑顔で呼びかける。

「お帰り。エミリア」

いつまでもこの笑顔に迎えられたいと思う。それがエミリアの願い。

「お帰り。アウレディオも」

穏やかに笑い返すアウレディオも、抱えている思いはきつと同じはず。

（でももうミカエルを捜そうにも手掛かりが無い……私がその人を好きになるはずだっていうんなら、ランドルフ様もフェルナンド様も違った今、全くの八方塞がり……）

絶望的な状況に落ち込むしかないエミリアの顔を、母が、

「どうしたの？」

と覗き込む。

「なんでもないよ」

笑って誤魔化そうとしても、母にはきつと通用しない。

黙ったままエミリアの頭を撫でると、母はアウレディオに一通の手紙を差し出した。

「はいアウレディオ。お手紙届いてたわよ。配達の人が間違えてうちに届けちゃったのね。ごめんなさいね」

「別にリリーナのせいじゃないだろ」

何の変哲も無い白い封筒を、アウレディオは宛名が自分の名前になっている事を確認して裏返した。

裏に差出人の名前が無かったのでそのまま封を切る。

白い便箋に目を落としたアウレディオの顔は、見る見るうちに表情が変わっていった。

「ねえ誰から？」

尋ねるエミリアには答えをくれない。

けれどエミリアの顔と手紙とを何度も何度も見比べて、何かを必死に考え込んでいる。

「私の知ってる人？」

しつこく食い下がるエミリアを全く無視して、アウレディオは母に向き直った。

「なありリーナ。俺達が捜してる相手にエミリアが恋するって話は、絶対に本当なのか？」

「本当よ」

間髪入れずに帰ってくる母の声に迷いは無い。

アウレディオはなぜか大きなため息をつく、肩を竦めてみせた。エミリアには全く意味が分からないというのに、母はそうでもないらしい。

アウレディオの不可解な行動に、動じもせず彼を見つめている。

「背中に星型の痣があるっていうのも？」

「うん。本当……」

母の大きな宝石のような瞳が、何かの色に揺れた。

ふうっともう一度大きな溜め息をつく、何かを吹っ切るように首を振って、アウレディオはエミリアに問いかけた。

「お前……まだ他にも好きな奴がいるか？」

「は？」

一瞬呆けてしまったエミリアに、アウレディオは少し苛立たしげに眉を寄せる。

「ランドルフ様とフェルナンド王子の他にも、まだ好きな奴がいるのかって聞いているんだよ」

エミリアは母のニコニコ顔を見ながら、焦ってアウレディオに詰め寄った。

「な、な、何て事言うのよ！」

（知らない人が聞いたら、どんなに恋多き女なのかって思うでしょ！）

それ以上余計な事を言われたら堪らないので、

「いないわよ。いるわけないでしょ！」

慌てて叫んだ。

「そうか。だったらやっぱりそういう事か……」

一人で何か納得したらしいアウレディオに

「何が？」

といくら尋ねてみても、

「これでいいって事だよ」

と手に持った白い封筒をヒラヒラと顔の前で振ってみせるだけ。

（何がいいのよ。全然意味が分からない）

訝しげなエミリアの肩をポンと叩いて、アウレディオは自分の家に向かって歩き始めた。

「ちよちよっと、ディオ！」

エミリアの声には振り返りもしないで、

「明日になればわかる」

背中越しに手を振って行ってしまう。

（いいえ、全然わかるとは思えないんですけど！）

納まらない気持ちを抱えたまま、エミリアは母と共に家に帰った。
キラキラと降るような星が、とても綺麗な夜だった。

第五章 初恋の人 1

久しぶりのアマンダの店。

フィオナがやって来るとすぐに、エミリアは昨夜のアウレディオのおかしな様子を報告した。

「結局、その手紙の差出人は誰だったの？」

「さあ」

そんな事すらわからないのだからどうしようもない。

少なすぎる情報を上手く繋ぎ合わせて、何らかの答えを導き出すために、エミリアはその日の仕事で、ずっと上の空だった。

（ディオの嘘つき。今日になったって、やっぱりわかんないじゃないかい）

エミリアは考える事を放棄して、窓の外を眺めた。

暮れ始めたリンデンの街。

マチルダとミゼットは久しぶりの〈今日のアウレディオ様〉を見るために、飛ぶような勢いで帰宅して行った。

「私達もそろそろ帰るわよ」

フィオナの声に立ち上がり、エミリアは何気なく窓の外に目を向け、そして棒立ちになった。

大通りの遥か向こうから、一人の人物が歩いて来る。

背中には大きな荷物袋をしょって、手に持った地図らしい物を眺めながら、時折通りかかる人を呼び止めて、どうやら道を尋ねているようだ。

（いったいどうしたんだろう？）

その人物から目を離せない自分が、エミリアはどうにも不思議だ

った。

（知っている人？ううん。そんなわけ無いわよね……？）

青みがかった黒髪は、肩に付くほど伸び放題で、着ている服も持っている荷物も全部どことなく薄汚れている。

旅人か。それとも浮浪者か。どちらにせよ、大通りを行き交う他の人々とは明らかに異彩を放っているのに、嫌な気持ちではなく、本当に純粋に目が離せない。

長い前髪の間から、その人物がふっとこちらに視線を向けた。

夜明け前の空のような、紫色の瞳と目が合った瞬間、エミリアはアマンダの店の入り口に向かって走り出していた。

「どうしたのエミリア？」

フィオナが呆気にとられて問いかける。

けれどエミリアに、答えを返している余裕は無かった。

（早く！早く捕まえないとまたいなくなっちゃう！）

必死の思いで通りに飛び出し、大声で叫んだ。

「アル！ アルフレッド！」

黒髪の男は驚いたようにエミリアの姿を見つめ、それから両手を大きく広げて破顔した。

「エミリア！ ただいま！」

紫の瞳が喜びを湛えて輝く。

エミリアは全速力で、彼の腕の中に飛び込んだ。

「なるほど……初恋の人の登場ってわけね……」

納得したかのように何度も繰り返すフィオナの口を塞ごうと、エミリアは大慌てする。

「な、何言ってるのよフィオナ！」

しかしそんな様子も微笑ましいと、アルフレッドは目を細めるばかりだった。

「いいね。若い子って可愛いよね」

「あんただってまだ十八じゃないか……かなり年上みたいな言い方するなよ」

夕刻の鐘と同時に、アマンダの店にやって来たアウレディオも交えて、その日の帰り道はかなり賑やかな事になった。

(それにしても……)

エミリアはアウレディオと並んで歩くアルフレッドに視線を向ける。

スラッとした長身。隙の無い身のこなし。よくよく見れば最後に会った六年前とそう変わってはいないのに、始めのうち誰だが分からなかった。

そんな自分がちよっぴり悔しい。

学校を卒業して遠くの街に行くアルフレッドを見送った時は、エミリアはまだ九歳で、彼のマントにすがって、〈行かないで！行かないで！〉と泣くばかりだった。

ある日ふいにいなくなって会えなくなってしまった母と、この三つ年上の幼馴染を、どこか重ねて見ていたのかも知れない。

〈大丈夫だよ、エミリア。絶対に俺は帰って来る。この街に帰って来るからな〉

大きな手でエミリアの栗色の頭をポンと叩いて、アルフレッドが行ってしまってから、もう六度の秋が来た。

いつかこの坂道を登って現れるんじゃないかと、部屋の窓から外ばかりを見ていた頃は過ぎ、いつの間にかエミリアにも他に気になる人が出来、新しい生活の中に楽しみを見つけた。

けれど幼い日に好きだったアルフレッドは、やっぱり今でもエミリアの中では特別だった。

「しばらくはアウレディオの家に厄介になる事にした。この街に、もう俺の家は無いからな……」

アルフレッドの就職を機に、一家ごと違う街に移り住んだのだったか。

エミリアの家の前に建っていたアルフレッドの生家跡は、今では

もうただの空き地になっている。

「おば様とおじ様は？元気にしてらっしゃるの？」

フィオナの問いかけに、アルフレッドが事も無げに答える。

「いや。二人とも亡くなったんだ。だから俺もこいつと同じ天涯孤独の身の上で奴さ……」

アウレディオの柔らかな髪をぐしゃぐしゃとかき混ぜながら、アルフレッドはなんでもないと笑うので、エミリアにはその言葉を事実として受け止める事がなかなか出来なかった。

「えっ……？」

歩みを止めてしまったエミリアに向かって、アルフレッドはわざわざ後帰って来た。

パチパチと瞬くうす茶色の瞳を覗き込んで、この上なく優しく笑った。

「ごめんなエミリア。きつと帰って来るって約束、守れなくって悪かったって……それが親父とお袋からの伝言だ」

パタパタパタとエミリアの頬を伝って大粒の涙が零れ落ちた。

頭の中に次々と、昔の隣人の面影が甦る。

アルフレッドの恰幅のいい母親。人のいい父親。みんなみんな優しかった。母親のいなくなったエミリアを、本当に可愛がってくれた。

「私……私……！」

顔を覆ってしまったエミリアの肩を、フィオナがぎゅっと抱き締める。

「悪い……泣かせたくなかったけど、結局黙ってる事は出来ないもんな……」

アルフレッドが優しく頭を撫でてくれる。

その全てのぬくもりの向こうから、声が聞こえた。

「エミリア」

滅多な事ではちゃんと名前を呼んでくれないアウレディオが、自分を呼んでいる。

エミリアは止まらない涙を必死で手の甲で拭って、顔を上げた。

「ごめんなさいアル……一番辛いのは私なんかじゃないのに……！」
「気にするな。エミリアがこんなに会いたがってくれてたんだって、
きつと親父達だって喜んでるさ」

大好きだった優しい人は、今も変わらずやっぱり優しかった。

第五章 初恋の人 2

学校に入学するよりもっと前、小さな頃は、エミリアは道向かいに住む三つ年上のアルフレッドが、たいそう苦手だった。

体が大きくて乱暴者のアルフレッド。同じ年頃の男の子でも、女の子のように可愛くて物静かなアウレディオとは全く違う。大きな声も、太い腕も、エミリアはとっても嫌だった。

エミリアのままごと道具を隠したり、長い髪を引っ張ったり。その度に母親にこっぴどく叱られるのに、「ごめんなさい」と殊勝な顔をして謝った次の瞬間には、もう違ういたずらを仕掛けてくる。

アウレディオの後ろに隠れてそれらの攻撃を凌ぐ事の多かったエミリアは、今度は他の男の子達に、「エミリアはアウレディオと結婚するんだろう!」と冷やかされる事になった。

その展開になると、決まってアルフレッドはいつの間にか姿を消していた。

乱暴だけど一本筋が通っていて、冷やかしなんかには決して混じらなかったアルフレッド。

大嫌いだった近所の男の子が、エミリアの中で、ある日を境に大好きな男の子へと変化した。

学校に入学して一ヶ月。エミリアがようやく学校にも慣れたかという頃、彼女の母はある日突然に姿を消した。

「お母さんは故郷に帰ったんだよ」

父に何度説明されても納得がなかったエミリアは、泣きながら近所中を捜し回った。

「お母さーん、お母さーん、お母さーん！」

「エミリア？」

異変に気付いたアウレディオが駆けつけて来た時には、エミリアは服も泥だらけで、すっかり泣き濡れた状態だった。

「ディオ……お母さんがいなくなっちゃったよう……」

抱き付くエミリアの体を、アウレディオはハッと自分から引き剥がし、肩を掴んで顔を覗き込み、一言一言ゆっくりと言いつけた。「俺が捜してくる。絶対に捜して来てやるよ。だからエミリアは家に帰って待ってて」

力強い足取りで駆け出していったアウレディオは、そのまま一週間ぐらい帰って来なかった。

（大好きなお母さんがいなくなってしまった……ディオも帰って来ない……）

エミリアはショックのあまり、その後しばらくを家の中だけで過ごした。

アウレディオに言われた「待ってて」の言葉だけを、ただ忠実に守り続けた。

一步も家から出ないまま、いったい何日が過ぎたのだろう。

カランカランと鳴った玄関扉の鐘に、ぼんやりと立ち上がったエミリアは、

「ディオ？」

微かな希望を込めて、扉から入って来た人物を見つめた。

そこに立っていたのは、アウレディオよりかなり大きな男の子だった。艶やかな黒髪も、その間から見え隠れする紫色の瞳も、アウレディオとは似ても似つかなかった。

「アルフレッド？ ……アル？」

驚き、目を見張るエミリアに向かって、アルフレッドはコックリと頷く。

「昨日もその前もずっと学校休んでるみたいだから、迎えに来た」
ぶっきらぼうな言い方はいつも通りだったが、その時エミリアは、

不思議とアルフレッドを怖いとは思わなかった。

「行くぞ」

という声につられて、

「うん」

と普通に返事する。

数日前から床に放り出したままだった通学用の鞆を拾って、エミリアはアルフレッドの後ろについて学校へと向かった。

一言も会話は交わさないうまま、二人は学校までの道のりを一緒に歩いた。

次の日もアルフレッドは、朝からエミリアを迎えに来た。前日と同じように話もしないで、学校までの道のりをただ一緒に歩く。

もうすぐ学校が見えるという頃になって、前から大きな犬がやって来てエミリアは歩みを止めた。

犬は苦手だ。通学路で出会ったら、いつもアウレディオの後ろに隠れてやり過ごす事にしていた。

けれどそのアウレディオは、今ここにはいない。

(ディオ……)

立ち竦むエミリアをアルフレッドが振り返った。

「犬が……」

涙声で言いかけるエミリアに、黙ったまま手を伸ばす。

エミリアの小さなてのひらをギュッと握り締めて、グイグイ引っ張って、早足で歩き続ける。あっという間に、大きな犬の横は通り抜けてしまった。

エミリアは横に並んだアルフレッドの顔をちよつと見上げてみた。長い前髪の下からエミリアを見ていた紫色の瞳は、思っていたよりずっと優しい色をしていて、エミリアはなんだかドキドキした。次の日も、その次の日もアルフレッドはエミリアを迎えに来た。

並んで歩く二人を、「いやーお熱いねー」などと冷やかす男の子達は、あっという間にアルフレッドに捕まって、二度とそんな事は言えないほどに仕返しされた。

大きな犬が来たら必ず手を繋いでくれるし、急スピードの馬車からは体を張って庇ってくれる。

アルフレッドはひよっとしたら、エミリアを守ってくれているのかもしれない。

「ありがとう」

勇気を出して小さな声でお礼を言ってみても、アルフレッドは何も答えないので、エミリアは聞こえていないのかと思った。

けれど真っ直ぐ前を向いたままの横顔をそっと見上げてみたら、頬を真っ赤に染めていたので、エミリアまでなんだか赤くなってしまった。

「ほら、あの子だよ。お母さんがなくなっちゃったんだってさ」

ヒソヒソ声の噂話が偶然耳に飛び込んできて、エミリアは一瞬ギクリとする。

懸命に前に踏み出そうとしていた小さな足が、もうピクリとも動かなくなってしまうって途方にくれる。

(いったいどうしたらいいんだろう……?)

このまま地面に沈み込んでいきそうな気持ちで俯いていたエミリアは、男の子達の、

「ぎゃあああっ」

という声に驚いて顔を上げた。

一人の男の子が、頭一つも自分より大きな上級生の男の子達に、飛びかかっていったところだった。

「エミリアに！エミリアに謝れ！」

必死に手足をバタつかせる下級生に驚いて、上級生達は口々に「ごめん。ごめん」と謝って逃げ出して行った。

呆気にとられていたエミリアは、その時、アルフレッドが目には涙をいっぱい溜めている事に気が付いた。

「どんなに寂しいか！どんなに悲しいか！そんな事もわからないくせに！」

息を弾ませたアルフレッドの真剣な顔が、だんだん滲んで見えな

くなくて、エミリアは自分が涙を流している事に、初めて気が付いた。

アルフレッドはエミリアに駆け寄って来ると、まるで世界中の全てから庇うように、背中に隠してくれる。

「俺が誰にも何も言わせないから。エミリアに何か言う奴は、俺がいつでもやっつけてやるから！」

自分の体がすっぱりと隠れてしまうようなアルフレッドの背中を、エミリアはその時、世界で一番頼りになる背中のように感じた。

その瞬間から、それまでどちらかと言えば苦手だったアルフレッドは、エミリアの大好きな男の子になった。

第五章 初恋の人 3

昔の友人と食事をしてからアウレディオの家に行くと言うアルフレッドと、途中で違う道に入るフィオナと分かれ、エミリアはアウレディオと二人で、家までの坂道を歩いた。

「ディオ……アルが帰って来るって、本当は知ってたんでしょ……昨日の手紙、ひょっとしてアルからだったの？」

「ああ」

あっさりと答えるアウレディオを責めるつもりは、エミリアにはなかった。

恨み言を言ってみても、きっとアウレディオは眉一つ動かさない。「いきなり再会したほうが盛り上がるだろう？だから敢えて黙った。でもまさか地図を片手に、仕事場まで捜しに行くとは思わなかったけどな……」

エミリアは苦笑した。

確かに顔もまだはつきりとは見えない距離の時から、自分は窓に釘付けになった。

昔からどうしようもなく、アルフレッドに惹かれている事は確かだ。

しかしアルフレッドに対する思いを、恋だと簡単に結論付けてしまっただけにいいのだろうか。

エミリアの沈黙をどんな風に解釈したのか。アウレディオは、

「結局そうなんだよ」

と溜め息混じりに呟く。

「どんなに憧れの人が増えたって、お前が好きなのは、結局子供の頃からアルフレッドなんだよ。今この時に、タイミングよくこの街に帰って来たのが、何よりの証拠だろ？」

「それってもしかして……?」

目を見張るエミリアに、アウレディオは意味深に頷く。

(アルが私達が捜してるミカエルだって事……?)

軽々しく口に出してはいけないような気がした。

取り返しのつかない事になりそうな気がする。

エミリアを見つめるアウレディオの瞳は、とても穏やかで静けさに満ちている。

しかし、なんだかもっと違う色を帯びているようにも思えてならなかった。

直感のようなその思いが、決して間違いではなかったとエミリアが知るのは、まだこの時ではなかった。

翌日、再びアマンダの店を訪れたアルフレッドは、伸び放題になっていた髪をさっぱりと切り揃えていた。

紫色の瞳がなおいっそうはつきりと見えるようになって、エミリ

アは動揺を隠せない。

(ディオが変な事言うから……なんだか変に意識しちゃうじゃない……!)

エミリアの方はアルフレッドの一挙手一投足にドキドキしているのに、当の本人はそんな事はお構いなしのようだ。

「凄い顔だなエミリア。まるで百面相だ」

同じ事でもしアウレディオに言われたとしたら、拳を振り上げて猛然と怒る所なのに、そうしようと思わないのはどういう事なのだろう。

誰に尋ねたとしても、返って来る答えはおそらく一つ。

(私はやっぱり……アルの事が好きなの?)

自らに問いかけるエミリアは、

「お邪魔だろうから、私は一人で帰るわ」

といなくなったフィオナに別れを告げ、アルフレッドと二人で、夕暮れの街を家へと急いだ。

「懐かしいな。すっかり変わった場所も多いけど、昔と全然変わって無い所もある。エミリア……あの広場の隅の砂場を覚えてるか？」

「もちろん覚えてるわ！私がディオと一緒にお城を作ってたら、いつだってアル率いる男の子達に邪魔されたのよ！」

口を尖らせて苦言を呈したエミリアに、アルフレッドは大きな声で笑い出した。

「ハッハッハ。俺もまだまだガキだったからなあ。そんな事やって逆効果だって今ならわかるんだけど……」

「逆効果？」

「ああ。ただのやきもちだったんだよ」

エミリアはハッとアルフレッドの顔を見上げた。

紫色の瞳がこれ以上ない優しさを湛えて、エミリアを見つめる。

昔のアルフレッドからはとても想像出来ない表情。けれど再会してから、何度も何度もエミリアを動揺させる表情。

エミリアは慌てて、視線を前に向け直した。

心臓が爆発しそうに激しく脈打っている。黙っていると息が詰まりそうで、何かを話さなければと思うのだが、何を話したらいいのか全く浮かんでこない。

パクパクと口を開けたり閉めたりを繰り返すエミリアに、プツと小さく笑って、アルフレッドは唐突に口を開いた。

「俺さ、親父とお袋の本当の子供じゃなかったんだ」

そのあまりの内容に、エミリアはたと足を止めた。

しばらく固まった末に、目を剥いてアルフレッドを見上げる。

そんなエミリアに視線を落とし、アルフレッドは大きく破顔した。

「何だ？やっぱり凄い顔だぞ、エミリア」

屈託の無い笑顔に、エミリアはアルフレッドの強さを感じた。

小さな頃からどんな時でも自分の力を信じて、それを出し切る事に躊躇が無かったアルフレッド。

彼はエミリアの知らない土地でも、そのままの心で成長し、そしてこんなに強い人になった。

「夫婦揃って事故に遭って、いよいよダメだって言い渡された時、見守る俺を呼び寄せて、実は養子だったなんて言うんだ。まったく……天地がひっくり返ったような驚きだったよ」

軽い口調と明るい声とは裏腹に、アルフレッドの話の内容は重く辛い物だった。

けれど驚きや悲しみや寂しさ、いろんなごちゃ混ぜの感情を自分自身で乗り越えたからこそ、こんな話だって笑ってする事が出来るのだろう。

アルフレッドのそんな強さに、エミリアは激しく焦がれた。

「今まで信じてきたものが全部嘘だったような気がしてさ。しばらくは仕事も何もかも全部嫌になって、自暴自棄になった事もあったけど……でもおんなじ環境にいるあいつの言葉だけは、不思議といつでも心に響いた」

「あいつ」という言葉に、エミリアは思わずピクリと反応した。

色素の薄い柔らかな髪が、目の前をチラチラする。

「帰って来たくなったんだよ……あいつがいる街に。そしてエミリアがいる街に……！」

不意に真顔になって自分を見つめるアルフレッドに、エミリアはどうしようもなくドキドキしていた。

しかしどうやらそのドキドキは、単純にアルフレッドのせいばかりとは言えないようだ。

彼が口にした「あいつ」という言葉に、どうしようもなく動揺する。

そんなエミリアに気付いているのかいないのか。アルフレッドは少し切ないような表情で、いつもとは違う笑い方をする。

「帰って来て良かったよ。きっと何かが変わる気がする」

差し出されたアルフレッドの右手を、エミリアはぎゅっと握り締めた。

「うん、私も。私もそう思う……」

それがどういう変化なのか。

エミリアにはまだ、本当にはよくわからないままだった。

第五章 初恋の人 4

星の瞬き始めた街を、エミリアはアルフレッドと二人、子供の頃のように手を繋いで帰った。

恥ずかしいような嬉しいような不思議な気持ち。

頭の中ではアルフレッドの「焼きもちだったんだよ」や「エミリアがいる町に」という言葉が、何度も何度も繰り返されている。

（どういう事だろう……？ まさか……？ まさかね？）

自分の手を握るアルフレッドの大きな手を見つめながら歩き続けるエミリアは、坂道のでっぺんに自分の家が見えて来た瞬間、その玄関扉の前に、人影が立っている事に気がついた。

月の光を反射して、昼間よりも眩しく輝く淡い色の髪。挑むようにこちらを見据える大きな蒼い瞳。

エミリアとアルフレッドは、どちらからともなく繋いでいた手を離した。

アウレディオは月明かりの中、冷たくも見えるほど冴え冴えとした表情をしていた。

「遅くなるんなら、一言そう言ってくれ」

その言葉で、アウレディオがアルフレッドを心配していたんだという事が分かった。

「お前もだ。リリーナが心配して、さっきからあちこち捜しまくってるぞ」

いつもよりかなり帰宅時間が遅くなってしまった事に今ごろ気が付いて、エミリアはハツとした。

「まあ、二人一緒だったんならいいけどな」

小さく溜め息をついて自分の家に帰ろうとするアウレディオに、エミリアは急いで、「ごめん」と呼びかけた。

アウレディオは面倒そうに視線だけ振り向いて、「俺じゃなくて
リリーナに謝れ」と手を振った。

それでもエミリアはなぜか、「ごめん」と繰り返さずにはいられ
なかった。

アウレディオは仕方なしに体ごと振り返って「分かったから」と
大きく頷き、家の中へと引っ込む。

その一瞬のアウレディオの顔が、エミリアはいつまでも忘れられ
なかった。

（私、何がしたいんだろう？ ディオに何が言いたいんだろう？）
心の中で自問自答しているところに、アルフレッドが悪戯含みの
声で呟く。

「お目付け役に怒られちゃったな……」

ちよつと茶化したような言い方がアルフレッドらしくって、エミ
リアは笑いながら彼の顔を見上げた。

その途端、アルフレッドの紫色の綺麗な瞳が、ググッと近付いて
来る。

エミリアは思わず反射的に目を閉じた。

（えええっ、もしかして！）

驚愕の思いでぎゅっと目を閉じた瞬間、すぐ耳元でアルフレッド
の大爆笑が聞こえた。

「そんなにぎゅうって目をつむるなよ。エミリア、人相まで変わっ
てるぞ」

その失礼な物言いにエミリアは首まで真っ赤になって、ちよつと
腹を立てた。

「そんな言い方ないじゃない！ やっぱリアルは、意地悪アルフレ
ッドだわ！」

「なんだよそれ？」

涙まで流して大笑いするアルフレッドにつられて、エミリアも思
わず笑い出す。

けれど実際のエミリアの胸中は、たった今気付いてしまった事実

に、笑うどころの気持ちではなかった。

それがアルフレッドの心からの思いだったにしろ、雰囲気になされたのにしろ、アルフレッドは多分今、エミリアにキスをしようとした。

二人とも笑い出してしまつて、すでにそんな甘い雰囲気はもう跡形も無く消え去ってしまったが、もしさつきアルフレッドとキスしていたら、果たしてどうなっていたのだろうか。

——エミリアは必ずミカエルに恋をする。

——エミリアがキスしたら、ミカエルは本当の姿を取り戻す

母の話が全て本当だとしたら、アルフレッドはいったいどうなっていたのだろうか。

エミリアとキスして、本当の姿を取り戻して、その先は——。

（お母さんが言う所の『天界』とやらに帰って、大天使ミカエルの後継者として生活していくんじゃないの？　だとしたら私はもう二度と、アルには会えないんじゃないの？）

そんな大切な事に、エミリアはこの時になって初めて気がついた。アルフレッドと笑って別れた後、エミリアは拳を握り締めて急いで家に帰った。

自分の疑問の答えを知っているだろう母に、一刻も早く会うために——。

母は長椅子に腰をおろして、エミリアの質問に一言一言頷きながら、真剣に答えてくれた。

そしてエミリアは、それがアルフレッドであるにしろないにしろ、ミカエルである人物とは、キスしたら最後、もう二度と会えないという事がわかった。

「エミリア……ごめんね……」

泣き出してしまった母には何の罪も無い。

そんな事はエミリアにもわかっていた。

恨むなら母が言うところの「神様」だ。

しかしすっかり脱力してしまったエミリアは、俯いたまま、「神様って意地悪だね」と呟くぐらいしか出来なかった。

「聖なる乙女」としての仕事を成功させて母と一緒に暮らすか。

自分の好きな人をミカエルの姿に戻さないために母を諦めるか。

エミリアには最初から、どちらか一方しか選ぶ権利は無かったのだ。

これが一週間前の話だったら、エミリアは迷わず母を選んだだろう。

しかし、小さな頃から好きだった、そしてようやく帰って来てくれた、ひよっとすると自分に好意を抱いてくれているかもしれないアルフレッドが、これきり目の前からいなくなってしまうのかと思うと、もうそんなに簡単にどちらかを選ぶ事は出来ない。――出来るわけが無い。

泣き崩れてしまった母と共に、エミリアは呆然としたまま長い時間、居間の椅子に座り続けた。

二人のやり取りをいつも黙って見守ってくれていた父が、母を二階の寝室に連れて行った。

「もう眠るように言ってきたから……」

エミリアを安心させるかのようににっこりと笑い、それから彼女の長い話に延々と付き合ってくれた。

（こんな風にいつでもお父さんと二人で乗り越えて来たな……だからこそお父さんを幸せにしてあげたかったのに……今度こそお母さんとずっと一緒にいさせてあげたかったのに……！）

エミリアの思いと父の思いは、同じくらいお互いを思いあっている。

だから今回ばかりは、決して合意出来そうにはない。

「お父さんは、お母さんと出会ってエミリアが生まれて、もう一生分の幸せを貰ったと思ってる。そしてそれは、この先たとえお母さんと離れてしまっても、ずっと変わらないって信じてる。だからエミリアは私達の為なんかじゃなく、自分のしたいようにすればいいんだよ」

優しい父の声に、エミリアは黙ったまま首を横に振り続ける事しか出来なかった。

（それはだめだよ。絶対にだめだ。でも大好きな人を失うなんて…私にはそれも絶対に無理……！）

考えても考えても、答えの出ない長い夜だった。

第六章 本当の気持ち 1

ほとんど眠れないままの夜が明け、エミリアは新しい朝を迎えた。母の仕事を手伝うと宣言してから、もうすぐ十日ほどになる。

早く仕事を完了させて、母と一緒に暮らせるようにするぞと、今までのようには無邪気に拳を突き上げられない自分を、エミリアは憂鬱に感じていた。

見つけたその時が、ミカエルである誰かとの別れの時になるという事を知り、どうしても意欲的になれない。

自分の好きな人と会えなくなる事が、最初から決定しているのだから、こんなにやる気をそがれる仕事は無い。

（板ばさみってこういう事を言うんだろうなあ……）

母が準備してくれた美味しい朝食を口に運びながら、エミリアはしみじみとそう思った。

涙が枯れるほどに泣き、頭が痛くなるほどに一晚散々悩んだせいで、かえって今朝は吹っ切れたような気分だった。

（いくら悩んだってなるようにしかないわ……まだアルがミカエルだって決まったわけじゃないんだし……ましてや、私とアルがキスなんてするわけ無いんだから！）

落ち込んだ後ほど前向きになれるのが、エミリアの良い所である。カランカランと鳴った玄関扉の鐘に、

「あっ、私が出てみるから」と母を制して立ち上がる。

立っていたのはアルフレッドだった。

「よう。これから新しい仕事の選抜試験に行くんだ。途中まで同じ道だから、久しぶりに一緒に行かないかなって思ったんだけど……」

「どう？ 行くか？」

いつもどおりの明るい笑顔に、エミリアはどこかホッとして、嬉々として頷いたが、アルフレッドの背後を確認してみる事も忘れはしなかった。

「……ディオは？」

「ああ。今日は行く先が一緒だからって誘ったんだけどふられた。一人で先に行くってさ」

アルフレッドから返って来た返事が思いのほか胸に刺さって、エミリアはそんな自分にびっくりする。

（どうして私とアルと一緒に嫌なのよ、ディオ……）

自分でもよく分からない感情を怒りに置き換えながら、エミリアはアルフレッドと共に、家を出た。

「昨日はごめんな。突然変な話しちゃったな」

照れたような恥ずかしいようなアルフレッドの声に、エミリアは慌てて彼の顔を振り仰ぐ。

「久しぶりに会ったのに、いきなりあんな重い話から始める事は無かったよな……一人になってからちよつと反省した。久しぶりに会ったエミリアが思ってた以上に綺麗になってて、ほんとと言うと再会してからずっと、俺はいっぱいいいんだ……」

「アルが？」

照れ隠しも兼ねて笑いながら言い放ったエミリアを、アルフレッドは同じように笑いながら捕まえようとする。

「そう、この俺が！ 小さな頃から知ってる近所の女の子に翻弄されっぱなし！」

「翻弄なんてしてないわよ」

「俺が勝手にされてるんだよ」

優しく手首を掴まれて引き寄せられても、エミリアは全く嫌な気持ちがいなかった。

アルフレッドの腕の中、すっぽりと抱き締められていると安心感さえ覚える。

それなのに――。

「アウレディオに感謝しなくちゃな。あいつが『帰って来たいんだったら帰ってくればいい』って後押ししてくれたから、またリンデンに帰って来れたんだし、それでまたエミリアにも会えたんだし……」

アウレディオの名前が出て来ると、思わずこの場所から逃げ出したいくなるほどに、体が過剰反応する。

どうにも居心地が悪くて、アルフレッドの腕の中から抜け出したくなる。

エミリアはどうやら、アルフレッドの口からアウレディオの名前が出て来るのが、好ましくないらしい。

「エミリアと仲良くなるきっかけをくれたのだって、もとはと言えばアウレディオだったんだぞ」

遠い所を見つめるアルフレッドの横顔を、エミリアはざわめく胸を抑えながら、懸命に見上げた。

「エミリアの母さんがいなくなった時、あいつ、俺のところに来たんだ。自分はエミリアのために母親を捜しに行くから、その間エミリアを頼むって、守ってやってくれて。いつも羨ましく思ってた騎士役を、譲ってもらったみたいなのがして……嬉しかったな。意地悪ばっかりして、あの頃は俺、すっかりエミリアに嫌われてたかな」

「そんな事ないよ……」

形ばかりの返答を返したが、アルフレッドの話の最後の方は、もはやエミリアの耳には入っていなかった。

（私のため？）

アウレディオがあんなにボロボロになるまで母を捜し歩いた理由を、アルフレッドはそう言った。

（ディオはお母さんの事が好きだからって、単純にそう思ってた……違うの？　だってディオが好きなのは、今も昔もずっとお母さんで……）

今までずっとそう思い込んでいた事が、なんだかよく分からなくなってくる。

（じゃあディオがあんなに一生懸命、私を手伝ってくれるのはどうして？）

今まで一番近くにいて、一番分かっているつもりだったアウレディオの事が、全く分からない。

それは自分という人間の基盤が失くなって、今にも転びそうになっているような恐ろしく不安な気分だった。

第六章 本当の気持ち 2

「あら？ 今日仲良く一緒にご出勤？ それともアルフレッドの方はまだただのお見送りなのかしら？」

先にアマンダの店に着いていたフィオナは、朝からなんとも辛辣な言葉で、エミリアと共に現れたアルフレッドを出迎えた。

「そう苛めるなよフィオナ……ようやく今日、新しい仕事場の入団試験なんだからさ……」

「あらそう」

「えっ？ そうなの？」

肩を竦めるアルフレッドに、フィオナと一緒にエミリアも驚きの目を向けた。

アルフレッドは本当に困ったように苦笑する。

「エミリアにはさっきちよろつと言っただけだな……やっぱりちゃんと聞いてなかったか……」

「ご、ごめんなさい！」

勢いよく頭を下げると、

「いいって。いいって」

頭の上からアルフレッドの寛容な声が降って来る。

「ま、俺の実力だと受かって当然。でも今日の本題は俺の合格じゃないからな……アウレディオを騎士団に引き込む事だからな……」

「なんですって？」

聞き捨てならないとばかりにエミリアは声を上げた。

アルフレッドはにやつと何かを企んでいるかのように笑い、しいつと人差し指を自分の唇に当てて。

「アウレディオには言わないでくれよ。あくまでも俺の付き添いで事で話してるんだからな」

コクコクと頷くエミリアに、それでよしとばかりに大真面目な顔

で、アルフレッドは頷いた。

「あいつ、庭師見習いをやってるんだって？　騎士団補講の模擬試合では優勝したってのに？　どうして？」

エミリアにはすぐにアルフレッドに返答を返す事が出来なかった。それについてはアウレディオ本人に聞いてみた事もあるが、
へ小さな頃から庭師になりたかったから。それが俺の夢だから。お前だって知ってるだろ？」

とあっさりと答えられた。

そのよどみなさにかえって不自然さを感じながらも、エミリアにはそれ以上追求する事は、やっぱり出来なかった。

「分からない」

力なく首をふるエミリアの栗色の頭を、アルフレッドはポンと叩いた。

「悪い。気にするな。エミリアを責めてるわけじゃないんだ。分からないいんだったら……俺が今日日本音を引き出してみせるから」
頼りがいのある笑顔を向けられ、エミリアの心はふっと軽くなった。

「面白そうね。私も見学しようかしら？」

言うが早いか、フィオナは膝の上に広げていた今日の分の仕事を、すでに片付け始めている。

「フ、フィオナ？　最近まとめてお休みしちゃったし……いきなり今日休むっていうのはさすがにアマンダさんだって怒ると思うんだけど……」

不安げに取り成そうとしたエミリアは、すぐ後ろで響いた声に、飛び上がって驚いた。

「構わないよ。なんなら今日は店を閉めて、あたしもその試験とやらを見に行くから」

いつの間に背後に立っていたのか、アマンダ婦人はすかさず店舗の入り口の扉に「本日店休日」の札を下げに動き出す。

「リンデンの街の貴公子が騎士団の試験を受けるなんて聞いたら、

今日はもう仕事になんてならないね。そこの男前さん……極秘情報をありがとう」

女将とがっちりと握手を交わしたアルフレッドは、いかにも愉快そうだ。

「お役に立てて光栄です」

「さあ、だったら早く出発するよ。うるさいのがやって来る前に早く！」

アマンダ婦人にせき立てられて、エミリアとフィオナとアルフレッドは店を出た。

試合が行われるという城に向かって、歩き出す。

「マチルダとミゼットに連絡しなくて良かったのかな？」

エミリアは振り返らずにはいられなかったが、アマンダ婦人は顔の前で大きく手を振った。

「いいんだよ。あの娘達を連れ来ちまったら、きやあきやあ悲鳴を上げて、かえってアウレディオの邪魔になっちまうだろう？」

「確かに」

淡々と返すフィオナの言葉に、エミリアは心の中だけで同意した。それでも――。

（ごめんねマチルダ。ミゼット！）

やっぱり二人には申し訳なく思わずにはいられなかった。

第六章 本当の気持ち 3

城の前は想像以上の人でごった返していた。

数日前までは良く見慣れた場所だった通用門の前。

エミリアが辺りを見回していると、本当によく見慣れた人物がこちらに向かって手を振りながらやって来る。

「ランドルフ様！」

エミリアは笑顔で駆け出した。

「やあ。今日の受験者の中にアウレディオの名前があったから、もしかしてと思ったんだが、どうやら本人に間違いないようだな」

ランドルフは軽く膝を折ってエミリアとフィオナに挨拶し、それから初対面のアルフレッドに目を向けた。

「そちらは？」

「私も今日の試験に挑戦します。アルフレッド・マルレヴです。よろしく願いいたします」

きりりとした表情と堂々たる体躯。好ましそうな目でアルフレッドを見るランドルフの様子が、エミリアは嬉しかった。

「そうか。ではこちらに……エミリアとフィオナ、それからそちらのご婦人は、また後ほどお会いいたしましょう」

優雅に微笑んで去って行くランドルフとアルフレッドの背中を見送って、人込みに目を向けたエミリアは、その中に淡い金髪を見つけた。

（ディオ！）

離れていても、こんなに大勢の中にいても、どうしてエミリアはすぐにアウレディオの姿を見つける事が出来るのだろう。それはエミリア自身にも分からない。それはもう、どうしてもそうなんだとしか理解しようがない。

気付くはずもないと思った遙かな距離。しかしアウレディオは迷う事もなく真っ直ぐにエミリアを振り返った。

よく晴れた日の空の色にも似た蒼い瞳が、確かにエミリアの姿を捉える。

「ディオ！」

喜び勇んで手を上げたエミリアから、しかし次の瞬間、アウレディオは視線を逸らした。そのまま二、三步前進し、人込みに吞まれて見えなくなっていく。

エミリアは意味の無くなった手を下ろし、反対の手のてのひらと一緒にしてぎゅっと握り合わせた。

歯を食いしばって必死に我慢していないと、涙が溢れてきそうだった。

「どうしたのエミリア？ どこにアウレディオがいた？」

フィオナが問いかけて来たが、エミリアは歪んだ表情を見られる事が嫌で深く俯き、

「ううん。見間違いだったみたい……」

力なく答えるのが精一杯だった。

「じゃあ、もう少し近くに行く？」

「うん」

歩き出すフィオナとアマンダ婦人の後ろについて、痛む胸を気にしないようにしながら歩いていくのがやっとだった。

「どうやら決勝は、リンデンの貴公子と、余所から来たっていう見慣れない美丈夫が競うらしいぜ」

何もしないでも自然にもたらされる情報——噂話によって、エミリアは模擬試合の決勝戦が、アウレディオとアルフレッドで行われるらしい事を知った。

そこに至るまでの経過で、アルフレッドの騎士団入団はほぼ確定的だとは言え、やはり最後は勝って締め括りたいものだろう。

「ふーん。二人ともやるもんじゃない」

「これはどっちを応援したののかねえ。一躍時の人となったアルフレッドかい？ それともやっぱりリンデンの貴公子アウレディオかい？ うーん迷うねえ」

アマンダ婦人の言葉は、そのままエミリアの心だった。

試合が終わる度にわざわざ報告にやって来るアルフレッドに関しては、もう私設応援団のような気持ちでいる。

アウレディオについてもそれは同様なのだが、アウレディオはついに昼食の時間にも、エミリア達のもとには近付かなかった。

へ一緒に行くこうって誘ったんだが、用事があるとか言っていないくなつたんだよね」

へそう。じゃあ仕方ないわね」

アルフレッドもフィオナもアマンダ婦人も、あまり気にしている様子ではなかったが、エミリアは気になって気になって仕方がなかった。

なぜなら朝から一度として、アウレディオがエミリアと視線を合わせようとしないのである。

いつもはどこにいても、口以上にあの大きな瞳で、エミリアに話しかけて来るアウレディオが、今日は目を合わせようもしない。

（どうして？ 何で？ 私何かした？）

気になって仕方が無いが、訳を尋ねる事も出来ない。

（こっち向いてよ、ディオ）

こっそりと願う気持ちはまるで片思いのようで、切なくて苦しくて泣きたくなる。

（こっち向いて）

今まで当たり前のように向けられていた視線がなくなるという事が、どんなに辛い事なのかをエミリアは知った

第六章 本当の気持ち 4

最後の決勝戦が始まるまで、とうとうアウレディオはエミリア達の前に姿を現す事は無かった。

「これで心おきなくアルフレッドの応援が出来るじゃない。つまりアウレディオは敵」

フィオナのように割り切る事は、エミリアには出来そうにも無かった。

大きな歓声に包まれて、軽鎧に身を包んだ二人が広場に現れる。兜に赤い羽根飾りを付けている方がアウレディオ。緑の方がアルフレッド。

わざわざ教えてもらわなくても、エミリアにはすぐわかる。

昔からエミリアにとってはアウレディオはアウレディオ。アウレディオじゃない方が相手の誰かだった。谷よりも深いその差に、我ながら愕然とする。

「頑張れ……二人とも……」

アルフレッドに対する罪悪感からか、とても届きそうにはない声で、公平な応援を心がける。

間違ってもこんな所で、どちらかに対して『天使の時間泥棒』を使う訳にはいかなかった。

二人が持つ幅広の剣が激しくぶつかり合う音が響き、人垣の向こうで試合が始まった事をエミリアは知る。

見物人の頭だらけで、二人の姿が良く見えないぐらいがちょうど良かった。そうでなければエミリアは、自分がこれまで誰を見て来たのか。いつも誰を捜しているのか。知りたくなかった結論に、きつと辿り着いてしまう。

(そんなの嫌だ……)

自覚の後に待っている別離が見え隠れして、とても素直に受け入れる事など出来ない。

ガキンと大きな音がして、人垣の向こうでワツと歓声が起こる。どちらかの剣が折れたらしかった。

気になりながらも動く事の出来ないエミリアに、

「アルフレッドが優位に立ったみたいよ」

フィオナが聞きたかったような聞きたくなかったような情報を、知らせてくれる。

エミリアは両手をぎゅっと握り締めた。

（ディオ！）

思わず呼ばずにいられない名前を、心の中だけに押し留める。

フィオナがそんなエミリアの肩に手を置いて囁いた。

「アルフレッドが優位だっていうのに、あんまり嬉しくなさそうね」
ドキリとしたエミリアは慌てて、「そんなことないよ」と生返事した。

けれどそんな上っ面の返事はフィオナには通用しない。

じっとエミリアの周りの空間に視線を向けながら、「そんなにアウレディオが気になる？」とフィオナが呟いた一言が、エミリアの心に刺さった。

もう一度「そんなことないよ」と言い返そうとしたが言葉にならない。

フィオナは神秘的な光を放つ瞳を和ませて、いつになく優しく微笑んだ。

「エミリアのいいところはね……嘘がつかないところよ」

今まで自分の中で渦巻いていた様々な感情に、確固たる答えを与えられたような気がして、エミリアは足がガクガク震えるのを感じた。

試合はいつの間にかアウレディオの方が優勢になっていて、今度

はアルフレッドの事を応援したい気持ちにも駆られたが、エミリアの耳には、不思議と何の音も聞こえなくなった。

（まずいなあ……そういえば昨日、あんまりよく寝てないんだった……）

ぼんやりとそう思ったのと、実際に体の力が抜けてエミリアがその場に崩れ落ちたのは、ほとんど同時だった。

地面に倒れ込む寸前に誰かが走り込んで来てくれて、頭を打ち付けるのだけは免れる。

薄れていく意識の中で、エミリアはそれをアウレディオだと思った。ようやく傍に来てくれたので、いなくなってしまうないように首に抱きついて、

「ディオ、何か私の事怒ってる？」

朝からずっと気になっていた事を尋ねてみる。

栗色の頭に頬を寄せるようにして、

「いいや。怒ってないよ」

返事してくれた声は、確かにアウレディオのものであったので、エミリアはやっと心から安心した。

「良かった」

途切れていく意識の中、アウレディオの腕がますます強く自分を抱きしめたような気がした。

第六章 本当の気持ち 5

騎士団の宿舎に設けられた医務室でエミリアが目を覚ましたのは、もう窓から夕日が差し込むような時間だった。

模擬試合の決勝が行われていたのは昼過ぎの事だったので、かなり長い時間眠っていた計算になる。

医療衣を着た医師からは、やんわりとたしなめられた。

「睡眠はきちんととらないといけませんよ」

目隠しにもなる衝立ての向こうから、フィオナが顔を出した。

「どうやらやつとお目覚めのようなね、お姫様。エミリアが倒れた後、それはそれは大変な騒ぎだったのよ」

にやりと唇の端を吊り上げるフィオナは、珍しく嬉しそうに事の次第を報告してくれた。

倒れたエミリアを抱き止めてくれたのは、やはりアウレディオだったらしい。

丁度アルフレッドの喉元に、折れた剣の先を突きつけた直後、エミリアの元へと走り込んで来た。

地面に倒れる寸前のエミリアを、文字通り身を呈して、滑り込んで助けた。

周りにいた観客達は突然の出来事に大騒ぎだったし、その後すぐアルフレッドも走り込んで来たので、騒ぎはいっそう拡大した。

アルフレッドはエミリアを、自分が医務室まで運ぶと言い張ったらしいが、アウレディオにしがみ付いたエミリアが、どうあっても腕を解かなかったので、そのままアウレディオが運ぶ事になった。

「あんなに遠い所から、それも試合中に、隣にいた私よりも先にエミリアの変化に気付いたのよ。二人とも異常だわ」

フィオナの呟きになんと答えていいのかわからず、エミリアは黙り込む。

あまり居心地のいいものではない静寂は、医務室の扉がトントン

と叩かれた事で破られた。

用があるからと部屋を出て行った医師と入れ替わるようにして、入って来たのはアルフレッドだった。

「私もちよつと席を外すわ」

気を利かせたつもりでフィオナがいなくなって、部屋の中はエミリアとアルフレッドの二人きりになる。

けれどエミリアの目は、垣間見えた扉の向こうの廊下に、淡い金髪の人物が佇んでいる事を見逃しはしなかった。

「エミリア、大丈夫か？」

心配そうに眉を寄せるアルフレッドに、エミリアはこつくりと頷き返す。

アルフレッドは今朝までと同じ、優しい眼差しを向けてくれたが、その中にどうしても消せない暗い色が生まれたような気がして、エミリアは心が痛んだ。

「アル……私ね……」

言いかけた言葉を彼は聞きたくなかったらしい。

首を振って子供みたいに拒否しようとする。

けれどフィオナの言う通り、やっぱりエミリアには嘘がつけない。

「ごめんね……」

寝台の上に座ったまま、深々と頭を下げるエミリアを、アルフレッドは見下ろして呟いた。

「聞きたくないよ」

今度は声に出して言って、エミリアの肩に手を掛ける。

もの凄い力でその肩を抱き寄せながら、

「ずっと好きだったんだ」

苦しげな声で、絞り出すようにそう告げた。

エミリアにはアルフレッドの気持ちが痛いくらいによく分かった。切なくて苦しくて、エミリアの心までキリキリと締め付けられるように痛い。

それでもやっぱり、エミリアは嘘がつけない。

「アル……私……」

それがアルフレッドを傷付ける結果になろうとも、その事で自身も傷つこうとも、エミリアは心を強く持って、真実を告げようとした。

しかしそうはさせまいとするアルフレッドの顔が、エミリアの顔にどんどん近付いて来る。

自分の唇で、エミリアの言葉を塞ごうとしているアルフレッドの決意が、エミリアにも伝わった。

「ま、待ってアル！」

（これでもしアルがミカエルだったら、元の姿に戻っちゃう！ したら違う世界に行っちゃって、もう二度と会えなくなつて、そんなのって……！）

頭の中を渦巻く様々な思い。でもそれよりも何よりも、涙が出そうな思いで、たった一人の顔が胸に浮かぶ。

（このままじゃアルにキスされちゃう……そんなの嫌！）

エミリアは心の叫びを、最後の部分だけ感情に任せて実際に口にした。

「ディオ！」

言った本人が一番驚いた。

ピタリと動きを止めたアルフレッドも息を呑んでいる。

（馬鹿だ！ 私本当に馬鹿だ！ こんな事にならないと分からないなんて……今さら遅いよ！）

エミリアが両手で顔を覆った瞬間、医務室の扉を蹴破るようにして、本当にアウレディオが飛び込んで来た。

淡い金色の髪は乱れ、白い頬にも腕にも、ひどい傷がある。

蒼白にも見えるほどの真剣な顔で、真っ直ぐにアルフレッドにじり寄りながら、彼は固く引き結んでいた口を開く。

「アルフレッド……悪い。やっぱりエミリアだけは、あんたにも渡せない！」

気が付いた時には、エミリアの体は勝手に動き出していた。

寝台を滑り降り、まっしぐらにアウレディオに走り寄る。

「ディオ！ デイオ！ デイオ……！」

待ち構えていた腕にしっかりと抱き締められて、そこで初めて、エミリアは自分が震えていた事に気がついた。

アウレディオの肩口に額を押し当てて、涙の止まらないエミリアに視線を向け、アルフレッドはポツリと呟いた。

「分かってるよ、そんな事。十年以上前からずっと」

はああっと大きなため息をついて、決まり悪そうにポリポリと頭を掻き始めたアルフレッドの様子に、なんだか不思議なものを感じて、エミリアはアウレディオの腕の中、涙を拭き拭き振り返った。

「まったく損な役回りだよな……ごめんなエミリア。びっくりした
だろ？」

たった今失恋した割にはあまりにもあっけらかんとした声で、アルフレッドはエミリアに向かって両手を合わせる。

その様子にエミリアは首を捻った。

(……………?)

次の瞬間、アウレディオは目を剥いて、エミリアの体を自分の体から引き離れた。

「まさか、ひっかけたのか！」

「「その通り」」

アルフレッドと同時に答えを返し、アウレディオが破壊した扉の向こうから姿を現したのはフィオナだった。

「エミリアの好きな人なんてどう考えたってアウレディオに決まってるのに、当の本人達が見当違いな方向ばかり捜すから、私がアルフレッドに頼んだのよ」

あまりの出来事に、エミリアは開いた口が塞がらなかった。

アウレディオにしがみ付いていた手を慌てて放す。

「ほらね。下手に身近なものだから、意地を張っちゃってなかなか素直に好意を示せないでしょ？ こういう場合は荒療治が効くのよ

……」

「フィオナ……！ アル……！」

エミリアの手が次第に震え出してきた。
もちろん最大級の怒りによってである。

察しのいいフィオナはエミリアの周囲にぐるりと視線を巡らし、
即座に彼女に背を向ける。

「……それじゃ、私はこれで」

「じ、じゃあ俺も……」

アルフレッドもそそくさと部屋を出て行く。

「ちよっと待ってよ！」

二人を追いかけようとしたエミリアは、後ろからふわっとアウレ
ディオに抱きすくめられた。

「もういいよ。いいだろ？ ……エミリア」

ため息混じりではあったが、いつになく優しい声で名前を呼ばれ
て、思わず泣きそうになった。

（ああ、私はやっぱりディオが好きだ……）

改めて自覚して、この後に待つ事態を想像して、だからこそここ
は素直に、認めたくはなかった。

第六章 本当の気持ち 6

「やっぱり結局こうなるのか……」

すぐ背後からアウレディオの声が聞こえる。

息がかかりそうなほどの距離。

肩からすっぽりと抱きすくめられている体も、背中に感じる確かな温もりも、眩暈を起こしそうなくらいドキドキが止まらないのに、まるで何か不満でもあるかのようなアウレディオの言い方はなんなのだろう。

甘い気持ちもどこへやら、ムツと体ごと振り返ったエミリアに、アウレディオは

「いてててて」

と小さな悲鳴を上げた。

向き合う距離がこれまでより近い事には、相変わらず胸が鳴るのだが、しきりに腕をさするアウレディオにはついついいつもの調子で、

「どうしたの？」

と素っ気無く聞いてしまう。

それで甘い雰囲気はもうお終い。

幼馴染同士なんて、結局こんなものなんだと、エミリアは少し残念に思った。

アウレディオはシャツの袖をめくって、右腕を見せてくれた。

手首から肘にかけて、かなり大きな傷が出来ている。

「何？ 痛そうだね」

思わず顔をしかめたエミリアに、アウレディオはまた大きなため息をついた。

「突然倒れた誰かさんを支えるために、腕から滑り込んだんだよ」

（あ、そう、私のせいですね……）

エミリアは申し訳なさに首を竦めた。

「消毒しなきゃね」

道具を捜そうとしたエミリアの手を掴み、アウレディオは自分の傷の上にかざす。

「それよりこうしてて」

傷に触れた所から、エミリアの手は異常に熱くなって、白く輝き始めた。

その眩しさに目を眇めながらも見てみれば、てのひらの下ではたちまち傷が消えていく。

すっかり綺麗になったアウレディオの腕と、自分の手を見つめるエミリアに、アウレディオは、

「やっぱりエミリアにも出来た」

と感慨深げに呟いた。

言葉の意味から推測すると、以前にもやってもらった事があるのだろうか。

あるとしたら間違いなく、それはエミリアの母にだろう。

「『天使の癒しの手』って言うんだってさ。この間リリーナに教えてもらった。お前っていろいろと天使の能力が使えるから、ひよつとしたら出来るんじゃないかって、前から一回試してみたかったんだ」

まるで目新しい発明品か何かのように表現されて、エミリアはムツとした。

「あっそ」

素っ気無く答えて、さっさとアウレディオに背を向ける。

「エミリア」

少々腹を立てているのだから、改まって名前を呼ばれても、わざとぶっきらぼうに返事する。

「何？」

「キスしようか」

あまりの唐突さに、エミリアは勢い余って、寝台の天蓋を支える支柱におでこをぶつけてしまった。

「おい大丈夫か？」

呑気な声をかけられて、がばっとアウレディオを振り返った。

いつの間にか寝台の上に腰を下ろしていたアウレディオは、優雅な顔で微笑んでいる。

ずい分長い間封印していたそんな顔を、今この時、真っ直ぐに向けてくるなんて反則だ。

切なさにもた涙が溢れそうになって、エミリアは俯く。

「ディオ……自分がミカエルだと思ってるの？」

涙混じりのエミリアの声に、アウレディオは困ったように、曖昧な笑顔を返した。

「だってお前がそう言ったんだ」

「私が？」

「そう。四歳ぐらいだったかな……？ まだじいちゃんが生きてたから。一緒にお風呂に入ってて、お前が言い出したんだ。ディオの背中にはお星様があるって。じいちゃんもそう言えばそう見えるね、なんて言ってたから……多分間違いないだろう。この間偶然思い出したんだけどさ……」

あまりの事にエミリアは開いた口が塞がらなかった。

「い、一緒にお風呂って……！」

「小さな頃の話だろ」

事も無げに言って除けるアウレディオに、エミリアは言いよどむ。

「それはそうだけど……私、全然覚えてないよ……！」

頭を抱えたいような気分だった。

アウレディオは軽く頷いて、何かを決意したかのように上着を脱ぎ始める。

「ち、ちよっと！ 何やってんのディオ！」

真っ赤になって飛び上がったエミリアに、

「今さらだろ」

と脱ぎ捨てたシャツを渡し、白い背中を向けた。

くっつきりと浮き出たアウレディオの肩甲骨の間には、確かに赤い

星のような痣があった。

泣きたいような気持ちで俯いたエミリアに、アウレディオは脱いだ時と同じように手早く服を着ながら語り続ける。

「多分リリーナは知ってたんだと思う。知っててお前がどうするか、俺がどうするかを見てたんじゃないか？ リリーナ自身がミカエルを捜している所なんて、見た事ないだろ？ 最初っから、リリーナの仕事は俺の監視だったんだよ」

そう考えると全てに納得がいった。

納得はあったけれど、気持ちの方はついていけない。

着替え終わってエミリアを振り返ったアウレディオは、彼女がまたポロポロと泣き出している姿を見て、腕を伸ばした。

「まったく……しょうがないな」

口では悪態を付きながらも、胸の中にしっかりと抱き締める。

「泣かなくていいよ。お前の前からいなくなるのは俺一人だけだ。これからはずっとリリーナがいてくれる。フィオナだっているだろ？ せっかく知り合いになったんだから、時々はお城に行って、ランドルフやフェルナンド王子にも会えばいい。きつと喜ぶぞ……」

（嫌だ……）

意思表示のために、エミリアはアウレディオの腕の中で首を横に振る。何度も何度も。

「楽しい事がいっぱい俺の事なんてきつとすぐに忘れるって……」
言葉に反してエミリアを抱き締めるアウレディオの腕は、痛いくらいに強い。

その事実が、張り裂けそうなエミリアの胸を、さらに締め付ける。
（嫌だ……嫌だ……）

「それにお前はきつともう一度恋をする。今はあんなふうに茶化してるけど、本当はずっとお前を思ってきたアルフレッドに、きつともう一度恋をするよ」

エミリアは気が遠くなるくらいに首を振った。

（そんなの……嫌！）

アウレディオはいつでも、誰よりもエミリアの事を分かってくれる。

エミリアの自分でもよく分からないような気持ちにも、ちゃんと答えをくれる。

——でも一番大事な事だけは、どうしても分かってくれない。

（私が好きなのはディオなのに！ 一番そばにいて欲しいのはディオだけなのに！）

アウレディオがそれだけは決して「うん」と言わない事が、エミリアには自分でも分かっている、だからこそ尚一層、涙が止まらなかった。

第六章 本当の気持ち 7

家に帰り、持ち帰った仕事をしていても、母の手伝いをして夕食の準備をしていても、ともすれば涙が零れ落ちそうだった。

母に余計な心配をかけないように、精一杯元気なふりをしながら、エミリアは、

（そう言えば、私っていつもこうだ……）
と気が付いた。

周りに心配をかけたくないから。可哀想だなんて思われたくないから。精一杯肩肘を張って生きて来た。

（そんな私が笑ったり怒ったり……いつだって本当の感情をぶつけられる相手がディオだったんだ……）

考えるとまた泣き出しそうになってしまうので、エミリアは慌てて首を振った。

もう泣かないと決めた。

アウレディオはエミリアがどんなに止めても、絶対に自分で決めた事をやり通す。

エミリアは誰よりもその事をよく知っている。

だからアウレディオはアウレディオのやりたいようにすればいい。

エミリアもエミリアのやりたいようにする。

凄い形相で野菜を切っていたエミリアに、母がふんわりとした笑顔で声をかけた。

「エミリア。そろそろアウレディオを呼んで来たら？」

エミリアは、「うん」と頷いてエプロンを外し、母に向き直った。息を吸い込んで、予め用意していたセリフを口にする。

「お母さん……私ミカエルを見つけたから……だからこれから本当の姿に戻してくるね」

母は翠色の瞳をこれ以上はないほど見開いて、みるみる大粒の涙を浮かべた。

「エミリア……それって……」

それ以上出て来ない母の言葉を汲み、エミリアはしっかりと頷く。「うん。ディオは頑固者だから、絶対に気持ちを变えない。自分一人がいなくなれば、それでいいんだって思ってる」

母はただうんうんと頷く事しか出来ないようだった。

エミリアは懸命に、自分の本当の気持ちを語った。

「でも私は嫌だから……私だってディオに負けないくらい頑固だから、どうにか頑張ってくるね。お母さんだって決して諦めずに、何年もかかってお父さんの所に帰って来たんだもんね。私だってお母さんの娘だもん……!」

母は首が千切れんばかりに頷いてくれる。

「じゃあ行ってくるね」

背を向けたエミリアに、母はやつとの思いで、かすれた声を絞り出した。

「ごめんね。エミリア……ごめんね……」

優しい優しい声だった。

エミリアはいつもアウレディオがそうするように、母の方を振り向かないで後ろ手に手を振った。

泣きそうな顔を見られたくなくてそうしたのだったが、意地っ張りなアウレディオがいつもそうやっていた理由も、同じではなかったのかとふと思に至る。

（本当に、格好つけたがりなんだから……）

もうすぐ失ってしまうという今になって、アウレディオの仕草、言葉、姿、これまで一緒に生きて来た年月、その全てがエミリアには愛しかった。

アウレディオは自邸の庭園で、漕ぐでもなくブランコに座っていた。
月明かりの下でその光景を見たエミリアは、やっぱり彼は人間離

れして綺麗だと思った。

それが本来の色なのか。月の光を受けて金色に輝く髪も、煌めく瞳も、母のような真っ白な翼がそのまま背中にあっても全然おかしくないほどに美しい。

このままずっとこの場所に閉じ込めておきたいと、強く願わずにはいられなかったが、息を潜めていてもエミリアがやって来た事は、もうアウレディオには分かっているだろう。

「ひょっとして来ないんじゃないかと思った」

思った通り、こちらを振り返りもしないで口を開く。

「そんな事したら、ディオは絶対に私の事許さないでしょう？ そんなの嫌だもん」

真正面に回り込んで芝生に腰を下ろしたエミリアを、アウレディオは真っ直ぐに見つめた。

「……ああそうだな」

「だから逃げも隠れもしないで来たわよ」

わざと怒ったように頬を膨らしてみせるエミリアに、アウレディオの表情も緩んだ。お日様のような笑顔がエミリアを見つめる。

「あーあ、ファーストキスが最後のキスカ」

あまりにも照れくさくて冗談のように冷やかしてみたのに、アウレディオは真顔で囁いた。

「安心しろ、俺もお前も二回目だよ。一回目は十年も前に、やっぱりここでしたらう？」

妖しく瞳を煌かされて、エミリアは思わず悲鳴をあげた。

「ええええええっ！」

今度こそ真正正銘、エミリアは開いた口が塞がらなかった。

「どうして……？ ねえどうして私って、こんなに忘れっぽいの！」
「だから、俺の事なんてすぐに忘れるって言ってるだろ」

至極魅力的な笑顔とは裏腹なその言葉だけは、絶対に認めたくなかった。これから先、たとえどんな事があっても――。

「エミリア……目を閉じて」

アウレディオがそつと伸ばした冷たい指先で、エミリアの頬に触れた。

けれどエミリアは、言われた通りに目を閉じたりはしなかった。

「閉じろって」

綺麗な瞳をすぐ近くまで近付けながら、アウレディオは怒ったように呟く。

けれどその顔をしっかりと見返したまま、エミリアは果敢に言い返した。

「そんな事したら、ディオの顔が見えなくなっちゃうじゃない。目を瞑ってる間にいなくなっちゃったらどうしてくれるのよ。そんなの……私は絶対に嫌なんだから！」

アウレディオは、そんなエミリアの怒った顔でさえ愛しくて堪らないというように目を細めて笑った。

「それは……俺も嫌だ」

そして両手で頬を包み込むようにして首を傾げて、宝物のように優しくエミリアに口づ

けた。

第六章 本当の気持ち 8

アウレディオの唇が自分の唇に触れたと、エミリアが感じた瞬間、二人は全身をすっぴりと金色の光に包まれた。

絶対に最後の最後までしっかりと目を開けておこうと思っていたのに、そうは出来ない状況に、エミリアはやむをえず目を閉じた。瞼の裏の眩しさがようやく和らいだ事を確認してから、そろそろと目を開く。

目の前に居たのは、想像していた通りの、金色の髪に蒼い瞳の完璧な天使だった。

（でもディオだ。私には分かる。悪戯っぽい大きな瞳も、お日様みたいな笑顔も、全然変わらないもの……！）

いつまでもその姿を目に焼き付けておこうと、懸命に目を凝らし見つめ続けるエミリアに、アウレディオはなんだか変な顔をしてみせる。

はじめの内は別れの悲しみを和らげようと、彼なりに気を遣ってくれているのかとも思ったが、その鳩が豆鉄砲食らったような表情が、あまりにも長すぎる。

（何？ 何なの？ あまり表情を変えないディオににしては珍しいその顔を、私に一番印象付けようとしても言うの？）

半ば自棄になってそう結論付けながらも、エミリアはだんだん腹が立ってきた。

「あのねえ、ディオ……」

ここはちゃんと諫めておかなければと、口を開きかけた時、自分に異変が起きている事に、エミリア自身も気が付いた。

キスするために頬に添えられたアウレディオの手。その手にそっ

と掻き上げられているエミリアの髪が、栗色ではない。

エミリアは慌てて自分の髪を目の前に持ち上げてみて、それがどこからどこまでも母のような金髪になっている事を知った。

ようやく声を発したアウレディオが、

「エミリア！ お前！ お前！」

と掠れた声で動揺しているところを見ると、どうやら見間違いではないらしい。

そう言えば、腕や足などもアウレディオや母のように若干白くなっている気がする。

動転するアウレディオを問い質したところによると、瞳も母と同じ翠色になっているようだ。

（ディオはともかく私？ どうして私が？）

あまりの驚きで頭の中がぐちゃぐちゃになっているエミリアの上に、その時一筋の光が差し込んだ。

辺りは夜の闇だと言うのに、エミリアの周りだけが昼間のように鮮やかに照らし出される、常軌を逸した状況。

もう驚きの声も出ないエミリアとアウレディオの上に、光の中から現れた人物がふわりと舞い降りた。

「お母さん……？」

掠れた声で呼びかけた娘に凜とした視線を向けたその人は、いつもの柔らかな印象からは想像もつかない威厳に満ちていた。

背中に大きな白い翼を生やし、頭の上には輝く金色のリングを戴く。白いズルズルとした天使らしい衣装は、エミリアが前に想像した数倍、良く似合っていた。

「いったいどうしたの？」

間の抜けた問いかけをしてくる娘に居を正すようにコホンと咳払いすると、母はあでやかに笑った。

「エミリア。ミカエルの覚醒に力を貸してくれてありがとう。そしてあなた自身も覚醒おめでとう。私は大天使ガブリエル。私の娘であるあなたを、ガブリエルの名を継ぐ者として正式に認めます」

「「は？」」

エミリアとアウレディオの発した間の抜けた声が、ピタリと重なった。

母は取って置き決め所が上手く決まらなかった事が不満だったらしく、少し残念そうに口を尖らす。

「だから……！ 私は大天使で、エミリアもその後を継ぐ者で……アウレディオもそうなの！」

あまりにも要領を得ない説明に、アウレディオはふうつとため息をついた。額に手を当

てて、今手に入れたばかりの重要な情報を、順を追って一つ一つ整理する。

「リリーナ、大天使だったのか？」

「隠しててごめんなさい。実はそうなの」

「名を継ぐって？」

「四大天使は、代々自分の子供に名前を引き継ぐって話はしたでしょ？ ミカエルの名を継ぐアウレディオと一緒に。エミリアは私の娘だから、ガブリエルの名を継ぐんでーす」

意気揚々と説明されて、エミリアは思わず叫んだ。

「ちょっと待って、お母さん！ 私、天使なんかじゃないわよ！」

母は大真面目な顔で、腰に手を当てて言い放った。

「いいえ天使です。『天使のお菓子』が作れて『天使の時間泥棒』も『天使の癒しの手』も使える人間なんて、い・ま・せ・ん。それにエミリアは自分の気持ちを犠牲にしてまで、『聖なる乙女』としての任務の方を優先したのよ！ こんなに天使らしい天使は、天界にだってそうそう、い・ま・せ・ん！」

堂々と自信満々に言い切ってくれるその論理には、エミリアは啞然とするしかなかった。アウレディオはふと、大きな蒼い瞳に鋭い色を浮かべる。

「ひょっとしてリリーナ。エミリアの天使としての力量を確かめに

来たのか？ 俺を探し出すなんてのは口実で？」

言いながら段々表情が険しくなっていくアウレディオが全てを言い終わる前に、母は体を大きく二人の方に乗り出して、うんうんと激しく頷いた。

「そう！ そうなの！ アウレディオは私が見つけた十五年前から、とっくに天界の監視下に置かれています……ごめんなさい。私は人間と天使のハーフのエミリアを、天界の人達にもちゃんと私の後継者として認めて欲しくて、あっちに行ったりこっちに来たり頑張ってるの！」

母の返答に、アウレディオは本当に頭を抱えた。

上目遣いにじっと母の話を聞いていたエミリアの怒りがいつ爆発するかと、頭が痛くなつたようだった。

エミリアは唇を噛み締めて、よく感情を抑えていたが、母の説明が終わつたらしい事を受けて、満を持して口を開いた。

「お母さん……言いたい事はそれだけ？」

妙な気迫の込もった声に、母は小さく飛び上がった。

「は、はい！」

「それだけなのね？」

念を押す声に怯えきつた母が、助けを求める視線をアウレディオに向け、アウレディオは「仕方ないな」とばかりに大きくため息をついて、エミリアの背後に近付いた。

「それだけだったらー！」

大声を張り上げようとしたエミリアは次の瞬間、背後からアウレディオに抱きすくめられた。

「エミリア。もういいだろ？ これからも今までどおり一緒にいられるんだから、さ？」

耳元近くで囁かれた声に、エミリアは一気に体の力が抜けた。

（そっか……これからもディオと一緒にいられるんだ。これまで通りの生活……普通に働く日々……）

目を閉じて、目まぐるしかったこの数日間の事を思い浮かべた。

体力的にも精神的にも、エミリアは本当に限界まで頑張った。それと言うのも母と一緒に暮らしたかったから。好きな人と母とを天秤にかけて、あんなに悩んだ事も、これで全て解決したのだ。こんなに嬉しい事はない――。

「……なんて、喜べるわけないでしょう！」

エミリアはカッと瞳を見開いた。

ついに怒りを爆発させたエミリアに、アウレディオは、「やっぱり無理か」と呟き、母は覚悟していたように首を竦める。

「それもこれも全部お母さんのせいじゃない！ お母さんのためにって、あんなに頑張った私はいったいなんだったの？ しかもこんな格好になっちゃったら今まで通りになんて、生活出来る訳ないでしょう！」

「あ、それは大丈夫。二人とも、私が元の姿に戻してあげるから」途中でそんな注釈を入れられても、一度ついてしまった怒りの火に油を注ぐだけである。

「問題はそこじゃないでしょう！ まったくもう！ もうっ！」

言いたいだけ言って俯いたエミリアの頭を、

「もう気が済んだか」

とアウレディオが胸に抱き寄せた。

やっぱり誰よりも自分の事をわかってくれるその腕に抱かれた途端、堰を切ったようにエミリアの目から涙が溢れ出した。

この人を失わなくて済んでよかったと、本当に心からホッとした。

「エミリア……？」

恐る恐る声をかけてくる母にも、しょうがないから涙で滲んだ目を向けてやる。

「ごめんね。でもアウレディオとはずっと一緒だからね。人間界に居ても、この先天界に行っても……」

「そんな所行かないわよ！」

即座に言い返したエミリアと母との間に体を割り込ませ、自らで防護壁を築きながら、アウレディオはため息をつく。

「リリーナ……とりあえずまだ暫くは、先の事は話さないでおいでくれるかな……？」

「暫くじゃないわよ！　いつまで待ったって、私はそんな所、絶対に行かないわ！」

「はいはい」

宥めるようにエミリアの頭を撫でながら、アウレディオは母にそっと目配せした。

余裕たっぷりのその笑顔には、いつかはエミリアの意地だってほだされてしまおうと母は思った。きっと――。

三人は、それから手を繋いで家に帰った。

にこにこ満面の笑顔の母と苦笑いのアウレディオ。そして懨然としたままのエミリア。

母が腕を振るった豪華な食事が冷めてしまわないうちには、仕事部屋にこもっている父も、きっと食堂に下りて来るだろう。

そうしたらみんな揃って、いつもの賑やかな晚餐が始まる。

それはエミリアにとっては、何よりも嬉しい事だった。

楽しい晚餐を仏頂面で台無しにしてしまうのは惜しいので、溜まりに溜まった不満はぐっと我慢して、ここは母にも笑ってみせる事にする。

いつまでも少女のような母と対するためには、ここは自分が大人になるしかない。

「ほんつとに切り替えの早いやつ」

アウレディオの小さな呟きは、幸いな事にエミリアの耳には届かなかった。

けれど、悪態を付きながらもそんなエミリアを見つめるアウレディオの瞳が、どんな時でも優しく輝いている事が、母には嬉しかった。

（この二人ならきっと大丈夫……）

思いを込めて彼女はふふふと笑った。両手を口に当てて、黄金色の髪をふわふわと揺らす。

——その姿は、やっぱり天使そのものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6085r/>

大天使に聖なる口づけを

2011年5月15日23時11分発行